東京大学埋蔵文化財調査室 調査研究プロジェクト 4

医学部附属病院入院棟 A 地点の成果

－ 17 世紀後葉の陶磁器から －

2018 年 9 月 22 日

主催：東京大学埋蔵文化財調査室

会場：東京大学本郷キャンパス　法文 1 号館 215

東京大学埋蔵文化財調査室 調査研究プロジェクト 4

医学部附属病院入院棟 A 地点の成果
－ 17 世紀後葉の陶磁器から －

〔プログラム〕

開会（13:30）

室長挨拶
　佐藤　宏之　（東京大学埋蔵文化財調査室）

主旨説明（13:40 ～ 13:55）
　成瀬　晃司　（東京大学埋蔵文化財調査室）…… 1
　「医学部附属病院入院棟 A 地点の成果
　　－ 17 世紀後葉の陶磁器から－」のねらい

研究報告 1（13:55 ～ 14:45）
　大成　可乃　（東京大学埋蔵文化財調査室）…… 5
　「SK3 から出土した陶磁器に関する一考察」

　　休憩（14:45 ～ 14:55）

研究報告 2（14:55 ～ 15:45）
　成瀬　晃司　（東京大学埋蔵文化財調査室）…… 21
　「天和 2 年火災廃棄資料の 2 側面」

　　休憩（15:45 ～ 15:55）

C2 層出土陶磁器検討会（15:55 ～ 16:25）…… 45
　C2 層出土磁器・陶器・土器図版

　　休憩（16:25 ～ 16:35）

講演（16:35 ～ 17:35）
　高島　裕之　（専修大学文学部）…… 57
　「C2 層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術」

閉会（17:45）

－主旨説明－
「医学部附属病院入院棟 A 地点の成果－ 17 世紀後葉の陶磁器から－」のねらい

成瀬 晃司

「医学部附属病院入院棟 A 地点」の調査は、約 6,400 ㎡を対象に、1994 年 6 月から 1996 年 6 月にかけて実施された。本調査地点は本郷台地縁辺の緩斜面上に位置するため、江戸時代を通し繰り返し行われた盛土造成によって最大 8 面の遺構面が確認され、遺構総数約 3600 基、遺物量約 3000 箱という膨大な資料が得られた。その成果は『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　報告編』および『同研究編』（東京大学埋蔵文化財調査室　2016）として公にした。

本調査区は講安寺寺域に属する東縁の一画を除き、大半が加賀藩邸に比定される。加賀藩は大阪の陣後の元和 2・3（1616・17）年に本郷邸を拝領する。その後寛永 16（1639）年に附属病院地区の大半が分家した富山藩、大聖寺藩の上屋敷として宗家から貸与された。本調査区は文献、絵図資料と石組溝、塀列などの境界関連遺構との比較から、天和 2 年 12 月の火災（八百屋お七の火事）までは、支藩上屋敷が建設された結果、飛び地となった加賀藩黒多門邸に、天和 3 年 3 月以降幕末までは、火災後の復旧に伴い敷地区画が大きく変更された大聖寺藩邸に比定される（2 図）。

本調査区で確認された大規模土木事業痕跡は、緩斜面地を盛土及び切土による雛壇造成で平地化した黒多門邸段階と、天和 3 年の区割り変更によって東西方向に長い長方形区画になったことを受け、西側の高標高区域に合わせるために東側を盛土造成した大聖寺藩邸区画変更初期段階（天和～元禄段階）が際立っており、大名屋敷としての基幹開発は、17 世紀末までにほぼ整備された。その後も火災や空間構造の改変に伴い盛土造成事業痕跡は認められ、さらに本郷キャンパス設立以降の大規模開発による造成事業が加わり、17 世紀段階の遺構面は厚い所では現表下約 3m に達する。そのため重量建造物躯体基礎堀方など以外では、近代以降の撹乱の影響を免れた範囲が多く、遺構、遺物ともに比較的良好な資料が得られた。本会では膨大な出土資料のうち、天和 2 年の被災資料とその後の再開発関連遺構に廃棄された資料を取り上げ、17 世紀後葉段階に藩邸内で用いられた陶磁器の諸相から御殿空間および詰人空間向けに誂えられた製品の指向性を生産地資料との比較を含めて評価することを目的とする。

今回取り上げる資料は、D 面焼土および C2 層から出土した天和 2 年の被災資料と、天和 3 年の大規模造成事業の直後に掘削された大形採土坑 SK3 の廃棄資料である。

D 面焼土出土資料は、黒多門邸勤番武士長屋遺構面を覆った焼土層出土資料である（2 図 a、3 図）。焼土層直下からは、その規模と構造から下級武士居住長屋と評価される遺構群が検出された。本遺構群形成整地層から寛文 8（1668）年初鋳とされる新寛永通宝文銭が出土していることから、長屋の経営期間は寛文 8 年～天和 2 年に限定され、出土資料もその範囲内での日常品と評価される。

C2 層出土資料は、天和 3 年の地割り変更に伴う大規模盛土造成土（C 層）出土資料である。C 層はロームブロック主体の造成土で調査区全域で確認されている。特に 2 図 a の D 面焼土検出範囲南端部は南北方向の雛壇造成の段差部分にあたり、北側が下段として造成されたため、D 面焼土検出範囲に向かい厚みが増す。この C 層造成範囲のうち 2 図 b に示した 3 箇所でロームブロック主体層に挟まれ、焼土主体の C2 層が検出された（3 図 a、b）。すなわち C2 層は、使用区域（者）と直接結びつく D 面焼土と対象に、盛土造成に乗じた瓦礫廃棄層と位置づけられ、調査時には被災場所の特定には至らなかった。しかし本調査の半年後に調査が開始された医学部教育研究棟地点で、天和 2 年の火災に比定される遺構面直上焼土層から C2 層出土資料類似製品が出土し、そのうちの数点が C2 層出土資料と接合したことにより、医学部教育研究棟地点周辺で被災した資料が、火災後の瓦礫整理で本調査区まで搬出されたことが証明された。医学部教育研究棟地点は絵図資料から天和 3 年以降は上屋敷御殿空間の中奥に位置し、火災以前の下屋敷段階も遺構配置や江戸図屏風情報などから御殿空間に属する区域であると評価され、本資料が加賀藩御殿空間で使用された一群であることが確認された。

SK3 は C 層造成後に掘削された大形採土坑である。巨大遺構であるにも関わらず、覆土は泥炭層一色で埋め尽くされていることから、埋め戻しにあたり特定の場所から搬入されたことが推定される。覆土の特性から木製品も良好に遺存し、製品類とともに木っ端、鉋屑などの建築廃材が多量に含まれていることから、火災後の建造

物復旧と平行して埋め戻しが行われたことが窺われる。本遺構埋め戻し完了後に表層はローム土で整地され（3図c、CR1、2）、整地面上からは池、植栽痕などが検出され、この区域に藩邸内庭園が作庭されたことが確認された。さらに庭園廃絶後に盛土されたA層中から元禄16（1703）年の火災に比定される被災資料廃棄層が検出されたことから、庭園の下限が押さえられた。泥炭層は4層に大別されるが、いずれもブロック状を呈していること、坑底のローム層が水性化していないことから、埋没過程で自然発生的に泥炭化したとは考えられず、他所で掘削された泥炭土が、SK3へ運び込まれた人為的埋積土と判断された。また出土資料には坑底直上と覆土上層など層位間接合資料が少なくないことから、湿潤地への廃棄後に、土砂移動とともにSK3へ二次廃棄された資料が一定量含まれていると考えられる。それらには被災痕跡が認められず、天和2年火災以前の廃棄資料と括ることができる。その一方で先述した建築廃材などと共に火災後に廃棄された一次資料も存在し、出土資料の廃棄年代に二つのピークが存在していることが確認される。

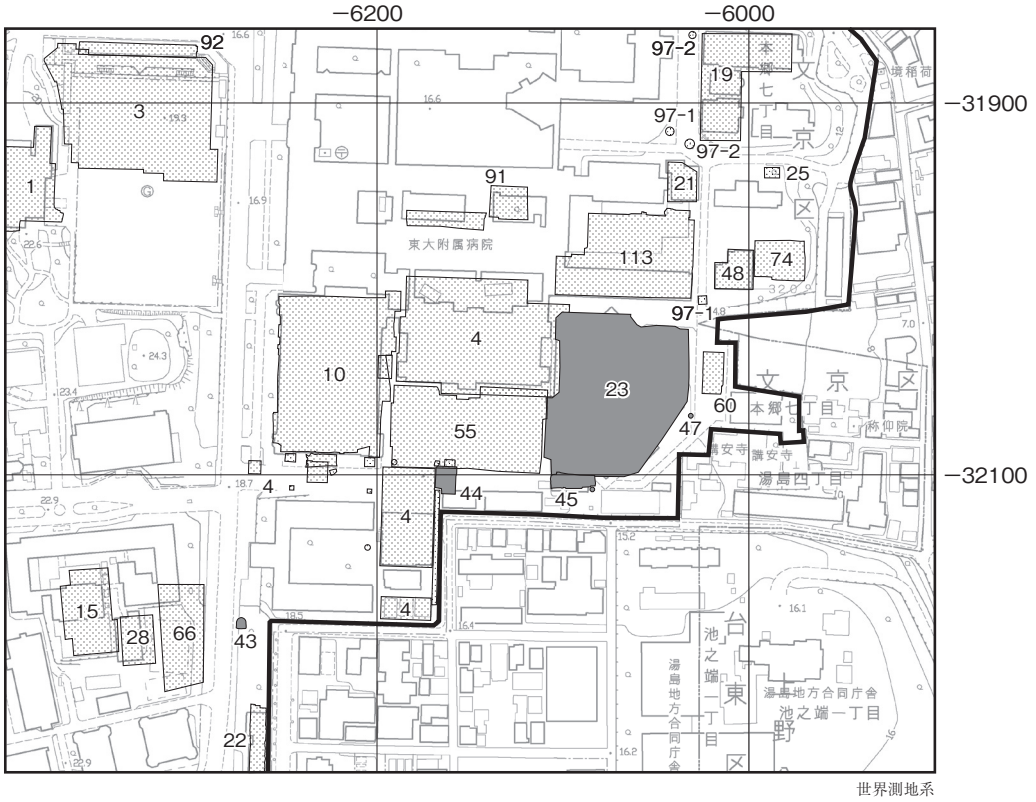
SK3出土資料は、遺構の規模・性格・廃棄状況から、D面焼土、C2層出土資料のように、資料自体には使用場所、用途の特定する属性は有していないが、2者との比較から、17世紀後葉における藩邸内使用陶磁器の様相を窺い知る資料と評価できる。

以上、本調査区から出土した17世紀後葉の3様の資料を対象に、組成、属性評価などの研究成果に加え、特にC2層出土資料に関して、永年、南川原窯ノ辻窯跡資料を中心に研究されている専修大学・高島裕之氏から、製作技術を視点とした生産地資料との比較を通し、評価を試みたい。

【参考文献】

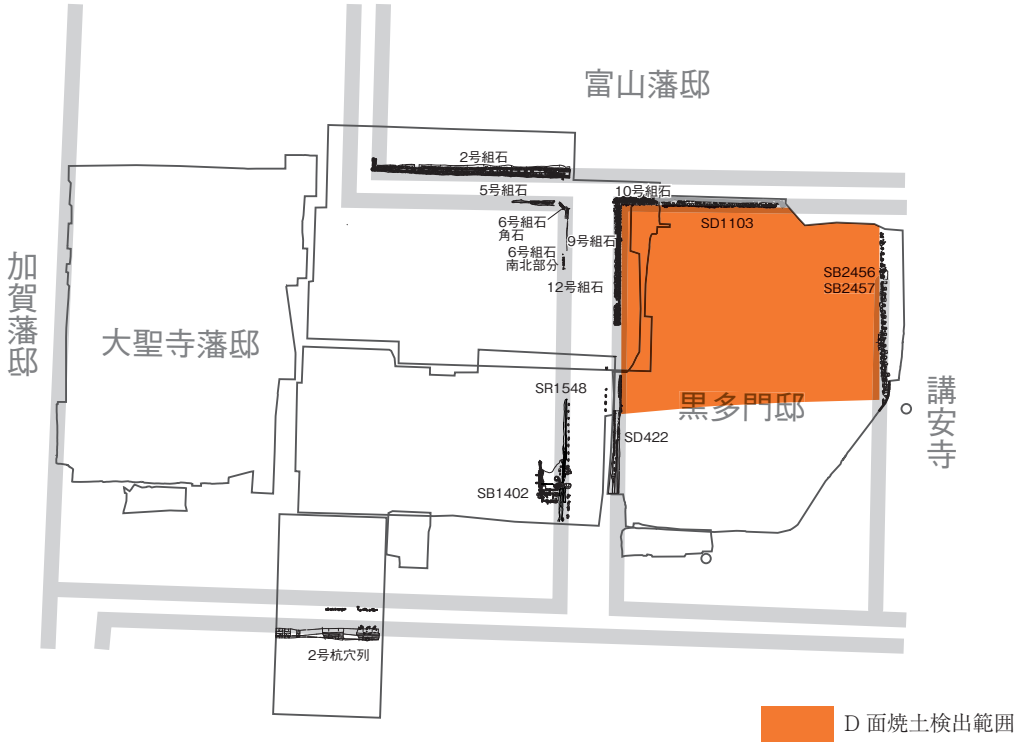
東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟A地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟A地点　研究編』

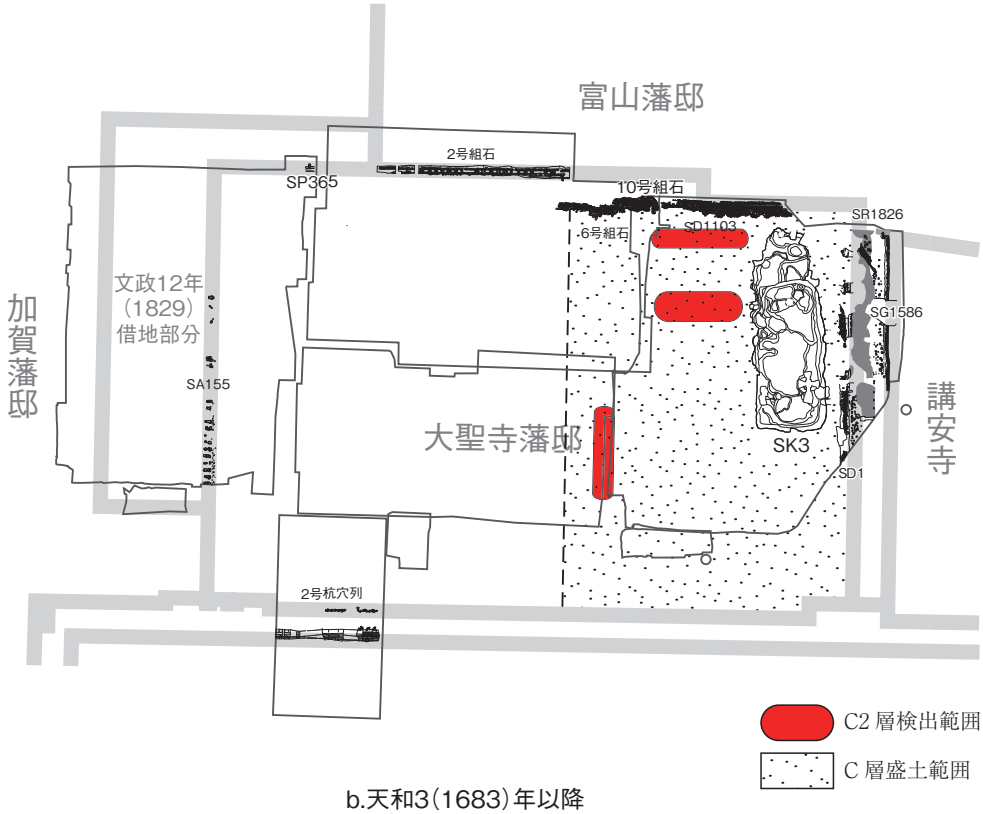


1図　調査地点の位置（S=1:4000）

23医学部附属病院入院棟A、43～47医学部附属病院基幹整備共同溝等、1山上会館、3御殿下記念館、4医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝、10医学部附属病院外来診療棟、15薬学部新館、19医学部附属病院看護師宿舎Ⅰ期、21医学部附属病院MRI-CT棟、22山上会館龍岡門別館、25医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場、28薬学部資料館、48医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期、55医学部附属病院第2中央診療棟、60医学部附属病院基幹整備外構施設等、66薬学系総合研究棟、74医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期、91医学部附属病院立体駐車場、92学生支援センター、97-1基幹整備（流域⑧排水）A区、97-2基幹整備（流域⑧排水）B区、113医学部附属病院入院棟Ⅱ期

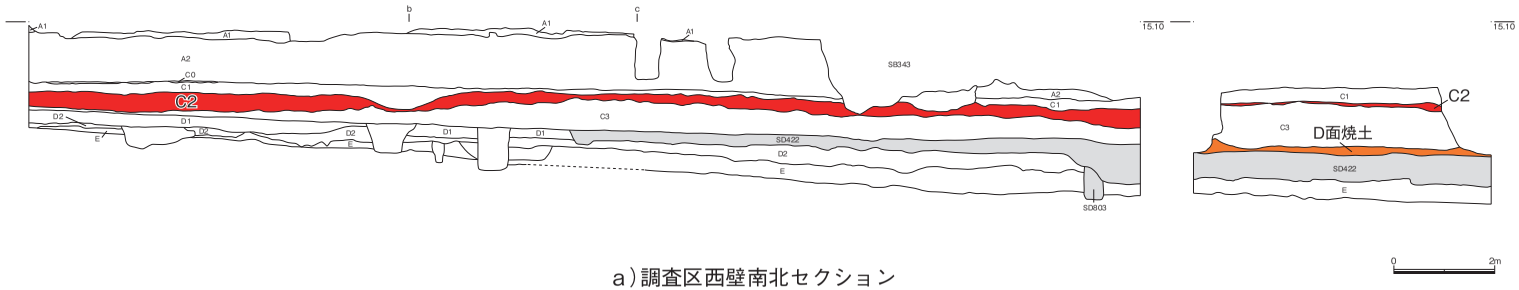


a.天和2(1682)年以前

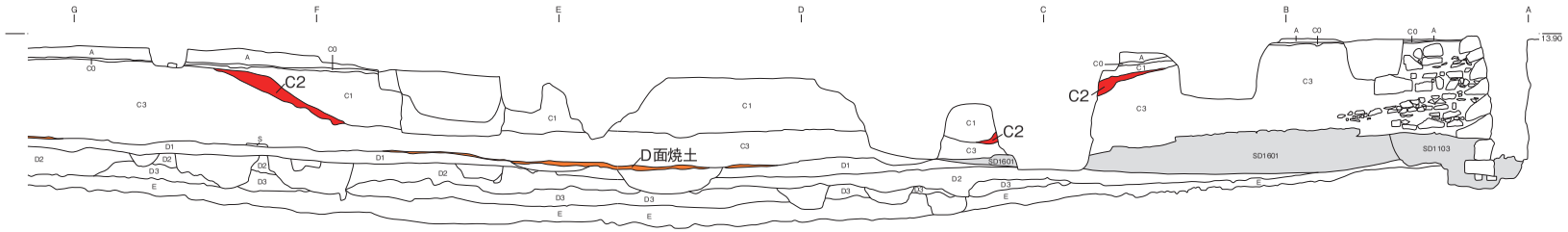


b.天和3(1683)年以降
(屋敷境は天保図より引用)

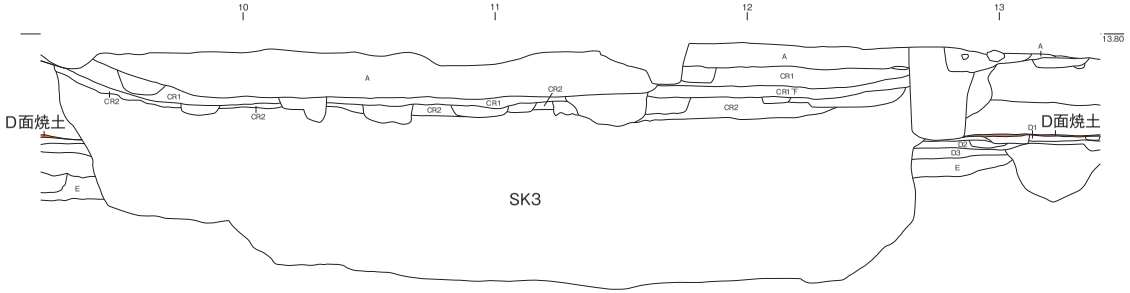
2図 本会対象資料出土位置と天和3年前後の地境変更(S=1/2000)



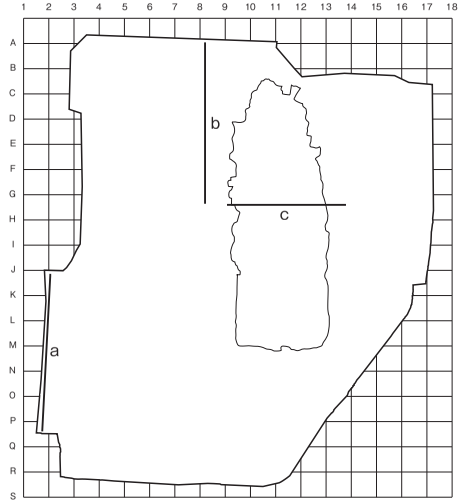
a）調査区西壁南北セクション



b）8ライン東1m南北セクション



c）Gライン南2m東西セクション



調査区グリッド・基本層序ポイント（S=1：1500）

3図　検出された焼土層（D面焼土・C2層）とSK3断面図

SK3 から出土した陶磁器に関する一考察

大成 可乃

1. 大型土坑 SK3 について

SK3 は入院棟 A 地点の調査区中央付近よりやや東側に位置する大型遺構であり（主旨 2b 図）、掘方などから採土坑と判断された。規模は東西約 20m、南北約 55m、最大深度約 4.3m を測る（図 1）。天和二（1682）年の火災を契機に大聖寺藩邸内で行われた大規模な造成に伴う盛土（主旨 3 図、C 層）を掘削し構築されたが、その後、深さ約 4m を泥炭で短期間に埋め戻された様子が看取された。泥炭は 4 層（D1 ～ D4）に大別されたが、埋没段階で泥炭化したような状況は確認されず、別の場所で掘削され運び込まれた埋積土であると判断された。パリノ・サーヴェイ株式会社（以下、パリノ）によるこの泥炭の自然科学分析では、その供給地は堆積環境の異なる複数箇所であった可能性が高く、東大構内の心字池もその候補として指摘されている。泥炭で埋め戻された後は、その上にローム主体の盛土（R1 層、R2 層）で整地されるが、整地面上には池や植栽痕が確認され、庭園として利用された状況が確認された。庭園廃絶後、更に盛土（A 層）造成が行われるが、その盛土層中に元禄十六（1703）年火災層が確認されており、元禄十六年の火災があった時点で庭園は廃絶していたことが明らかとなった（図 2）。

以上のような SK3 の状況から、出土遺物は 1682 年以降、大規模造成が行われたある段階から 1703 年の火災までの約 10 年の間に廃棄された遺物と考えられる。出土遺物の大半は前述した泥炭から出土しており、陶磁器は遺物収納箱で約 500 箱、その他に鉋屑や建築廃材なども含む木製品、金属製品なども良好な遺存状態で出土した。

検出状況から想定される約 10 年（1682 年以降から 1703 年まで）の SK3 の存続期間が、出土遺物から想定される年代観より短く、SK3 出土遺物には他所に廃棄されていたものが埋戻土とともに持ち込まれ、再び廃棄された物（2 次廃棄物）を含んでいる可能性があると推測された。そこで本発表ではこれまでの調査から同段階に比定される事が明きらかとなっている中央診療棟地点 F34-11（東京大学遺跡調査室 1997『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』参照。以下、中診 F34-11）出土陶磁器と様相を比較し、その可能性について検討を試みた。また 2 次廃棄されたと推測された陶磁器が 4m を超える SK3 の泥炭全体から出土しているのか、それとも遍在しているのかなども合わせて検討してみた。

中央診療棟地点（報告 1-1 図、4）も入院棟 A 地点と同じく江戸時代は大聖寺藩邸であり、中診 F34-11 の規模は東西 10.6m、南北 5m、深さ 2.2m を測り、平面形は概ね長方形を呈す、大型廃棄土坑である（図 3）。

2. 出土陶磁器の様相

埋蔵文化財調査室では、陶磁器について、胎質・産地－器種－小器種の 3 項目で表記、分類している（図 4、東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類、以下、東大分類。図 5 ～ 7 実測図下に記載）。胎質は磁器（Ｊ）、陶器（T）、土器（D）に分類、産地は胎土・釉調・器形などの特徴から国内の主要生産地 18 箇所（B ～ S）、国外（A）10 箇所（A1 ～ A10）、産地が不明なものや特定できないものについてはＺ群とし、器種は、器形的特徴から 59（1 ～ 54、63 ～ 67）器種に分類している。小器種は第 2 項目までの分類では不十分であると判断したものについて設定している。東大分類は、良好な遺構一括資料の増加や研究の進展に伴い随時改訂してしており、入院棟 A 地点においては東大分類（1）（以下、東大分類 1。『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊　東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』）を発展させた Ver.4（以下、東大分類 4）を使用した。また数量化に際しては、底部糸切り痕跡の中心の数を基本として、各個体毎に 1 箇所しかない部位を、重複してカウント対象とならないよう配慮し、カウントを実施した。なお対照資料として取り上げる中診 F34-11 の分類は東大分類 1 を使用、カウントは SK3 と同じ方法で実施、数量化した。さらに今回のプロジェクト 4 で取り挙げる D 面焼土と C2 層も、東大分類 4 で分類、カウントしたものを比較資料として掲載した

（1）SK3 と中診 F34-11 出土陶磁器の様相

SK3 からは最小推定個体数 3718 点を数える陶磁器・土器が出土している（図 5、6）。磁器は肥前系（JB）が中心で、器種は碗（JB-1）が 4 割以上をしめる。確認された肥前系磁器碗（JB-1）の中で多いのは高台断面が三

角形を呈す碗（1-c）、ついで高台断面がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗（1-d）である。1-c、1-dなどの絵付をみると、手描きにより染付されたものが中心（15、64）で、型紙摺を使用したもの（20、79）も少量含む。またごく少ないが1-dには手描きと型紙摺（65）あるいは手描きとコンニャク印判を併用したもの（71）も認められる。陶器も肥前系（TB）が中心で、磁器と同じく碗（TB-1）が7割以上をしめる。確認されたTB-1の中で多いのはいわゆる呉器手碗（1-a、311）や京焼風陶器碗（1-b、325）である。

中診F34-11からは最小推定個体数718点を数える陶磁器・土器が出土している（図7）。磁器は肥前系磁器（JB）が中心で、器種では碗（JB-1）が4割以上をしめる。確認されたJB-1の中で多いのは高台断面がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗（1-d）で、これが7割以上をしめる。それらの絵付をみると、手描きにより染付されたもの（9）が多いが､そこに型紙摺（15）やコンニャク印判のみで絵付されたもの（12）も認められる。陶器も肥前系（TB）が中心で、磁器と同じく碗（TB-1）が7割以上をしめる。確認されたTB-1の中で多いのはいわゆる呉器手碗（1-a、101）や京焼風陶器碗（1-b、103）である。

両遺構出土陶磁器は、以上のような様相から東大編年Ⅳa期に比定される遺構一括資料である。

（2）SK3と中診F34-11の比較

両遺構とも磁器が4割以上をしめ、出土陶磁器の中心である点は共通する（表1）。器種組成をみるとSK3は30器種、中診F34-11は26器種が確認され、そのうち最も多く確認されるのは碗と皿・平鉢で、両器種で6割以上をしめる。そこで碗、皿・平鉢に注目し、その様相を比較してみた。

碗はともに肥前系磁器が5割以上をしめ中心となっているが、その内訳は大きく異なる（図8）。SK3では高台断面が三角形を呈す碗（JB-1-c）が5割をしめ碗の中心となっており、高台断面がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗（JB-1-d）が2割以上をしめそれに続く。また1割ほどではあるが、いわゆる初期伊万里碗（JB-1-a、JB-1-b）も認められるなど、後で発表のある入院棟A地点のⅢb期に比定されるD面焼土層やC2層の肥前系磁器碗の組成に近い。しかし中診F34-11ではJB-1-dが7割以上をしめ、肥前系磁器碗の圧倒的な中心となっており、SK3のその組成とは大きく異なる。皿も肥前系磁器（JB-2）がともに5割以上をしめ中心となっているが、その内訳は異なる（図9）。すなわちSK3は

遺構名	推定個体数（点）	胎質（%）		
		磁器	陶器	土器
SK3	3718	44	32	24
中診F34-11	718	41	28	31
D面焼土層	1286	35	52	13
C2層	490	77	13	10

表1　出土陶磁器土器の胎質組成比

高台断面が三角形を呈す皿（2-c）が3割以上をしめ中心となっているが、碗と同じく、いわゆる初期伊万里（2-a）を1割ほど含む。一方中診F34-11では2-cを同じく3割以上含むが、いわゆる初期伊万里はほぼ認められない。以上のような様相から、SK3にその廃絶段階より古い段階の肥前系磁器碗、皿・平鉢が含まれている事が指摘でき、2次廃棄された陶磁器が含まれている事が推察された。

3. 泥炭からの陶磁器の出土・接合状況

SK3の覆土の中心である泥炭は色調、粒径、含有物の多少などの違いから大きく4つに分層（D1層からD4層）が可能であり、調査時もその層毎に遺物のとり上げを実施した。結果、基本的には層毎に接合が完結するものが多いが、中に層を超えて接合するものもあることが判明した。そこで本節では、D1層（最上層）からD4層（最下層）で出土した器種の中で出土量の多い碗、皿・平鉢について各層間の様相差の有無や、接合関係などを分析し、前節で見えてきた2次廃棄された陶磁器が4mを超えるSK3覆土全体から出土しているのか、それとも偏在しているのか報告書掲載陶磁器に絞って検討を行った。

（1）泥炭内の接合状況

泥炭内の接合状況をまとめたのが表2である。横軸には器種と胎質を、縦軸には出土した層位を示し、「＋」は接合したことを示している。接合状況をみると基本的には単層で接合するものが多いが、中には層位をまたがって接合（層位間接合）しているものもあることがわかる。土器、蓋を除く報告書掲載陶磁器497点中、D3単層で接合したものが103点で全体の21%、D2単層で接合したものが58点で12%をしめ、泥炭の最上層にあ

たるD1単層で接合したものは21点と少なく、全体の4%にとどまる。出土量の多い碗と皿･平鉢についてみると、碗は磁器、陶器ともにD3単層で接合したものが最も多く、磁器碗全97点中24点、陶器碗全74点中19点をしめる。皿は磁器ではD4単層で接合したものが68点中16点で最も多く、陶器では一括で接合したものが57点中14点で最も多くなっており、碗の接合状況とは異なる。ただし磁器皿・平鉢、陶器皿・平鉢ともに2番目に多い接合例はD3単層で接合したものとなっている。

層位間接合の接合パターンは表2の左側に項目としてあげた概ね10通り（緑色）確認される。最も多い接合例はD2層とD3層の層位間接合で33点、掲載陶磁器の7%をしめる。ちなみにD1層からD4層の全ての層位間で接合する例もあるが、最上層のD1層と最下層のD4層とが接合する例は掲載陶磁器中には少なくとも確認できなかった。鉢、擂鉢、壺・甕などの大型器種ほど層位間接合する事が確認されたが、その場合でも多いのは隣接する層位間での接合例であり、D1層とD4層のように複数の層位を超えて接合する例は認められなかった。図6の165のJB-2-rは複数個体確認されるいわゆる揃いの皿であり、この皿の破片はD1層からD3層の複数の層位から出土し、層位間接合する例も確認されている。

以上のようにSK3は深度が4m以上あるにもかかわらず、複数層にまたがる層位間接合も確認できる。しかしその多くは隣接する層位間同士に限られ、D1層とD4層が接合するような層位を飛び越えた接合事例はほぼ確認されないことから、SK3の泥炭は比較的短期間で埋め戻されている可能性が高い。

(2) 肥前産陶磁器碗、皿・平鉢の出土状況と層位間接合

次に2節で取り挙げた肥前産陶磁器の碗、皿・平鉢（JB-1、TB-1、JB-2、TB-2）について、層毎の出土状況と層位間接合を確認した。図10～図13のグラフは横軸に各小器種の個体数、縦軸に泥炭内の接合状況を示したものであり、図14は実際の出土状況を一部図化したものである。

肥前系磁器碗は（図10）D3単層接合例が最も多く、その内訳をみると高台断面が三角形を呈す碗（JB-1-c）、高台断面がシャープな「Ｕ」字状を呈し、高台高が高い碗（JB-1-d）、高台断面がシャープな「Ｕ」字状を呈し、高台高が低い碗（JB-1-e）、いわゆるうがい茶碗（JB-1-t）、JB-1-dのやや小振りの碗（JB-1-u）など、SK3の埋め戻し開始時期に出土量が多くなるものが確認できる。最下層のD4単層接合例ではJB-1-c、JB-1-eが確認できたが、いわゆる初期伊万里碗（JB-1-a、JB-1-b）などは確認されず、それらが多く確認されるのは上位層のD2単層接合例である。しかしそのD2単層接合例には、D3単層接合例で確認されるJB-1-e、JB-1-t、JB-1-uは確認されなかった。すなわち肥前系磁器碗は、D3層より上位の層で接合しているものにJB-1-d、JB-1-e、JB-1-t、JB-1-uなどのSK3廃絶時期に近い段階で確認される碗は認められず、D3層より下位の層で接合しているものには、それらの器種が認められる傾向がうかがえた。

肥前系陶器碗は（図11）呉器手碗（TB-1-a）、外面に主文様のあるいわゆる京焼風陶器碗（TB-1-b）はD1層からD4層すべての単層接合例で確認されるが、TB-1-a､TB-1-bよりわずかに後出する内面に主文様のある京焼風陶器碗（TB-1-c）は、上位のD1単層接合やD2単層接合では確認されなかった。またSK3廃絶段階あたりから確認される陶胎染付碗（TB-1-f）をはじめ、肥前系陶器碗の中でも比較的新しい段階で確認される器種は下位のD3層とD4層の層位間接合例、その他の接合例で確認される。一方、いわゆる卵手（TB-1-j）のような古手の呉器手碗や青緑釉碗（TB-1-i）などは、D1単層接合例、D2単層接合例で確認される。すなわち肥前系陶器碗においても肥前系磁器碗と同じく、泥炭の上位からはSK3廃絶段階より古い段階の遺物が、坑底付近に近い泥炭からはSK3廃絶段階に近い遺物が出土している。

肥前系磁器皿・平鉢は（図12）、いわゆる初期伊万里皿（JB-2-a）はD4単層接合例には確認されないが、D3単層、D2単層、D1単層の接合例で確認される。SK3廃絶時期近くに出土量が多くなる高台断面がシャープな「Ｕ」字状を呈す皿（JB-2-e）、見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小さい皿（JB-2-l）は上位のD2単層接合例、D1単層接合例では確認されないが、D3単層、D4単層、D3層とD4層の層位間接合例で確認される。

肥前系陶器皿・平鉢においても（図13）、SK3廃絶時期直前頃に出土量が多くなる京焼風陶器皿（TB-2-c）がD2単層、D3単層、D2層とD3層の層位間接合、D3層とD4層の層位間接合例で確認されるが、最上位のD1単層接合例では確認されない。

報告書掲載遺物のみではあるが、肥前系陶磁器の碗、皿・平鉢についてSK3泥炭からの出土状況や層位間接合状況を確認してみた。するとD1単層接合、D2単層接合した陶磁器はSK3廃絶時期よりも古い段階、すなわち1650～60年代を中心に確認されるものであり、坑底に近いD3単層接合、D4単層接合した陶磁器はSK3廃絶時期に近い段階、すなわち1680年代以降に主に確

認されるものであるという状況が看取され、年代の新しいものが上位から出土するという通常とは逆の遺物出土状況がある事が明らかとなった。

泥炭の供給先の特定という問題はあるが、供給先に堆積していた泥炭の上位から順次掘削、搬出が開始されたと考えられ、泥炭の上位ほど供給先の搬出時期に近い時期の「ごみ」などを含んでいた可能性が高いと推測される。結果、SK3 坑底付近の泥炭 D3 層、D4 層中には SK3 の埋め戻し開始時期に近い時期の遺物が含まれ、埋め戻しが進行し、泥炭供給先の掘削が進み、供給先の泥炭の下位の層が掘削されるようになると、SK3 埋め戻し開始時期より古い時期の遺物も泥炭中に含まれるようになり、SK3 開口部付近の上位泥炭 D2 層、D1 層中に供給先の古い段階の陶磁器、すなわち SK3 廃絶時期より古い段階の陶磁器が含まれるという出土遺物の逆転現象が起きたのではないだろうか。

まとめにかえて

SK3 から出土した陶磁器の一部に、2 次廃棄された陶磁器が混在している可能性が高い事が 2 節において確認されたが、主要覆土である泥炭 D1 層から D4 層の各層位からの出土状況や、層位間での接合状況などからも 2 次廃棄物を含む可能性が高いことが確かめられた。ただ、その泥炭の供給先の特定につながる陶磁器の様相を明らかにするには至らなかった。それが困難であった理由の 1 つに、SK3 覆土容量に対する陶磁器の個体数の少なさという事が挙げられるが、これは SK3 という遺構が採土坑としての役割を終えた後、日常的に集積されていたゴミを処理する場所として利用されたのではなく、鉋屑や建築廃材などを含む大量の建設発生土の処理を目的として利用されたことを示唆しているのではないだろうか。

成瀬は、SK3 が大聖寺藩邸全域が平準化された直後に構築されていることから、この遺構掘削が大聖寺藩邸側の都合で掘削されたとは考えがたいとして、ほぼ同時期に藩邸造成を行い、大量の造成土を必要としていた加賀藩がその供給源として大聖寺藩邸に SK3 を掘削するが、覆土の泥炭中に鉋屑や建築廃材が含まれていたことやパリノによる泥炭の分析結果から、その後は育徳園心字池周辺の庭園整備に伴い発生した大量の泥炭を大聖寺藩邸内に持ち込んだのではないかと推測している（成瀬 2011）。成瀬の指摘どおり SK3 に加賀藩庭園整備にともなう泥炭が客土されたとすると、それに含まれる遺物は加賀藩邸庭園内や池などに投棄されていたものということになる。

SK3 から出土した木簡には大聖寺藩士と推測される名前が 2、3 名確認されたり、SK3 出土陶磁器と遺構間接合する遺物が確認されるなど、SK3 を埋め戻す際に大聖寺藩邸内にあったゴミなども泥炭と一緒に廃棄された可能性は高い。よって SK3 泥炭からの出土遺物には場所、年代、要因などを異にする様々なものが含まれていることが推察されるが、今回の分析の中で複雑な SK3 の客土履歴を示す要素を抽出するのは困難であった。それを行うには今回のような藩邸一区域の分析にとどまらず、空間、時間毎に大聖寺藩邸全域の陶磁器の様相を整理、把握した上で、隣接する各藩から出土する陶磁器とも比較する必要があろう。また陶磁器以外の SK3 出土遺物の分析も合わせて総合的にみていく必要があるが、それはまた機会を改めて行いたい。

【引用・参考文献】

大成可乃　2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（2）－器種（小器種）の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学遺跡調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3

東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室　1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊

成瀬晃司　2011「加賀藩本郷邸東域の開発」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館

堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財　　調査室

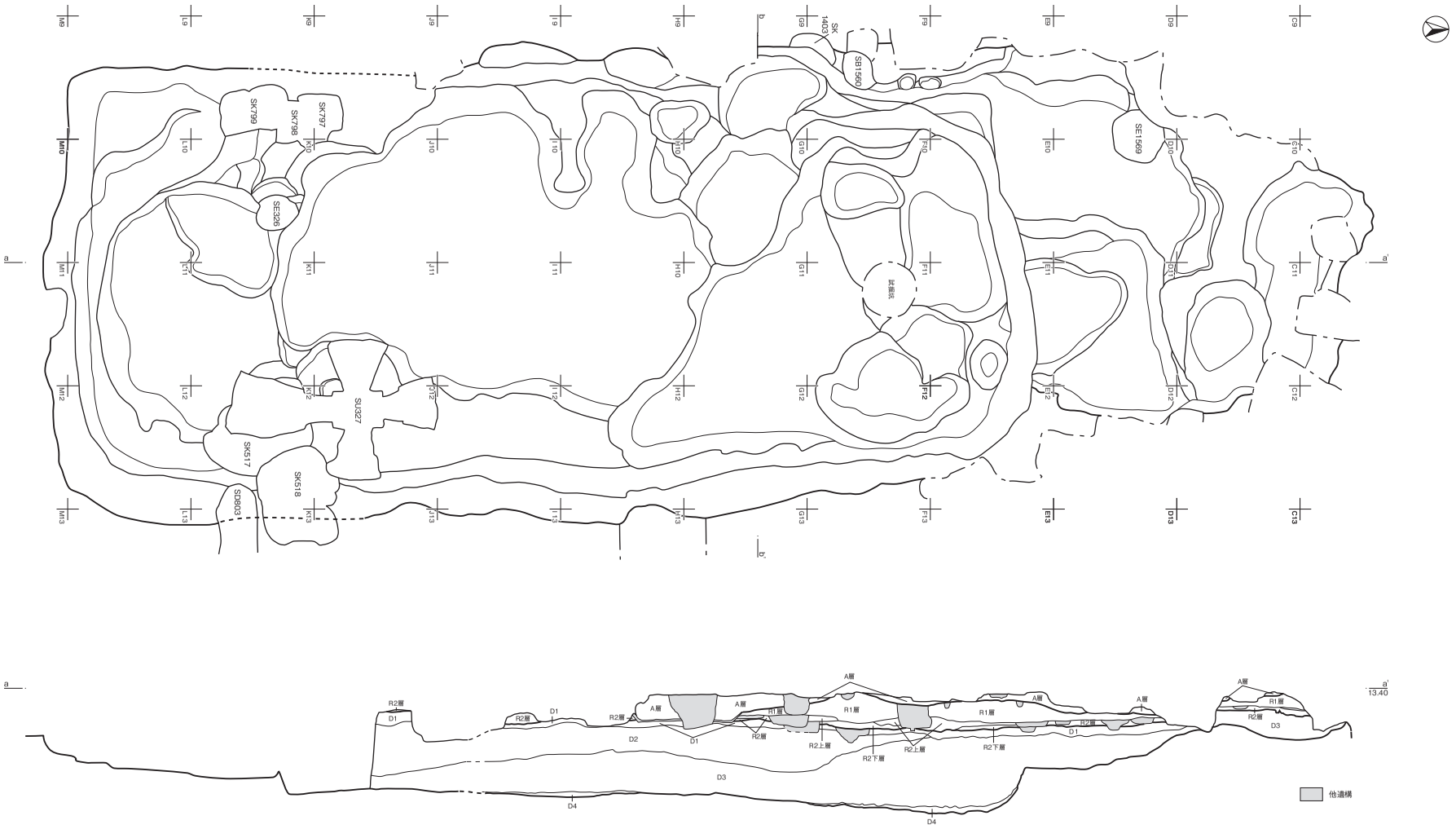
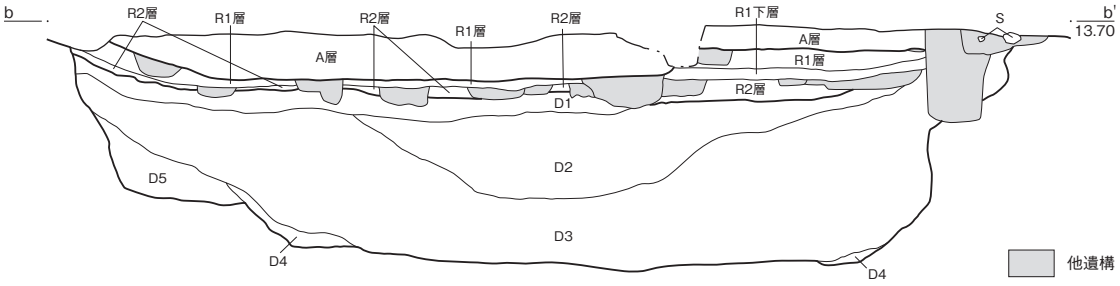


図1　SK3（S=1/250）

SK3

D1　灰褐色土　（シルトブロック（10cm大）含）
D2　黒色土　（ローム粒・ロームブロック（10cm大）・炭化物粒・焼土粒・貝多含、シルトブロック（10～15cm）含、カンナ屑を含む）
D3　黒色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒極多含、シルト含、カンナ屑を含む）
D4　茶褐色土　（ローム粒多含、炭化物粒・焼土粒少含、しまりやや弱）
D5　明褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒含、炭化物粒少含）



SK3

D1　灰褐色土　（シルトブロック（10cm 大）含）
D2　黒色土　　（ローム粒・ロームブロック（10cm 大）・炭化物粒・焼土粒・貝多含、シルトブロック（10～15cm）含、カンナ屑を含む）
D3　黒色土　　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒極多含、シルト含、カンナ屑を含む）
D4　茶褐色土　（ローム粒多含、炭化物粒・焼土粒少含、しまりやや弱）
D5　明褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒含、炭化物粒少含）

図２　SK3 東西断面（上：S=1/150）、庭園 (左)、完掘（右）

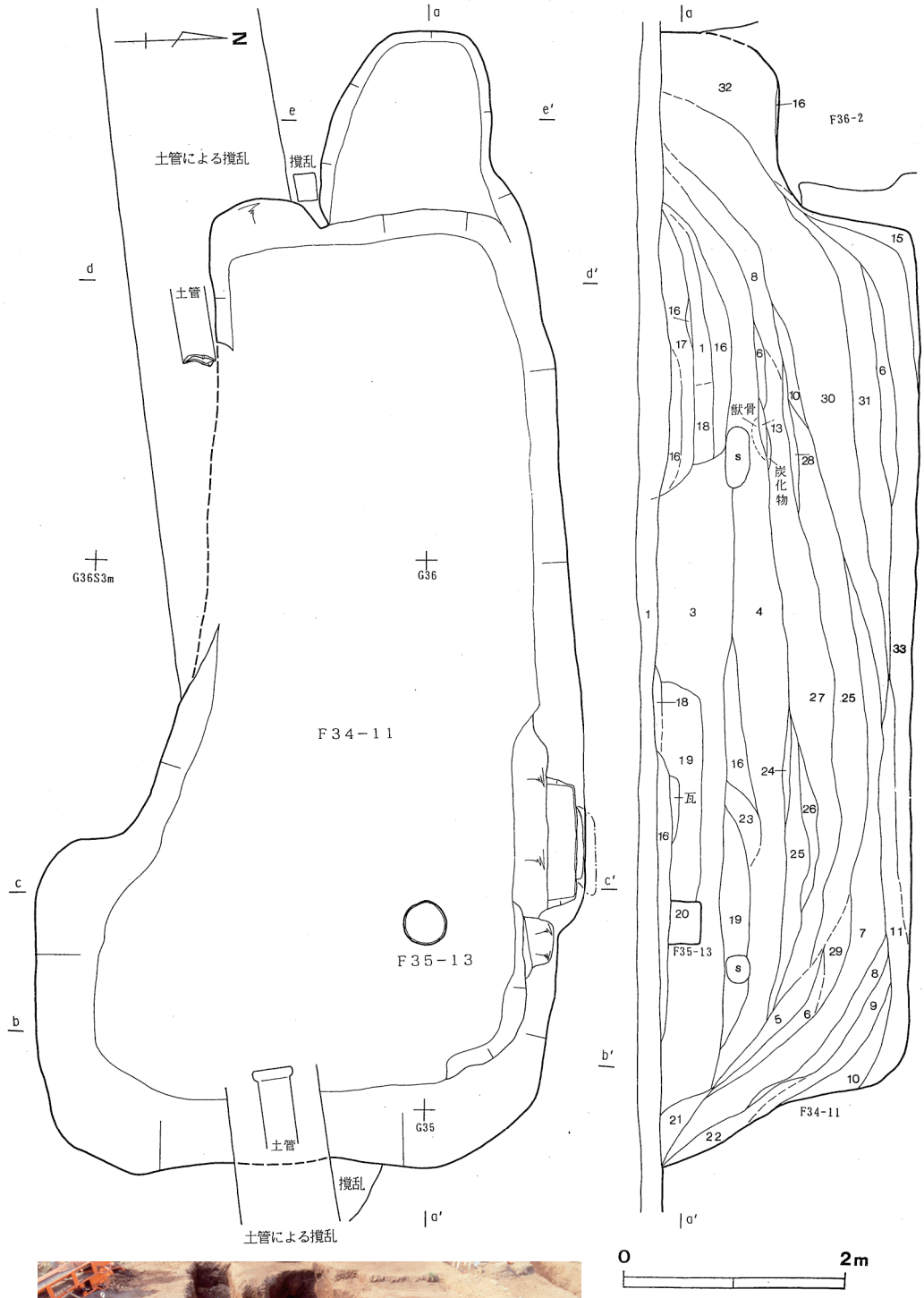

N
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
土管による撹乱
撹乱
土管
G36S3m
G36
F34-11
F35-13
G35
土管
撹乱
土管による撹乱
F36-2
獣骨
炭化物
瓦
F35-13
F34-11
0
2m

図３　中診 F34-11

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10　西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－萬古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－久谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

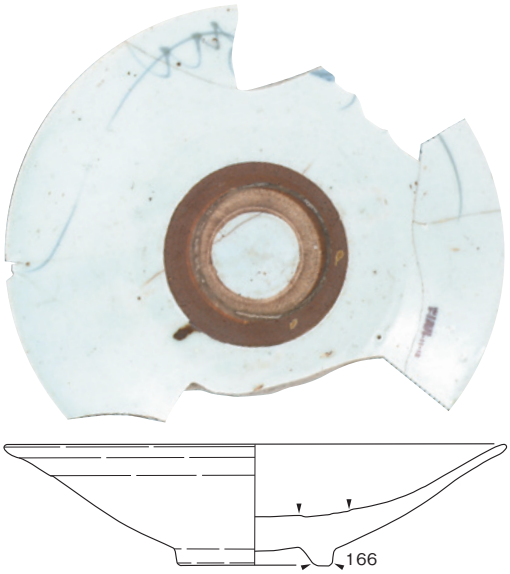
○器種

1.碗	2.皿･平鉢	3.大皿･大皿鉢	4.燗徳利	5.鉢
6.坏	7.猪口	8.仏飯器	9.香炉･火入れ	10.瓶
11.御神酒徳利	12.油壺	13.蓋物	14.筆立て	15.壺･甕
16.急須	17.燗鍋	18.合子	19.水滴	20.蓮華
21.植木鉢	22.花生	23.片口鉢	24.灰落し	25.鬢水入れ
26.茶入れ	27.水注	28.漱瓶	29.擂鉢	30.餌入れ
31.火鉢	32.柄杓	33.鍋	34.土瓶	35.戸車
36.ちろり	37.薬研	38.手焙り	39.おろし皿	40.油受け皿
41.油徳利	42.行平鍋	43.十能	44.ひょうそく	45.瓦燈
46.カンテラ	47.ほうろく	48.七輪	49.涼炉	50.五徳
51.塩壺	52.燭台	53.蒸し器	54.懐炉	
63.あんか	64.煙硝擂鉢	65.乳棒	66.硯屏	67.釜

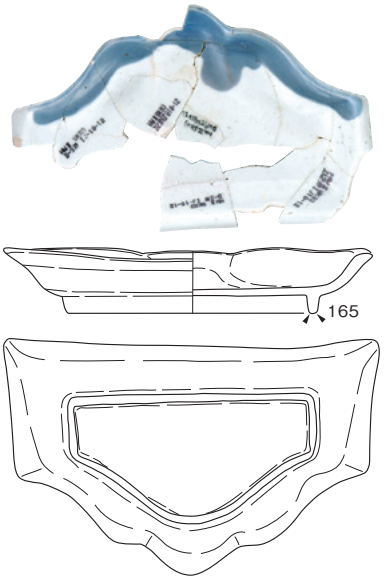
東京大学構内の遺跡の陶磁器・土器の分類

図４　東大分類

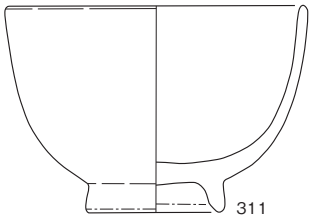
図 5　SK3 出土陶磁器 1（右下数字は報告書掲載番号）



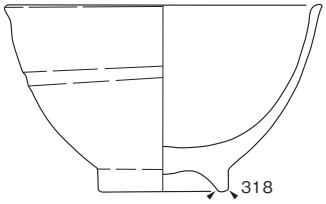
JB-2-l



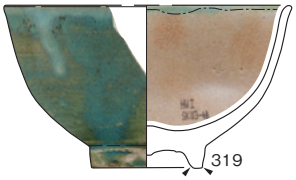
JB-2-r



TB-1-a

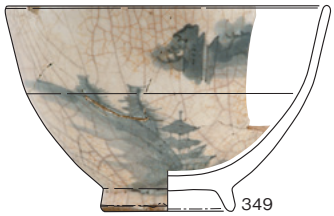


TB-1-j

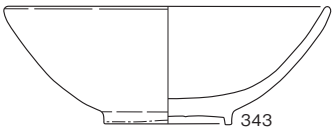


TB-1-i

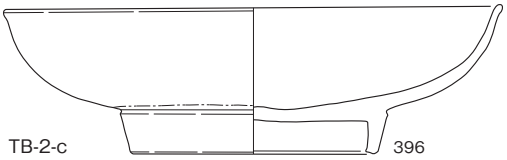
TB-1-b



TB-1-f



TB-1-c



TB-2-c

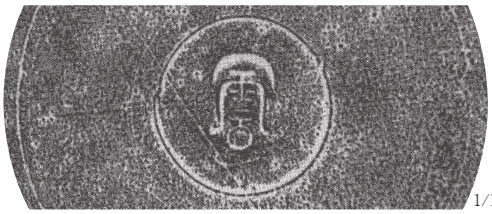


図 6　SK3 出土陶磁器 2（右下数字は報告書掲載番号）

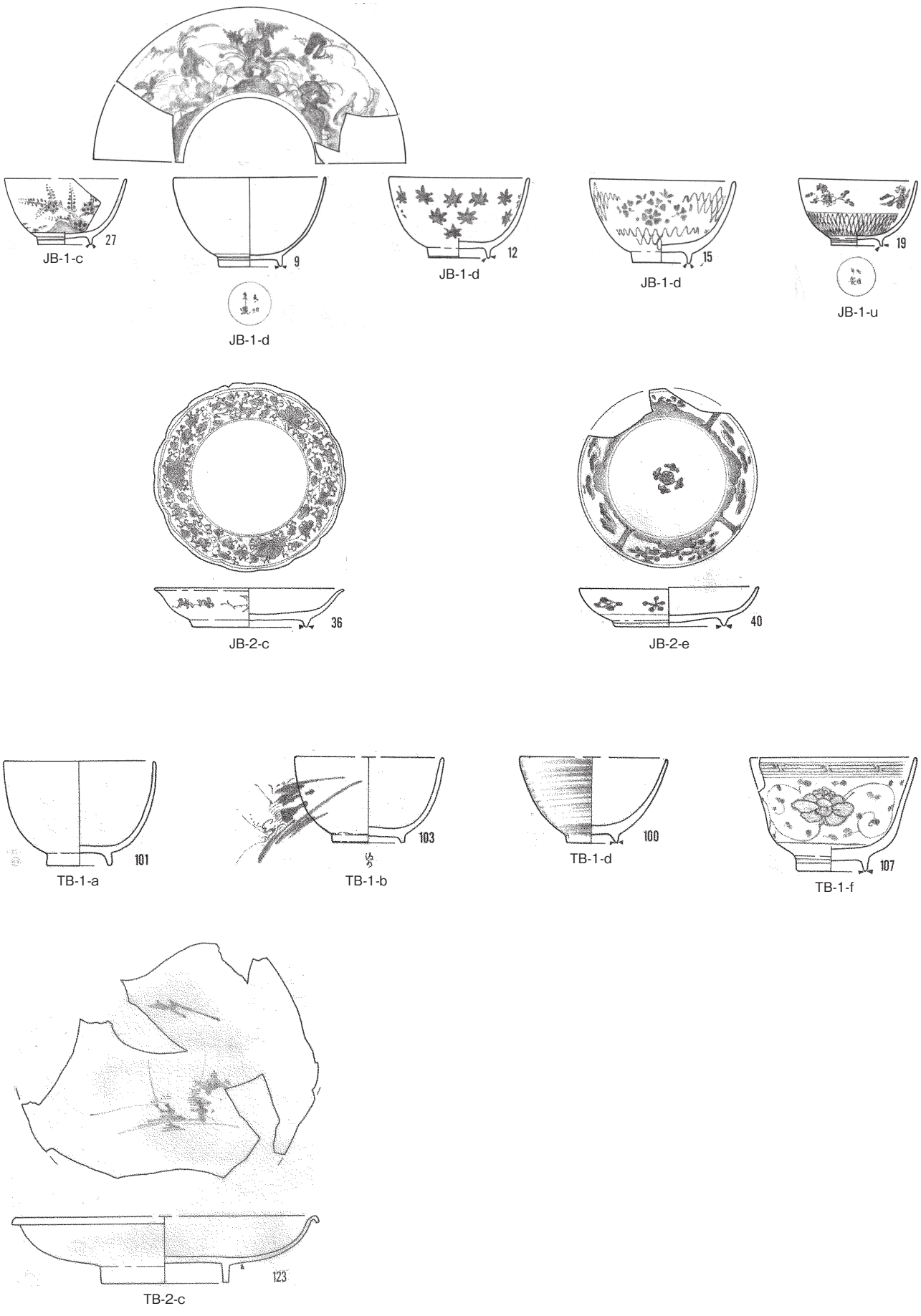
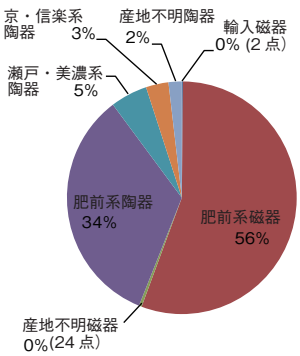
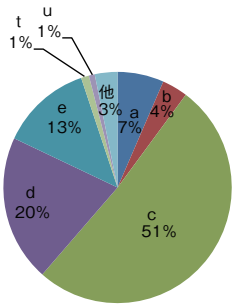


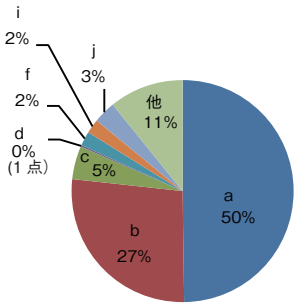
図 7　中診 F34-11 出土陶磁器（右下数字は報告書掲載番号）



碗産地組成（1289 点）

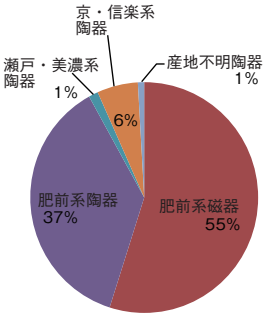


肥前系磁器（716 点）

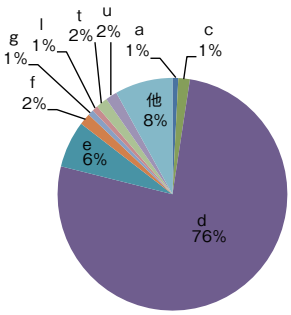


肥前系陶器（434 点）

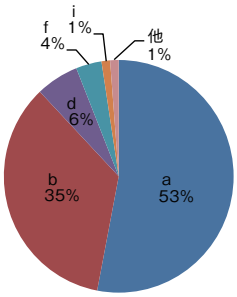
SK3



碗産地組成（224 点）

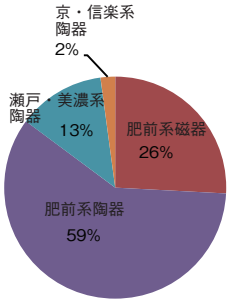


肥前系磁器（123 点）

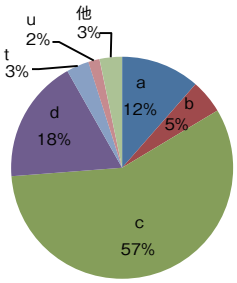


肥前系陶器（83 点）

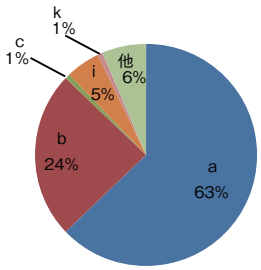
中診 F34-11



碗産地組成（236 点）

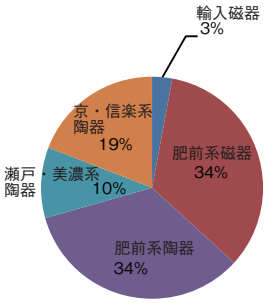


肥前系磁器（61 点）

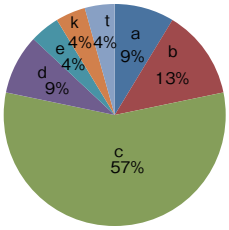


肥前系陶器（140 点）

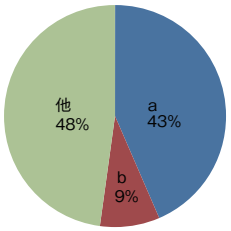
D 面焼土



碗産地組成（68 点）



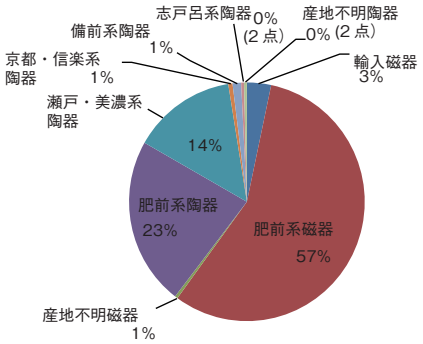
肥前系磁器（23 点）



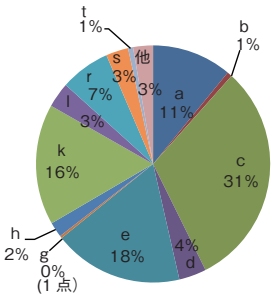
肥前系陶器（23 点）

C2 層

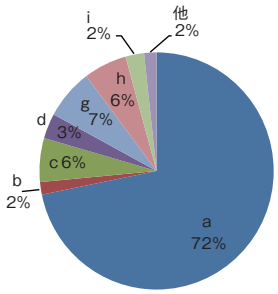
図 8　SK3・中診 F34-11・D 面焼土・C２層出土碗の様相（最小推定個体数）



産地組成（513 点）

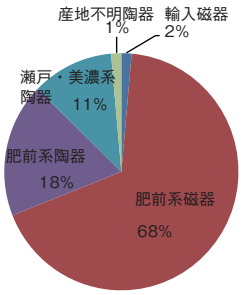


肥前系磁器（291 点）

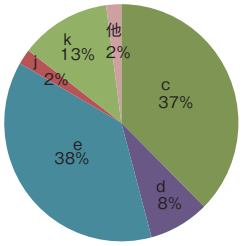


肥前系陶器（117 点）

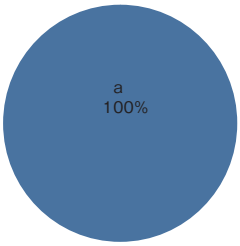
SK3



産地組成（71 点）

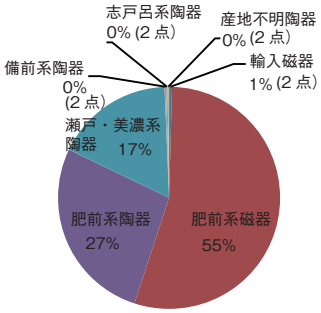


肥前系磁器（48 点）

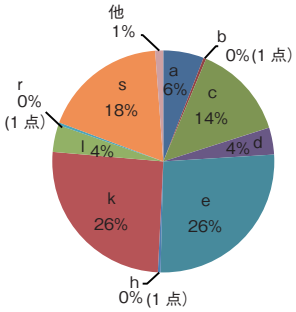


肥前系陶器（13 点）

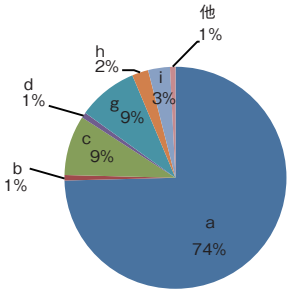
中診 F34-11



産地組成（465 点）

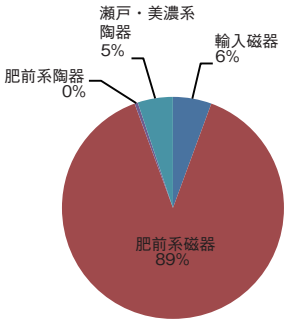


肥前系磁器（254 点）

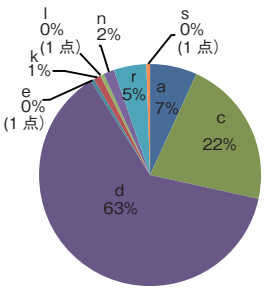


肥前系陶器（126 点）

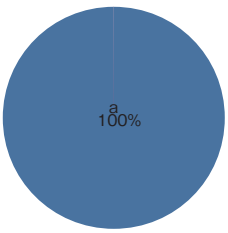
D 面焼土



産地組成（214 点）



肥前系磁器（190 点）



肥前系陶器（1 点）

C2 層

図 9　SK3・中診 F34-11・D 面焼土・C２層出土皿・平鉢の様相（最小推定個体数）

層位間接合

接合状況	器種	1		2		3	5		6		7	8		9		10		12	13	15		18	19		22		23		24	25	26	27	28	29	40
	胎質	J	T	J	T	J	J	T	J	T	J	J	T	J	T	J	T	J	J	J	T	J	J	T	J	T	J	T	J	T	T	T	T	T
	D1	3	4	3	2		2		1	1							1				1			1							1			1
	D1＋D2	4	3		1				1					1				1										1						
	D1＋D2＋D3	4		3	1	2	3		1			1		2	2		1		1	2	1												2	
	D1＋D2＋D3＋D4	1												1																				
	D1＋D3	3	1		3		1					1			2					1														
	D1＋D3＋D4						1																											
	D1＋D4																																	
	D2	17	7	6	5		3		5	1		1	1		2	1						1		1			1	2	1			1		
	D2＋D3	9		5	4		3	2	1	1				1						2	2					1						2	
	D2＋D3＋D4		1														1																	
	D2＋D4		3																															
	D3	24	19	11	9	1	3	1	11	1		3			2		4		1	1	2	2	1		1					1	1	1	1		1
	D3＋D4	8	3	5	5	1			1						1				1														2	
	D4	4	7	16	5		2		2	1	1			1			3		2		1												1	
	一括	7	13	7	14				8	3		1				2	1		1			1			1	1			1	1		2		4	1
	その他	13	13	12	8	1	6	2	4	1	1			3	5	1	1	2	1	1	2									1				1	
	合計	97	74	68	57	5	24	5	35	9	2	7	1	9	14	4	12	3	7	7	9	4	1	2	2	2	1	3	2	3	2	4	1	12	3

接合状況	器種	52	64	67	不明		合計		
	胎質	J	T	T	J	T	J	T	J+T
	D1						9	12	21
	D1＋D2						7	5	12
	D1＋D2＋D3			1	1		20	8	28
	D1＋D2＋D3＋D4						2		2
	D1＋D3						6	6	12
	D1＋D3＋D4						1		1
	D1＋D4								
	D2		1			1	36	22	58
	D2＋D3						21	12	33
	D2＋D3＋D4							2	2
	D2＋D4							3	3
	D3				1		60	43	103
	D3＋D4						16	11	27
	D4						28	18	46
	一括						29	40	69
	その他	1					46	34	80
	合計	1	1	1	2	1	281	216	497

○胎質

J（磁器）　T（陶器）

○器種

1. 碗　2. 皿・平鉢　3. 大皿・大皿鉢　4. 燭徳利　5. 鉢
6. 坏　7. 猪口　8. 仏飯器　9. 香炉・火入れ　10. 瓶
11. 御神酒徳利　12. 油壺　13. 蓋物　14. 筆立て　15. 壺・甕
16. 急須　17. 燭鍋　18. 合子　19. 水滴　20. 蓮華
21. 植木鉢　22. 花生　23. 片口鉢　24. 灰落し　25. 鬢水入れ
26. 茶入れ　27. 水注　28. 漫瓶　29. 擂鉢　30. 餌入れ
31. 火鉢　32. 柄杓　33. 鍋　34. 土瓶　35. 戸車
36. ちろり　37. 薬研　38. 手焙り　39. おろし皿　40. 油受け皿
41. 油徳利　42. 行平鍋　43. 十能　44. ひょうそく　45. 瓦燈
46. カンテラ　47. ほうろく　48. 七輪　49. 涼炉　50. 五徳
51. 塩壺　52. 燭台　53. 蒸し器　54. 懐炉
63. あんか　64. 煙硝擂鉢　65. 乳棒　66. 硯屏　67. 釜

表2　SK3泥炭内の接合状況

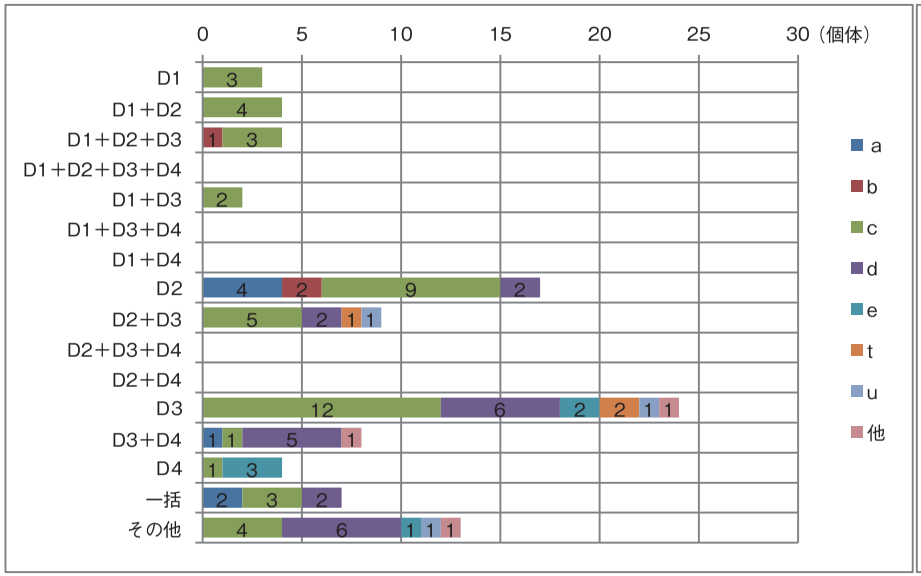


図10　肥前系磁器碗の層毎の出土状況と層位間接合

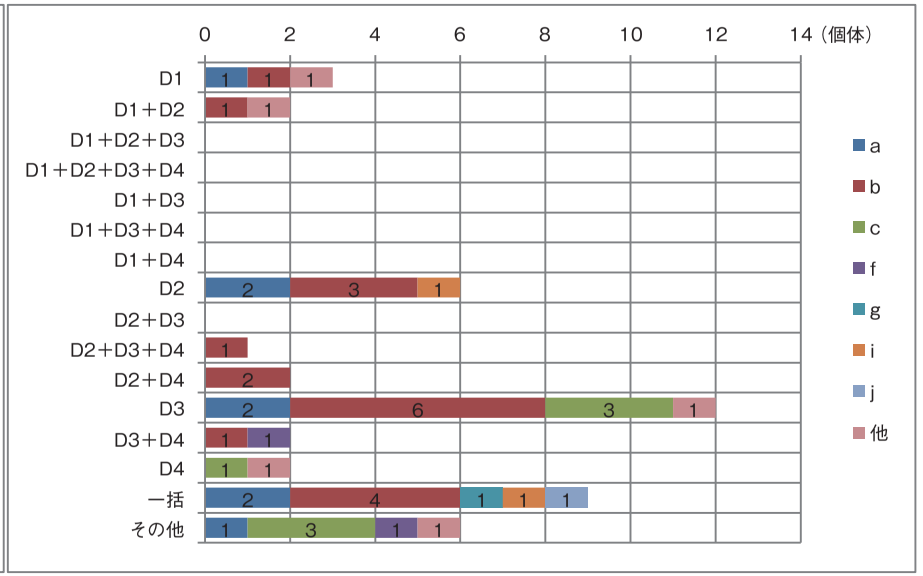


図11　肥前系陶器碗の層毎の出土状況と層位間接合

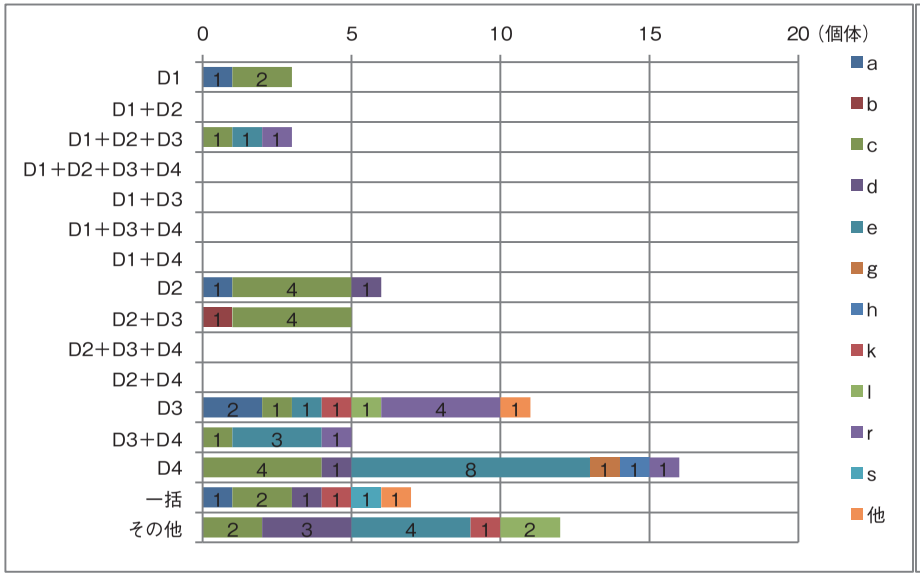


図12　肥前系磁器皿･平鉢の層毎の出土状況と層位間接合

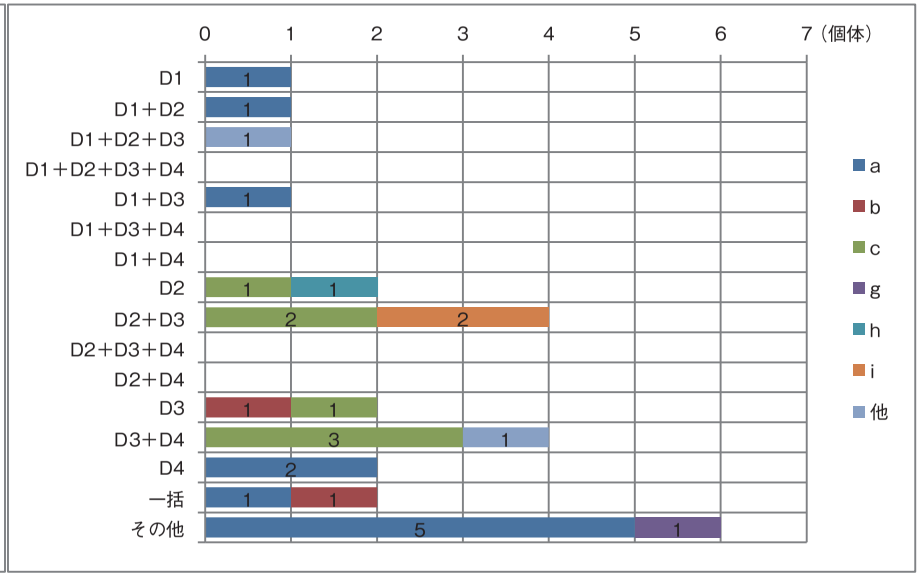


図13　肥前系陶器皿･平鉢の層毎の出土状況と層位間接合

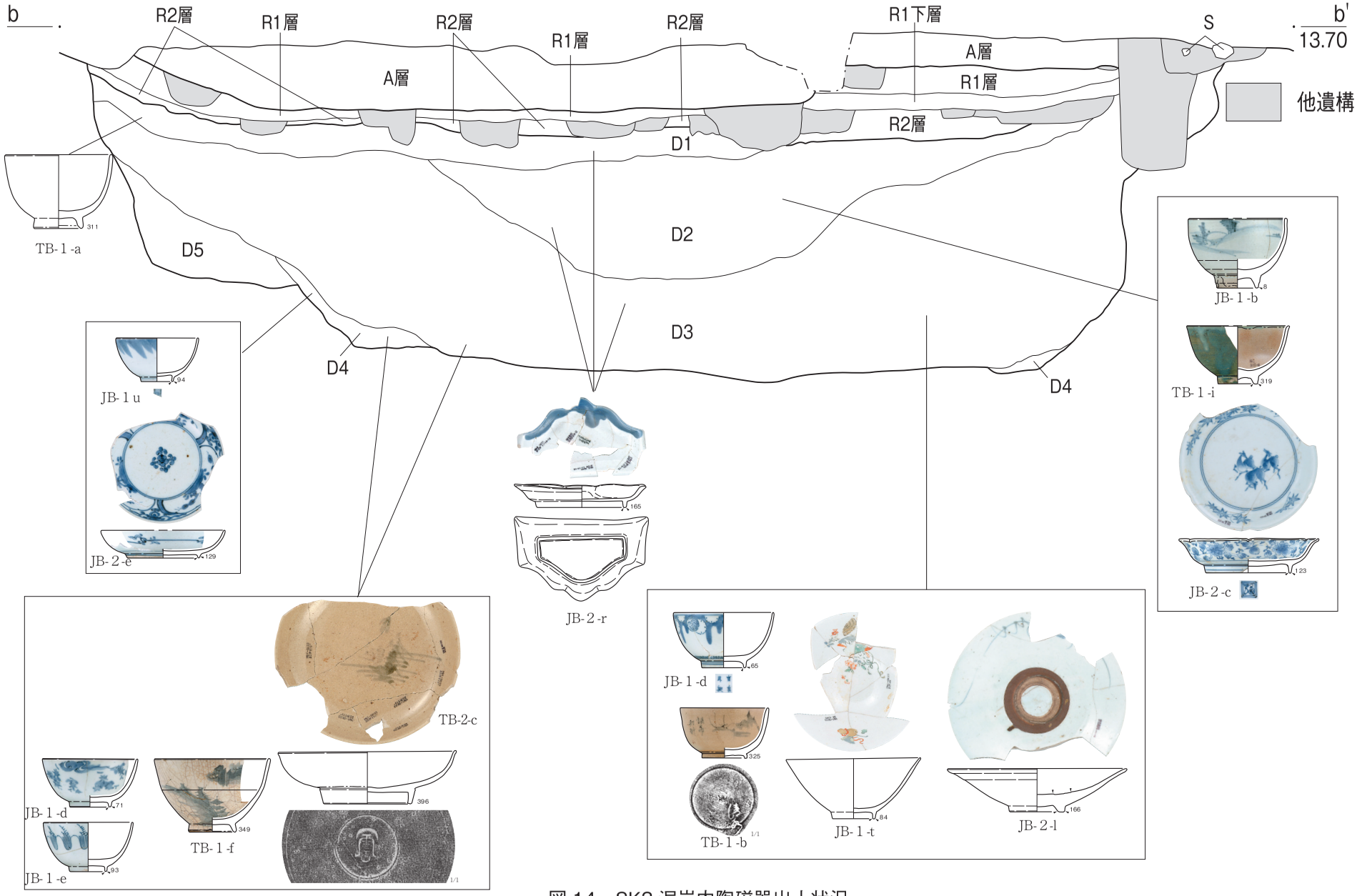


図 14　SK3 泥炭内陶磁器出土状況

天和２年火災廃棄資料の２側面

－ C2 層と D 面焼土出土資料－

成瀬 晃司

はじめに

医学部附属病院入院棟 A 地点の調査では、調査区全体で５枚の江戸時代遺構面を検出しているが、そのうち C 面及び D1 面とした２枚の遺構面上及び検出遺構内に火災後の瓦礫整理焼土層が確認されている。各火災年代は、出土資料の年代観・遺構配置などと文献記録を対比させた結果、上位の C 面に伴う焼土層が元禄 16（1703）年、下位の D1 面に伴う焼土層（以下、D 面焼土）が天和２（1682）年に生じた藩邸全焼火災に当たることが確認された。本地点は後述するように天和２年火災後の屋敷割変更によって加賀藩邸（飛び地：黒多門邸）から大聖寺藩邸敷地へと変遷し、元禄 16 年火災資料は大聖寺藩邸内で、D 面焼土出土資料は加賀藩邸（黒多門邸）で使用された資料であることが確認された。また天和２年火災後の屋敷割変更に伴う造成土中からも瓦礫処理焼土層が検出された（C2 層）。即ち同一火災による被災資料ではあるが、前者は本地点居住者相を反映する資料であり、後者は他地域から持ち込まれ処理された資料と位置づけられる。

以下に、この同一火災２種の焼土層出土遺物が有す各々の特徴を整理し、その比較を通して大名藩邸内で使用された陶磁器の一側面をまとめてみたい。

1. D 面焼土出土資料の様相

(1) 黒多門邸とは

a) 文献・絵図から

黒多門邸の名称は、富田 景周（とだ かげちか、延享３（1746）年－文政 11（1828）年）が編纂した『東邸沿革図譜』所収の「黒多門邸条」文頭に記載された「黒多門邸の名古へあり。是は本郷邸内に界墻を以て区別を為すのみ。按ずるに、本郷内の証人第跡是也。」から知ることができる（石川県図書館協会 1938）。本文には挿図が添えられており（1 図）、斜線で強調された「黒多門屋敷」がそれにあたる。この解説文として「証人第なる事は、即ち延宝八年庚申の江戸図に見えて、黒多門邸の地之に当たる。（中略）本郷邸内三公名を載するに、大内蔵・飛騨二君二邸の間に証人第介まれり。（以下略）」と書かれており、黒多門邸の場所を特定した根拠が「延宝八年庚申の江戸図」にあることを述べている（2 図）。本書には「寛文五年乙巳諸列候より出し置く証人、台命にて止むの後も、此邸の証人小屋等は従前の如く廃されず。聞番、其他軽率・小人等を置くと見え、此所に彼等居住の事あり。右前後の頃、此邸を黒多門邸と唄えし成るべし。」と、寛文５（1665）年までは証人屋敷として、それ以降は聞番・軽率などが集住する詰人空間として使用されていたことが記されている。加賀藩の証人屋敷は明暦３（1657）年まで牛込邸にあったとされ、同屋敷の上地に伴い黒多門邸内に移設されたといわれ、それ以前の黒多門邸に関しては不詳である。また添えられた註書きには「天和三年八月飛騨守様元御屋敷江御繰替ナサン依テ当時右御屋敷地ハ備後守様御屋敷御図ノ内ニ相成トアリ但最前ハ聞番指置レ其外ハ足軽小物指置レ候ヨシ旧記ニ見ユルト有」とあり、天和２年火災後の屋敷割り変更に伴い、黒多門邸が大聖寺藩邸に繰り入れられたことを記している。

b) 考古資料にみる区割りと年代観

①絵図比定地域における区画遺構との対比

医学部附属病院では、1984 年より始まった大規模再開発に伴う事前調査が、現在まで断続的に続いている。そのうち 1、2 図に関連する天和２年以前の大聖寺藩邸と黒多門邸の範囲は、病院地区南半部に該当し、中央診療棟地点・設備管理棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）、本地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、第２中央診療棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）の調査で、屋敷地外郭に関する遺構が検出されている（3 図）。

先述した『東邸沿革図譜』の一節からは、黒多門邸は天和２年被災段階では聞番・足軽などの詰人居住空間として機能し、その上限は寛文５年に求められる。以下に文献記録に示された年代観について考古資料からの検証を試みる。

②検出された生活面の様相

本地点ではD1面礎石遺構群建設時の造成土D1層から、4図に示した新寛永通宝文銭や「万治三　六月一日」の刻書を有す硯などの実年代資料が出土している。硯に付された「万治三」は1660年を示す。新寛永通宝文銭の初鋳年代は寛文8（1668）年と評価されており、実年代を示す資料のなかでは最も新しい年代を指している。同銭貨はD2面に対応する中央診療棟地点（以下、中診）L面検出遺構からも出土しており、混在の可能性はない。

黒多門邸の機能が証人屋敷であったことは湯島図の表記から読み取れ、その下限は重臣子弟証人制度が廃止された寛文5（1665）年にあたる。一方、『東邸沿革図譜』における「此邸の証人小屋等は従前の如く廃せられず。聞番、其他軽率・小人等を置くと見え、此所に彼等居住の事あり。」をそのまま解釈すると、居住者は変更したが、屋敷、建物は従前のまま使用されたと読み取ることができる。しかし、遺構面下から出土した寛文8年初鋳の新寛永通宝文銭の存在から、D1面被災遺構群はそれ以降に建設されたと考えられ、居住者の変更に伴い全面的な整備改修が実施されたことを窺わせている。

遺構群の下限については、5図に示した屋敷内露地SR1858舗装土中から延宝7（1679）年を上限とする「天下一御壺塩師堺見なと伊織」銘塩壺が出土したことから、舗装改修がその段階まで行われていたことを裏付け、「延宝八天四月」が刻書された砥石から少なくとも延宝8（1680）年までは居住者の存在が確認できる。また文献資料からも天和3年の屋敷割変更によって黒多門邸跡地が大聖寺藩邸に取り込まれることを受けて、新たな聞番居住区の検討が行われていたことが確認され（宮崎 2016）、黒多門邸が天和2年の火災まで聞番・足軽など勤番武士の居住区として機能していたと考えられる。

c）天和2年被災の遺構群

6図は本地点および中診の遺構分布図を黒多門邸範囲に対比させた図である。またLライン付近には旧地形に規制された初期藩邸造成期の段切り区画溝SD803位置を破線で示した。全体を概観するとSD803以北には天和2年の火災で焼失した遺構群が拡がる。

個々の遺構配置を概観すると、北端には同一建物と考えられるSB1611・SB1612（中診1号石列）が、西端にはSB429（中診2号石列）がある。この2棟は隣接する石組溝構造との検討から表長屋であることが検証された。敷地内にはSB1782を中心に南北方向の内長屋が7棟並び、各々の間口は木枠排水溝と露地に面している。長屋の南北にはゴミ溜と考えられる長方形土坑が数基検出された。その他、厠遺構、井戸など住生活を賄う施設が検出されている。

表長屋と内長屋の礎石配置には様相差が認められ、内長屋は基本的には間口2間×奥行3間を基本単位としているが、表長屋の間取りにはバリエーションが認められ、区割り面積も広い傾向がある。その様相差から表長屋と内長屋に居住者層の違いが存在した可能性が推定される。また各戸の間口から奥行1.5間の範囲に土間や炉が設けられ、擂鉢、火鉢を転用した「埋甕炉」も確認されている。

（2）長屋で使用された陶磁器類

D面焼土は、黒多門邸長屋群検出面直上ほぼ全域に拡がって検出された。本資料は斜面地を段切り造成した下位面に位置し、被災後の土地区画変更に伴い瓦礫層を均した後、西側の上位面に揃えるために2m近い盛土造成が行われた。5m四方単位で取り上げた遺物が同一グリッドないし近接グリッド単位で接合し、完形率が高い結果が得られたことが、大規模な瓦礫移動はほとんど行われず、ある程度の地ならしによって均一化された状態で残されていたを示している。即ち、D面焼土出土資料は、被災した居住者の所持品もしくは共用品であり、彼等の生活様相を知る有効な一括資料と評価される。

a）器種組成

D面焼土からは最少推定個体数1275個体の磁器・陶器・土器が出土した（7図）。器種数27種を数え、日常生活道具をほぼ網羅した詰人空間内での居住空間モデルと位置付けられる。こうした器種組成のあり方は火事や屋敷引き払い等を要因とする「非日常的な廃棄」を示しているといえる（栩木 1991）。しかし栩木も指摘しているように、廃棄された遺物は器種毎に圧倒的な数量を示す傾向が窺え、一世帯が必要とする生活道具一式“a”の“n”倍の傾向として読み取ることができる。そこで本資料の定数“a”を以下のように求めた。

一世帯の生活用具の購入・使用に関して、生麦村の名主関口家に残された『関口日記』の詳細な研究を行った森本伊知郎は、関口家に残る約50年間の陶磁器購入記録の分析から、各器種の購入頻度の差を破損率・耐久年数との関係に求めた（森本 2009）。そのなかで擂鉢は約20年に1回1～2点購入されたことが示されている。これは擂鉢が約20年を耐用年数として新しい製品に買い換えられた事象と評価でき、関口家では常時1点の擂鉢を保有していたといえる。また井汲隆夫は、新宿区・市谷仲之町遺跡第3次調査（根来百人組大縄地）出土の

一括廃棄資料の組成・器種数の分析から、出土した遺物群が一世帯の生活道具のまとまりを示していると指摘している。提示された器種組成表によると、飲食器が複数個体のまとまりを示しているのに対し、擂鉢は片口、練鉢とともに単数組成を示している（井汲 1995）。

そこで7図では擂鉢保有率を一戸1個体とし、縦軸に擂鉢数を基準とした組成係数を設定して器種毎の組成率を表した。数量が擂鉢の2倍以上の器種は、皿・平鉢、碗の2器種で前者は7.1倍、後者は3.6倍を示す。擂鉢とほぼ同数を示す器種には、瓶、坏、壺・甕、香炉・火入れ、大皿・大平鉢があり香炉・火入れ以外は食膳具、厨房具と食に関する器種に多い。それ以外の器種は、3割以下の組成比にとどまり、3つのグループに大別される様相が窺われる。擂鉢数の2倍以上を占める碗、皿・平鉢では、皿・平鉢が碗の2倍を示しており、碗が居住者数を反映していると仮定した場合、一戸あたり4人程度で共同生活が営まれていたと想定される。碗の倍数を示す皿は1人あたり2枚の割り当てとなり、居住者の日常食事が多くとも一汁二菜で構成されていることを示す。

擂鉢数と近似した器種は、瓶、壺･甕の貯蔵具、大皿･大平鉢、坏の飲食器で、これらは1戸に1点備えられ、日常生活における必需品と考えられる。瓶は瀬戸・美濃産の舟徳利（384）、志戸呂産の由右衛門徳利（401）など1升以上の容量を有する大形製品に偏っている。壺・甕は磁器、陶器ともに一定量が認められるが、陶器では瀬戸・美濃産の寸胴形三耳壺（411）がまとまりを示す。大皿・大平鉢は主菜などを盛りつける共用器として使用されたと推定される。それに対し、擂鉢の1/3以下の器種は居住者の嗜好や生活環境に左右される器種と考えられる。

b）産地、小器種の偏在性とその背景

碗、皿・平鉢は、擂鉢の3倍以上の組成比を有し、勤番武士の日常生活に欠かせない器種と評価される。以下に胎質、生産地、小器種属性の視点を通し考察する。8図では器種毎の産地組成、小器種組成を示した。②、④、⑤に示したコードは、東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 Ver.4（本報告第3分冊参照。以下､東大分類4）の分類コードを指す。

碗では、肥前磁器25.8%、肥前陶器59.3%、瀬戸・美濃12.7%、京都・信楽2.1%の組成比を示し、陶器碗が全体の約3/4を占め、特に肥前陶器碗の組成比が突出している様相が窺える（①）。碗は、飲食具としての組成を論じる場合、漆器椀を切り離して考えることはできないが、火災資料ではそれを含んだ組成を復元することはできない。しかし長佐古真也が、17世紀段階の陶磁器碗組成増加動向は、陶器碗の全て、初期磁器碗の一部が喫茶習慣と深く関わっていると指摘するように（長佐古1999）、陶器碗が陶磁器碗組成の約3/4を占める結果は、陶磁器碗の用途を示唆する傾向を指摘することができよう。さらに陶器碗の内訳をみると､肥前呉器手碗（TB-1-a、233）が51.5%と突出し､それに京焼風陶器丸碗（TB-1-b、238など）が19.9%と続く（②）。この呉器手碗の組成比は、同段階の中診陶器碗主要遺構総計での22.2%､次段階（元禄年間前半頃）指標遺構 F34-11での38.5%と比較しても際だった値を示しており、黒多門邸内で意識的に呉器手碗が選択されたことを示している。

皿・平鉢では、肥前陶磁が約8割と碗同様高い値を示している（③）。肥前陶磁の内訳は有田内山製品に比定される高品質染付皿（JB-2-a・e、28、45など）29.9%、有田外山製品と考えられる染付皿（JB-2-s、94など）12.3%、波佐見町中尾上登窯跡などで生産された見込み蛇ノ目釉剥ぎの青磁皿（JB-2-k、114）20.0%、武雄市内野山北窯跡などで生産された青緑釉輪剥陶器皿（TB-2-a、254）24.3%である（④）。高品質食器一括廃棄資料と評価されるL32-1を除いた同段階の中診主要遺構の肥前陶磁器皿小器種組成比はJB-2-c･d･e：53.8%、JB-2-k：4.0%、TB-2-a：3.6%と、染付皿を中心にした様相が認められ、JB-2-k、TB-2-aともに4%前後と本資料とかけ離れた値を示している。これは碗組成におけるTB-1-aのあり方と同様に、JB-2-k、TB-2-aが意識的に選択された結果と推測される。本資料の皿組成は、内山製品を一定量含みながらもこうした量産品で賄われていたことが特徴といえよう。

大皿・大平鉢では、刷毛目（TB-3-a、299など）が57.8%、三島手（TB-3-b、312など）が28.9%、京焼風陶器（TB-3-c、325）が2.2%と、約9割が肥前陶器で占められている（⑤）。瀬戸・美濃では笠原鉢（336など）や黄瀬戸鉢（340）が散見されるにすぎない。このように武雄市を中心に生産された刷毛目、象嵌手法による大平鉢が、主体的に選択されていた様相が看取できる。

擂鉢では、瀬戸・美濃（448）が70.8%、丹波（462）が26.2%を示す（⑥）。この様相は、同段階の御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）で丹波が59.3%と主体的様相を示した例、中診で丹波と瀬戸・美濃がほぼ二分した例と比較し（堀内 1998）、本資料の特徴的様相といえる。

香炉・火入れでは、肥前磁器23.4%、肥前陶器14.9%、瀬戸・美濃61.7%の組成比を示す（⑦）。胎質

的には陶器が7割強を占め、特に瀬戸・美濃の割合が、65.7%と多い。これは瀬戸・美濃を中心とした陶器が主体的に選択されていた様相を顕している。

壺･甕では、瀬戸･美濃46.9%、肥前陶器14.3%、京都･信楽10.2%､肥前磁器28.6%の組成比を示す（グラフ⑧)。肥前陶磁では口縁が直立し、肩が張る蓋付きの壺が主体をなす。瀬戸・美濃では鉄釉寸胴形三耳壺が主体である(411)。この製品は口唇部が釉剥ぎされており蓋を伴うことが確認される。京都・信楽では、いわゆる腰白茶壺が認められる。産地組成としては、組成の5割近くを瀬戸・美濃の製品によって賄われていたといえる。

瓶では、舟徳利を主体とする瀬戸・美濃が48.1%、志戸呂16.9%、備前14.3%、肥前陶器1.3%、肥前磁器19.5%を示す（⑨)。壺･甕同様に組成の5割近くが瀬戸･美濃の製品によって賄われていた。

擂鉢約7割、香炉・火入れ約6割、瓶、壺・甕約5割に瀬戸・美濃の製品が使用されている。食膳具において組成の中心を担っていた肥前陶磁は、壺・甕、香炉・火入れで4割強と一定の組成比を示すものの全体的に低い値を示す。また瓶では備前・志戸呂、擂鉢では丹波と食膳具の産地組成にはない製品が一定の割合で使用されている。この結果から貯蔵具、調理具などの実用的用途で使用される生活用品では、瀬戸・美濃を中心とした加飾属性に乏しい陶器窯の製品が選択され購入、使用されていたと考えられる。

以上、D面焼土出土資料のうち、擂鉢を基準組成値として一定量存在する器種および小器種について定量分析を試みたが、食膳具においては肥前製品が、その他の生活用品においては瀬戸・美濃製品が主に選択され、さらに形態的バリエーションが豊富な食膳具では、特定の製品が突出した組成比を示す傾向が看取された。それは大名藩邸という閉鎖された社会空間がもたらす特異な流通形態、即ち、個人の嗜好が反映されにくい藩組織による一括購入による結果と考えられ、必然的に大量の需要・注文に対応可能な窯業地の製品に限定され、さらに器種によって特定の生産地または製品に偏りを見せた背景には、窯場単位の取り引きによって、使用者階層に応じた製品を供給するシステムが藩邸内に存在した結果と考えられる。

2. C2層出土資料の様相

(1) C2層形成状況とその背景

a) C2層の形成要因

先述したように、天和2年の火災を契機に、大聖寺藩邸の東側に道を挟んで隣接していた黒多門邸区域が大聖寺藩邸に組み込まれることになった。黒多門邸と大聖寺藩邸は緩斜面上に立地しているため、道を境にひな壇状の区画が形成されていた。屋敷割変更により大聖寺藩邸は従来からの西側高台部に標高を合わせるため、黒多門邸跡地全体に盛土造成を行い藩邸全域がほぼ平準化された。この盛土造成は場所によっては2m以上を測り、夥しい量の造成土が黒多門邸跡地へ運び込まれた。この盛土層全体をC層とした（主旨2図)。C層はロームブロック主体層で構成され、堆積状況から東側を除く3方向から土砂搬入が行われたことが確認された（主旨3図)。特にひな壇区画低位のD1面長屋群区域で搬入量が多く、その埋立途中でほぼ純焼土で形成されるC2層が搬入された（主旨2図)。C層埋立過程の初期段階では､焼土･瓦礫などが混在する程度であったことから（C3層)、埋立と平行して本格的な瓦礫処理が行われたことを窺わせる。その後再びロームブロック主体土が搬入され、C2層は完全にC層内にパックされた。

本資料はコンテナ約40箱を要す膨大な破片資料で構成されているが、被災資料の特性で個体識別が困難な小破片が極めて多く、最少個体数の定量分析では土器を含めて490個体にとどまり、接合率も良好とはいえない。これは近代以降の撹乱の影響に加え、大聖寺藩邸及び加賀藩邸内の18世紀以降の遺構覆土からも出土事例が確認されるなど、本地点以外への廃棄処理、大聖寺藩邸内でのC層掘削行為による再移動などの複数要因が介在した結果と考えられる。

b) C2層発生場所と保管状況

このようにC2層出土資料は、D面焼土と異なり黒多門邸跡地の造成に乗じた廃棄行為に求められ、黒多門邸居住者とは全く関わりを持たない資料である。ではどこから搬入されたのであろうか。その答えは意外と早く見出された。入院棟A地点の調査より約半年後に開始した医学部教育研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室1999)の調査で本火災対応遺構面より出土した陶磁器が、10数点C2層と接合したのである（17図)。医学部教育研究棟地点は上屋敷以降御殿空間に比定される地点で、火災以前の遺構面からも御殿建物基礎と考えられる大形礎石遺構が多数検出され、下屋敷段階から藩邸中枢部であったことが検証された。C2層同類資料は図に掲げた遺構出土資料のほか、被災して変色した遺構面上にも焼土と共に散乱しており、出土範囲から遠くない所で保管されていたことを窺い知る状況を呈していた。この接合

事例によって、C2 層は加賀藩邸御殿空間で使用された資料群であることが検証された。

後述するように本資料の大半は高品質食器類で構成され、中皿、鉢、坏に加え、大皿類も一定量出土している。C2 層図版 6 図 689 は色絵で草花文を描いた「古九谷様式」の大皿で、高台内には染付二重圏線が描かれた製品である。690 は見込みに色絵亀甲文を描いた大皿である。この 2 点の体部破片がほぼ同位置、同方向で溶着した事例が認められ（18 図）、複数個体の大皿が直接積み重ねられて収納されていたことが確認された。本資料には 18 図に示した猪口をはじめ、皿、鉢など多数の破片に重ね積み収納を示す溶着痕が認められ、御殿内膳所もしくは土蔵内で複数個体単位で収納された実用品であったことを示している。

(2) C2 層出土資料定量分析にみる特徴

報告書で提示した器種組成をもとに本資料の特性を以下に列記する。分析に用いた分類コードは、東大分類 4 による推定最少個体数を示す。ただしセット数量、法量、文様に関する分析は、報告書掲載遺物に限定した数量を示した。また本資料の特徴を見出すために、同火災による一括廃棄資料である中診 L32-1 を比較資料として併示した。

a) 器種組成

本資料は、皿・平鉢、大皿・大平鉢、坏、碗、鉢、猪口、瓶、水注、壺・甕、蓋物、香炉・火入れ、仏飯器、水滴、ほうろく、塩壺の 15 器種で構成され、前節で扱った D 面焼土と比較すると 5 割程度の器種数で、擂鉢、片口鉢、火鉢、陶器瓶などの貯蔵具、調理具がほとんど認められない。内訳をみると、皿・平鉢 51.8%、碗 13.9%、坏 9.2%、猪口 5.9%、大皿・大平鉢、瓶 3.3% と皿・平鉢が約半数を占め、碗、坏、猪口などの食膳具がそれに続く様相が認められ、食膳具のうち皿と向付といった銘々器で構成され、それに大皿・大平鉢、瓶（銚子）、鉢などの共用器が含まれていると整理できる（19 図①）。この様相は、同図に提示した中診 L32-1 と近似する。

b) 産地・胎質組成

本資料の胎質・産地組成は、磁器製品は舶載 5.2%、肥前 80.2%、陶器製品は肥前 5.9%、瀬戸・美濃 5.0%、京都・信楽 3.4%、備前 0.2% で構成され、胎質面では約 85% が磁器製品、産地面では約 86% が肥前製品で、双方を合わせるといずれも約 8 割の肥前磁器で賄われていることを示している（19 図②）。L32-1 と比較すると舶載磁器の割合がほぼ半減し、それに代わり肥前、瀬戸・美濃、京都・信楽の陶器製品が一定量含まれている点で相違が認められる。陶器製品は碗の割合が多く、特に京都・信楽では「仁清」印の製品が数点存在するなど、喫茶用食具が一定量含まれている点が特徴といえよう。その半面舶載陶磁の割合が減少している背景として、後述する誂え（購入）時期が大きく関わっていると推測される。

c) 皿・平鉢小器種組成

次に磁器皿に目を向ける（19 図③）。凡例の英小文字は東大分類 4 における皿小器種分類コードで以下を示す。

a：高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里
c：高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門 B 窯跡など指標
d：高台断面がシャープな「U」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯跡指標
n：鍋島
r：糸切細工の貼付高台
s：初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた組製品、廣瀬向窯跡など指標

舶載磁器 4.4%、a7.3%、c17.1%、d62.2%、n2.2%、r6.5%、s0.4% を示し、肥前磁器では 1670 年代の高品質製品 d が 6 割を越える値で、それに 50 ～ 60 年代の高品質製品 c が続き、双方で 8 割を超える。一方 L32-1 では、舶載 16.4%、a3.9%、c67%、d3.9%、r8.8% と、c が 7 割弱、それに舶載品が 2 割弱と続き、双方で 8 割を超える。本資料の主体をなす磁器皿に注目し L32-1 から C2 層を見通すと、②から舶載磁器の減少と、肥前磁器が c から d へ移り変わったことが読み取れ、すでに誂えられていた舶載磁器、a、c から最新製品 d への補充もしくは入れ替えが行われた結果と考えられる。文献記録には慶安 3（1650）年の本郷邸全焼記録が残されている。現在までの調査ではその状況を裏付ける考古資料は得られていないが、本資料に舶載磁器や肥前磁器皿 a が少ないのは、被災した食器類を新たに買い直した一群と考えることができる。

d) 揃いとしての特性

19 図④は同一意匠を呈すいわゆる揃い（セット）の製品数を示したグラフである。横軸に 1 セットの個体数、縦軸にセット数を示した。遺存状況の関係から単一

個体の製品が最も多いが、複数個体例は1セット8個体までが複数認められ、13個体が最大である。大学校舎建設の撹乱を受け、1/4 ～ 1/5しか遺存していなかったL32-1も同様に1個体製品が突出し､13個体まで複数セットが認められる。それ以上は1セットの事例であるが、最大65個体まで認められた。ともに限定的な遺存状況故に断定的なことは述べられないが、揃いの意匠に対する指向差が内包されている可能性もある。

e）皿・平鉢、大皿・大平鉢の口径寸法による特徴

19図⑤は皿類の口径分布を示したグラフである。横軸に口径、縦軸にパーセンテージを示した。口径の単位は寸で表示し、0.25寸単位で切り捨て、0.5寸単位でまとめた値である。大皿・大平鉢を除いたC2層資料では3.5寸、4.5寸、6寸にピークが認められるが、一定量含まれる型打成形による輪花皿の口径誤差を加味すると、4寸、5寸、6寸、7寸に大別することができる。一方L32-1では、2 ～ 2.5寸、4.5寸、5.5 ～ 6寸、7寸にピークが認められ、グラフの波形がC2層より一段階高い数値を示している。この差はL32-1組成ではほとんど認められない型打成形による深皿（なます皿）による食器形状の変化が関連していると読み取れる。工業製品としての肥前磁器の意匠変化は､当然消費者（この場合は大名）の需要に答えた結果であり、ニーズの差が現れた結果といえる。

f）C2層資料の位置づけ

C2層、L32-1資料など揃いの高品質磁器製品を中心にした一括資料に関し、堀内秀樹はその特徴を以下のようにまとめている（堀内2005、2011、2016）。

- 遺物群は大皿を含む磁器皿・鉢・坏類が多く、偏った胎質・器種組成を示している。
- 遺物群は上質な磁器製品がその主体を占めている。
- 皿・鉢・坏類の多くは揃いで使用・保存されている。
- 皿類の法量は、5 ～ 7寸が主体を占めている。

そして「これら食器類については、加賀藩本郷邸では上屋敷御殿内の御膳所の位置から御殿空間南側の土蔵群に入れられていた可能性を考えているが、こうした食器類は御殿内で日常的にも利用され、行事や儀礼用に限定されたものではなかった可能性も強い」と評価している（堀内2016）。

本報告の分析結果は、氏の論点を再評価する結果となった。その中でC2層とL32-1を比較した結果、輸入陶磁と国産品の組成率や、国産磁器皿の窯差を反映する組成率に認められた差異は、主体的購入時期の差の顕れと評価でき、断片的ではあるがセット数の差は、揃い意匠に対する指向の変化や、堀内も指摘している御殿空間内でのプライベートな日常利用による可能性も考えられる。陶器碗が一定量含まれている背景もそこに求めることができる。

（3）製作技法からみた特性

本節では、本資料の主体を占める肥前磁器について、以下の製作技法、意匠に視点をあてて、本資料の特性を概観したい。

a）施釉・成形技法

20 ～ 22図に、碗、皿・平鉢、鉢、坏、猪口に関し、成形技法と装飾技法（釉薬、顔料）の関連を示し。20図には装飾表現率を示した。染付70.7%、白磁20.6%、色絵3.3%、青磁3.0%、瑠璃釉1.0%、黄釉1.5%と、染付製品が7割と中心的存在を担っているが、白磁製品が2割を占めている点が注目される。21図には成形技法率を示した。ロクロ成形によって仕上げられた製品が約57%､ロクロ成形後もしくは糸切細工による型打成形（以下、型成形とまとめる）が施された製品が43%を示し、半数弱の製品が丸皿以外で構成されている。さらに両者の関わりをみるために各々の装飾技法について成形技法との関係を示した（22図）。その結果、白磁製品では型成形製品が約65%を示した。この中には施文を目的とする型成形も含まれるが、アクセントの低い白磁製品を型技法によって際立たせたことが、御殿空間内食器として取り入れられた一因と推定される。

b）文様の種類と特徴

23図には底裏銘の種類と個体数を示した。左側帯グラフに意匠数、右に揃いの実数を提示した。報告書掲載資料の底裏銘は右図に示した10種類で、未掲載資料にはこの他に「金」などがある。最も多い事例が愛陶家が「古之人」と呼ぶ異体字銘で、「渦福」が続く。いずれも高島裕之が提唱した南川原山様式を特徴付ける銘である（高島 2015など）。「大明成化年製」「太明成化年製」の2行6文字銘、「宣徳年製」など紀年文字事例が一定量存在するが、1650 ～ 60年代に盛行する「角福」､「寿福」は少ない。

24図では皿・平鉢の裏文様の種類と個体数を示した。最も多く認められるのは、梅花唐草文である。唐草部は

2本の縁取り線内に丁寧にダミをかけ、花弁部は右図に示したようにダミで塗り潰した例と輪郭のみの例が存在する。量的には塗り潰した事例が多い。続いて多い事例は牡丹唐草文である。蔓と、葉、花弁の輪郭を細線で丁寧に描き、葉、花弁ともに先端に向けて薄くなるグラデーションを付けてダミが施されている。非常に細かい意匠であるが、ダミは輪郭線内に収まり丁寧に描かれている。本文様は後述するように見込み文様としても多用されている。量的には多くないが、二重線の唐草文に「如意頭唐草文」も数例認められ、本文様の初現期を知る事例と評価される。

25図では皿・平鉢の見込み文様の種類と出土数を示した。複数要素で構成されている意匠は（C2層図版2図624の鳳凰と牡丹唐草など）、それぞれ1要素として扱った。牡丹唐草が、種類、個体数共に多いのはそれを反映している。とはいえかなり好まれた意匠といえよう。具体的意匠事例としては、龍、雨降り文、流水、鳳凰、七宝、雪輪、柴垣、鹿、扇子、梅、楼閣山水、松、波、柘榴が複数種で認められる。また26図には碗、鉢、坏の外面文様を示した。バリエーションを含む草花、花を除く具体的意匠事例のうち、皿・平鉢で複数種認められた意匠と共通するものに、鳳凰、雨降り、雪輪、龍があり、器種を超えた主文様の共通性を観ることができる。即ち受注者（加賀藩）側ニーズの顕れと受け止めることができる。27図に複数種に認められる共通文様を器種単位に示した。器種は19図で認められた中皿（6～7寸）、深皿・型皿（4.5～5寸）、小皿（3.5寸）に、平鉢（6～8寸）と向付と想定される坏・鉢を加えた。雨降り文が小皿を除く全種で認められ、獅子を除く龍、鳳凰、雪輪、流水も3種で認められる。そこには器種を超えた嗜好性が垣間見え、膳を横断する同一意匠の意識に加え、それを構成する食器群の共通要素として類似文様によるテーマ性への嗜好が意識された顕れと考えられる。

おわりに

加賀藩邸における御殿空間、詰人空間という全く異なる場所で使用された同一火災廃棄資料を扱い、各々の特徴を再検討も含め整理した。D面焼土は詰人が日常生活で使用する多様な必需品で構成され、碗、皿類小器種の偏在性、用途に応じた生産地の偏在性などは、個人嗜好介在の希薄性を意味し、参勤交代によって江戸へ「長期出張」する勤番武士に対し、藩主導で使用者階層に応じた什器類が誂えられた結果と読み取れる。

一方、C2層は、皿、鉢、坏、猪口の膳上で使用される器種を中心に、大皿、大鉢、銚子など食膳周辺を賄う器種や喫茶具など食を受用する側の器種で構成され、藩主周辺の日常食器としての使用も含め御殿空間使用食器に求められる質が顕在する一群である。同様の組成を示すL32-1との比較では、舶載磁器および肥前磁器皿小器種などの組成比から主体的購入時期の差が求められた。それを反映して白磁製品を含む型製品の多用や、法量、形態の変化、膳上での揃いを意識したと推定される類似文様の嗜好性などが認められ、注文時における高品質製品を求める御殿空間使用食器に対する発注者の意識を読み取ることができる。

このように全く相容れない一括資料ではあるが、藩邸内で使用された実用陶磁器類は、その規模、用途に応じて発注・購入され、組織としてのオーダーに差配された点で共通し、江戸藩邸で使用される什器類のプロセスを示しているといえる。

【引用・参考文献】

井汲隆夫　1995「市谷仲之町遺跡第3次調査の時期区分と生活用具」『市谷仲之町遺跡　Ⅲ』

石川県図書館協会 1938「東邸沿革図譜」『景周先生小著集』

金沢文化協会　1936『可観小説　前編』

高島裕之　2013「有田・南川原窯製品の生産技術の背景－江戸遺跡での出土状況と合わせて考える－」『江戸の武家地出土の肥前陶磁』第3回近世陶磁研究会

高島裕之　2015「日本における高品質磁器製品の生産と需要の背景」『中近世陶磁器の考古学』第1巻、雄山閣

田中政幸　1995「加賀藩上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』第13号

東京大学遺跡調査室　1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3　医学部附属病院地点』

東京大学遺跡調査室　1990『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室 2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

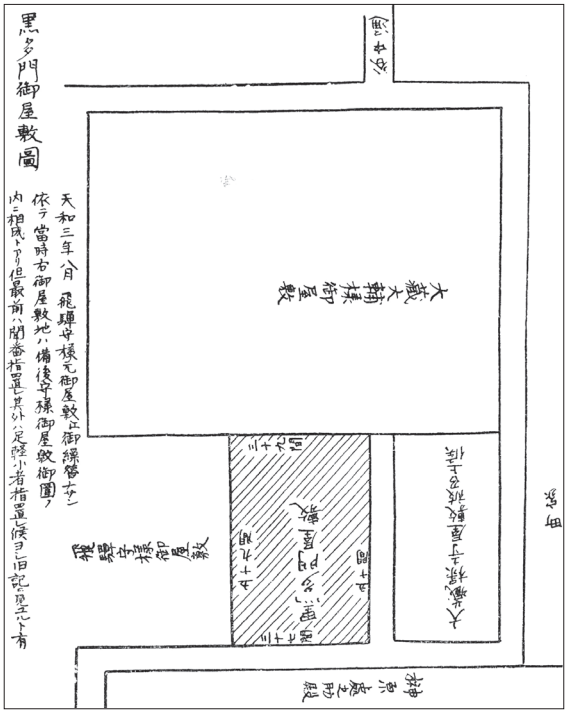
東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　医学部附属入院棟A地点』

栩木　真　1991「四谷三丁目遺跡における廃棄の考察」『四谷三丁目遺跡』

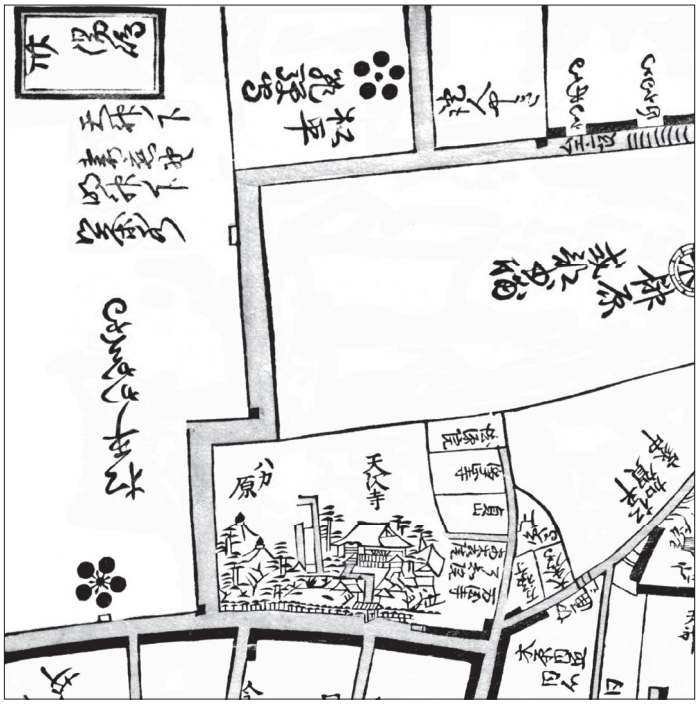
長佐古真也 1999「碗を語る」『発掘が語る千代田の歴史』千代田区立四番町歴史民俗資料館

成瀬晃司　2010「加賀藩・大聖寺藩本郷邸出土の鍋島－天和2

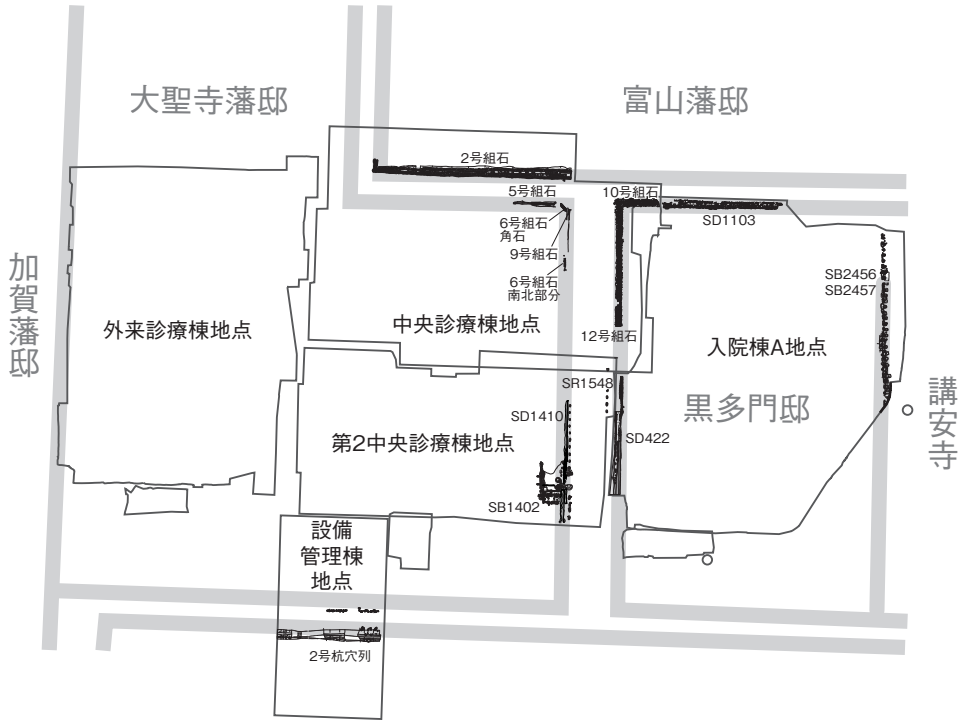
（1682）年の火災に伴う資料を中心に－」『改訂版初期鍋島』創樹社美術出版
成瀬晃司　2013「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器様相」『江戸の武家地出土の肥前陶磁』第3回近世陶磁研究会
成瀬晃司　2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟A地点　研究編』
成瀬晃司　2016「黒多門邸の研究」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟A地点　研究編』
堀内秀樹　1998「擂鉢から見た江戸と周辺地域」『江戸と周辺地域』江戸遺跡研究会第11回大会
堀内秀樹　2005「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6　東京大学本郷構内の遺跡　工学部1号館地点』
堀内秀樹　2011「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿の生活」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館
堀内秀樹　2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル－加賀藩本郷邸の出土資料の分析から－」『中近世陶磁器の考古学』第2巻、雄山閣
宮崎勝美　1990「加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第3分冊　考察編』
宮崎勝美　2008『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社
宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟A地点」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13　医学部附属病医院入院棟A地点　研究編』
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学－出土遺物からみた生産と消費－』雄山閣
湯沢　丈　2018「江戸藩邸出土の儀礼道具－揃いの磁器の使用モデルを中心に－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第31号
吉田伸之　1988「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科　日本の歴史別冊　歴史の読み方2　都市と景観の読み方』朝日新聞社



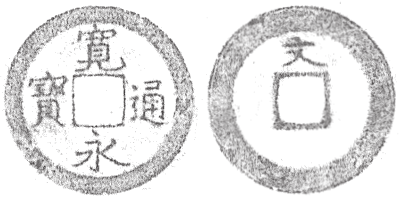
1図 黒多門御屋敷図
「東邸沿革図譜」黒多門邸条所収

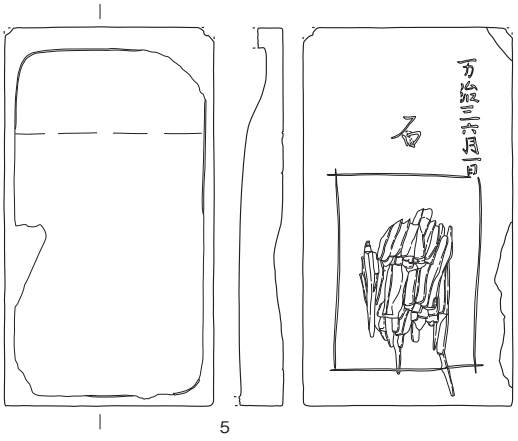


2図「江戸方角安見図 延宝八年板」に描かれた黒多門邸
上部「証人やしき」が黒多門邸（国立国会図書館所蔵）

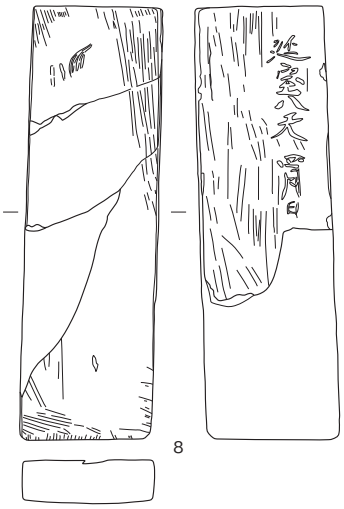


3図 天和2年以前の地境遺構と屋敷割り比定（S=1/2000）

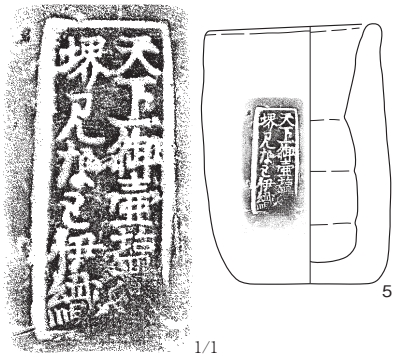




4図 D1層出土実年代推定遺物
（銭貨は1/1、他は1/3　遺物番号は、報告編第4分冊に準拠）

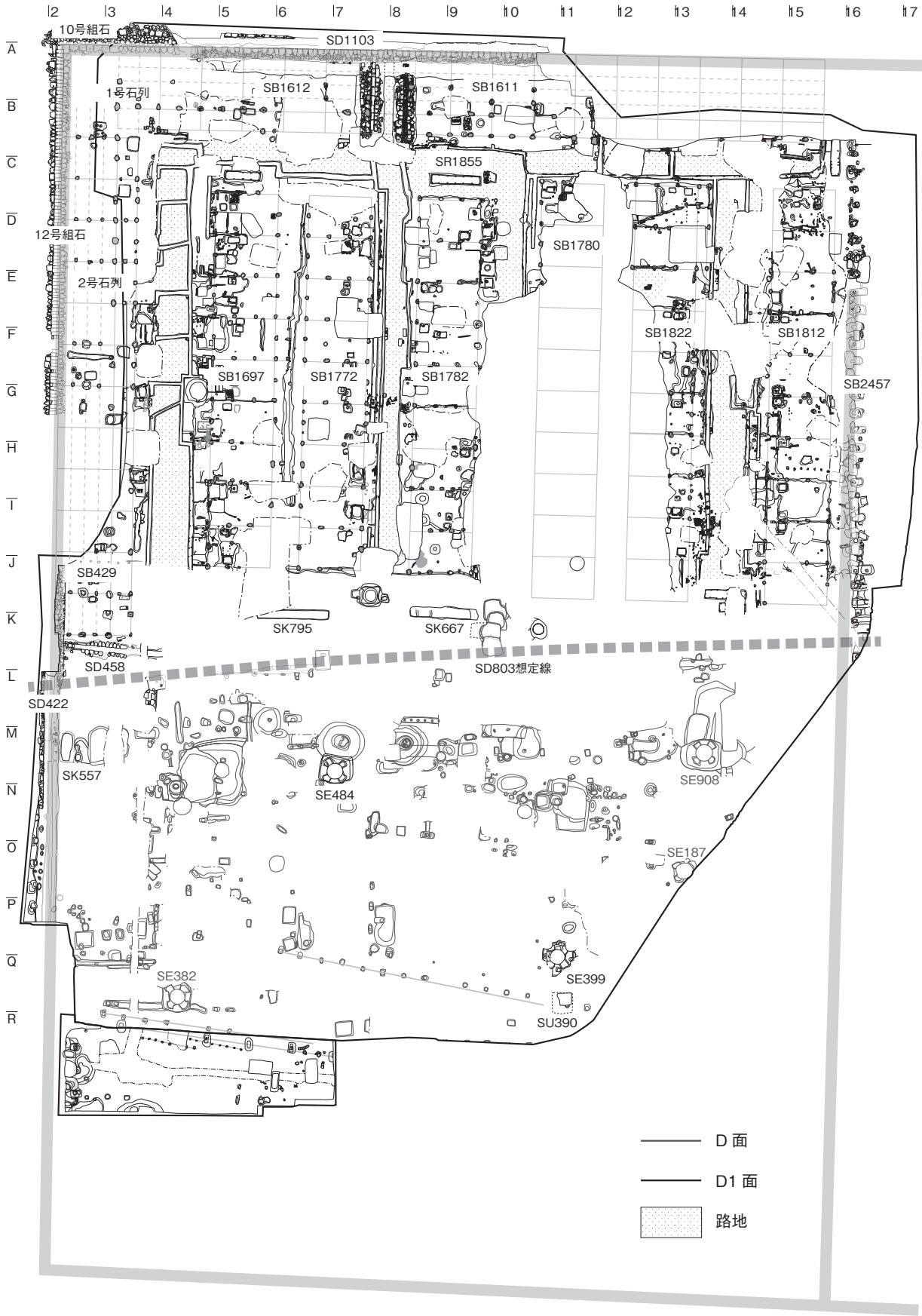


D面焼土層

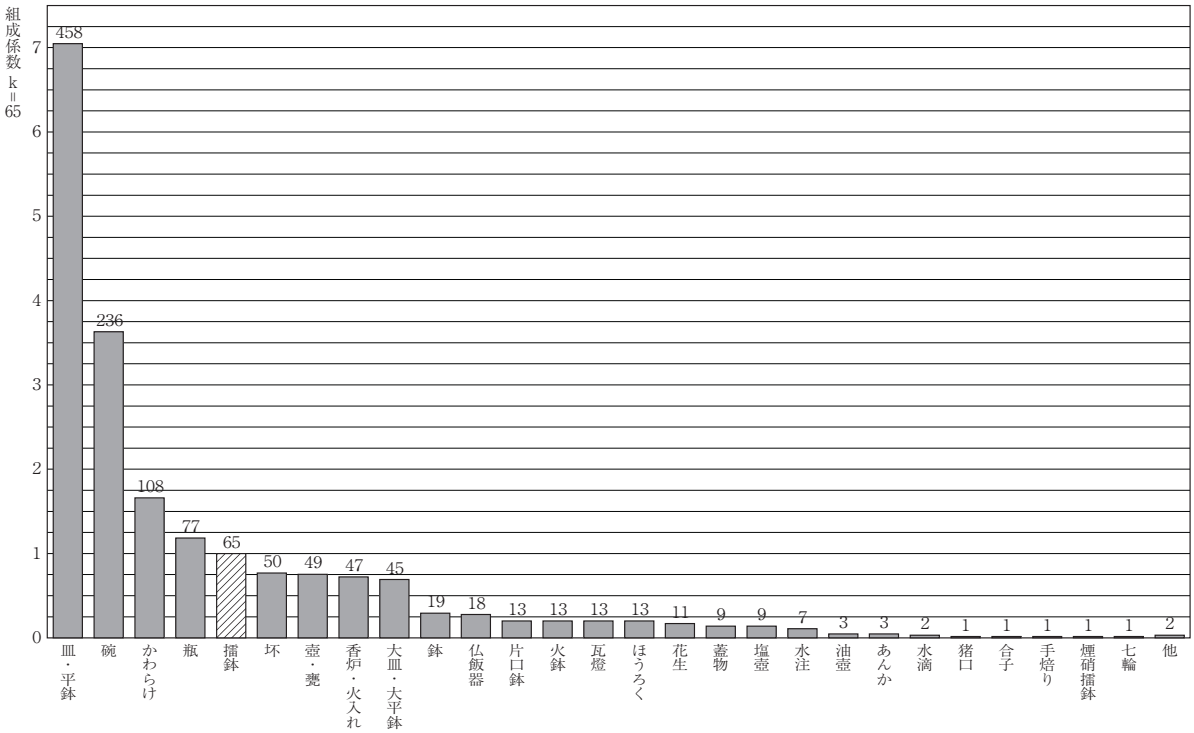


SR1858

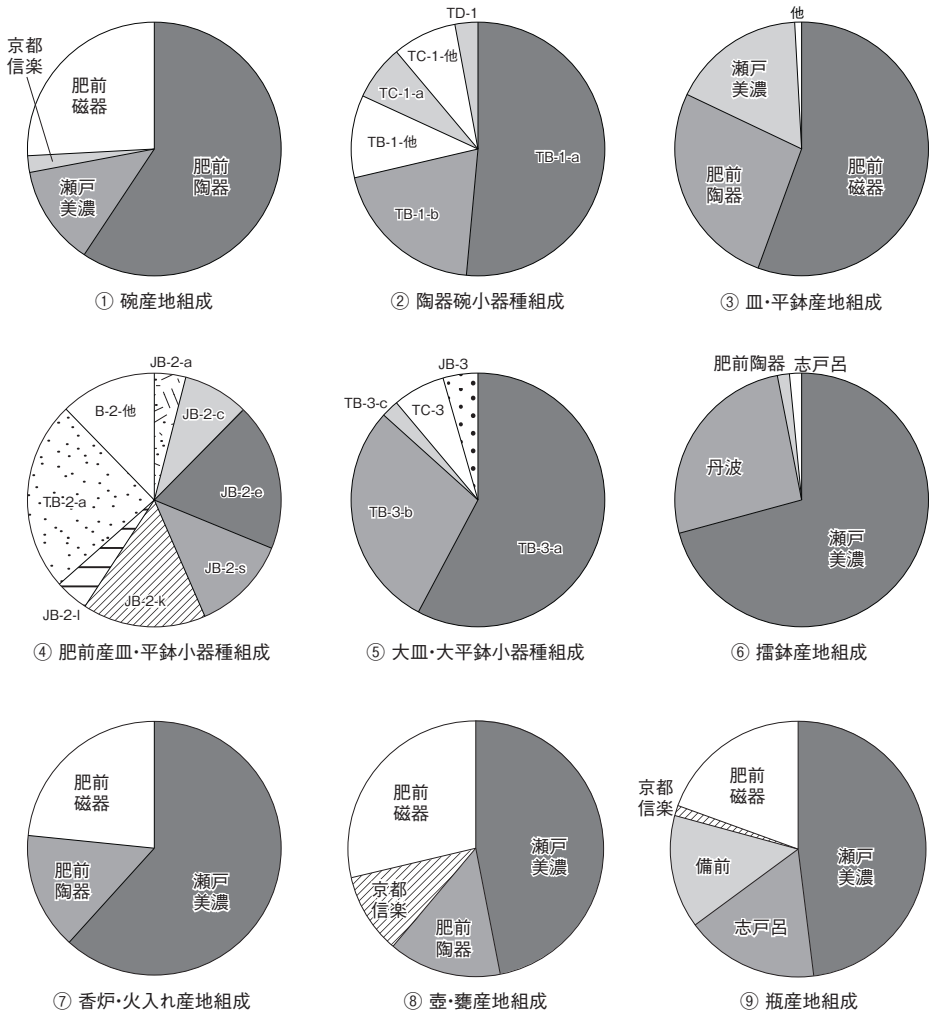
5図 D1面関連出土実年代推定遺物
（1/3　遺物番号は、報告編第4分冊に準拠）



6図 D1面遺構分布図(S=1/500)



7図　D面焼土出土磁器・陶器・土器器種組成（数値は推定最少個体数）

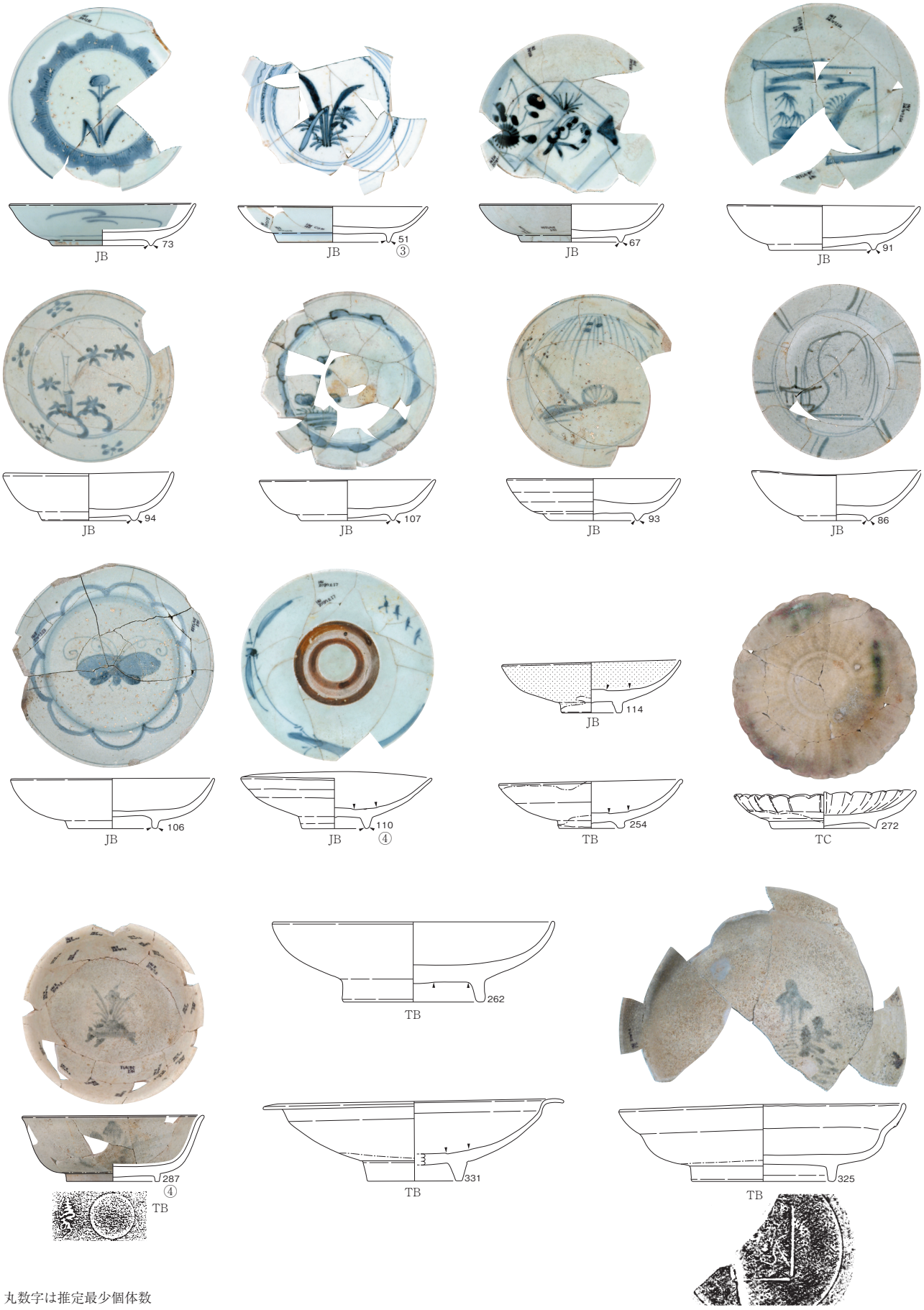


8図　D面焼土出土陶磁器の様相

丸数字は推定最少個体数

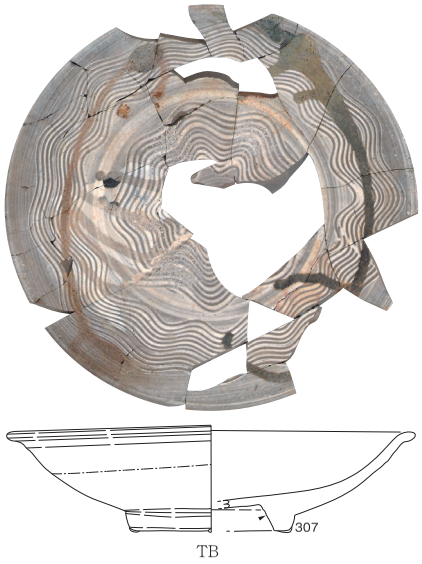
9図　D面焼土出土磁器・陶器・土器（1）

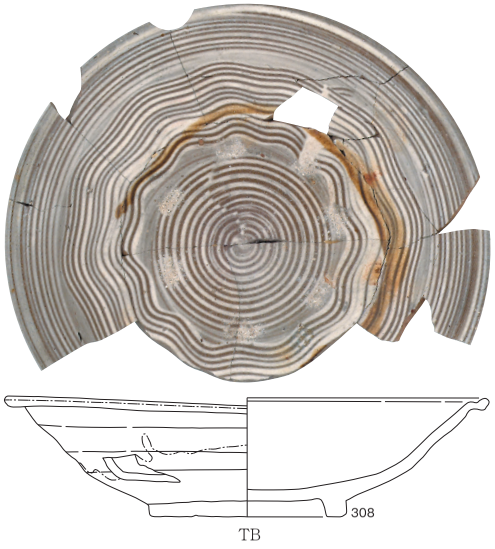
英字は東大分類胎質・産地（JB 肥前磁器、TB 肥前陶器、TC 瀬戸美濃、TD 京信楽、TE 備前、TF 志戸呂、TK 丹波、DZ 土器）

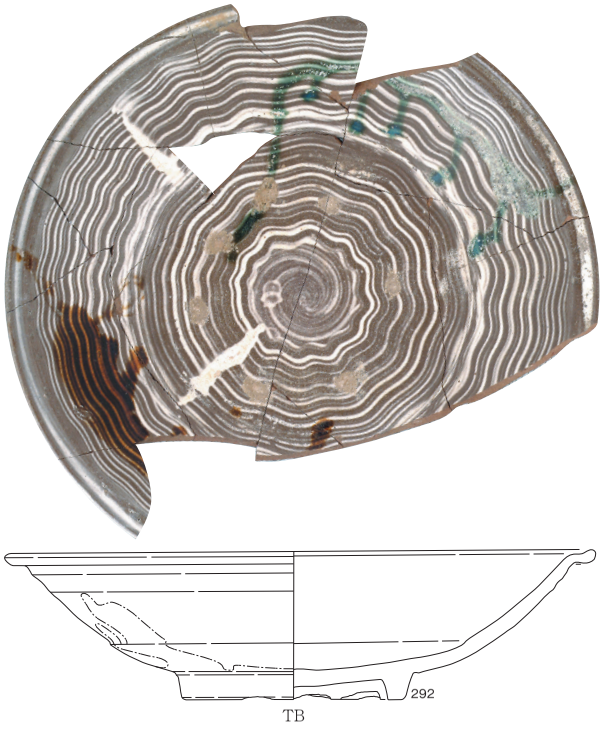


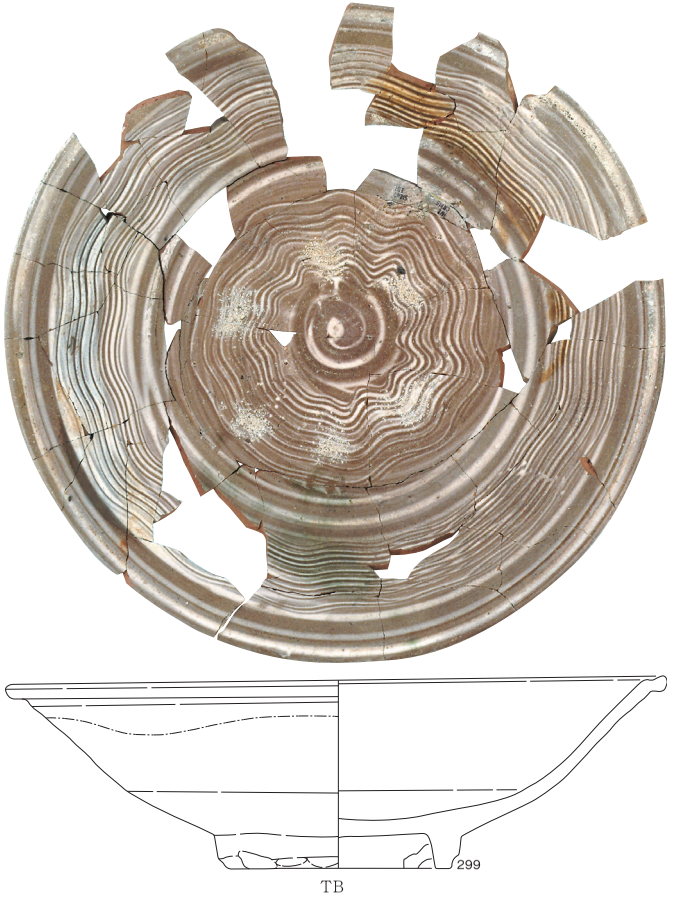
丸数字は推定最少個体数

10図　D面焼土出土磁器・陶器・土器（2）

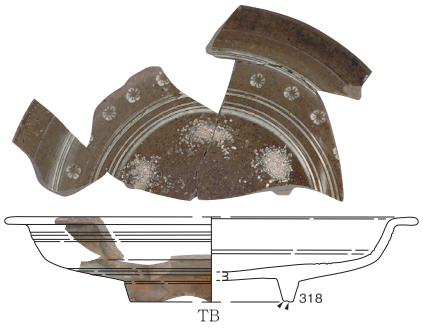


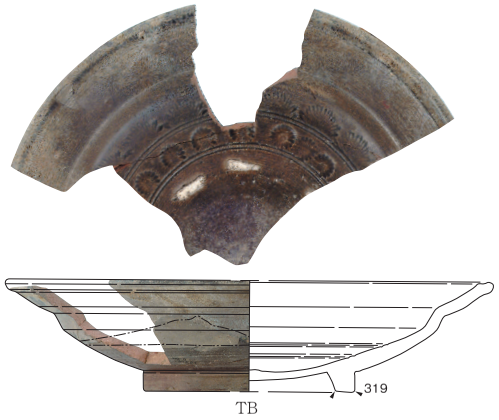




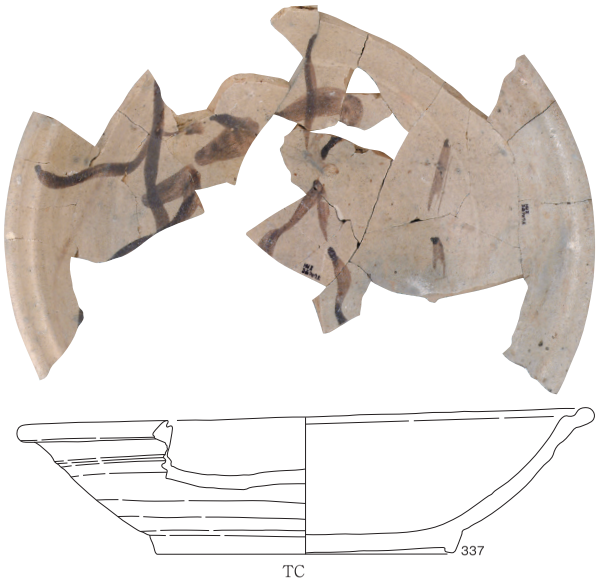


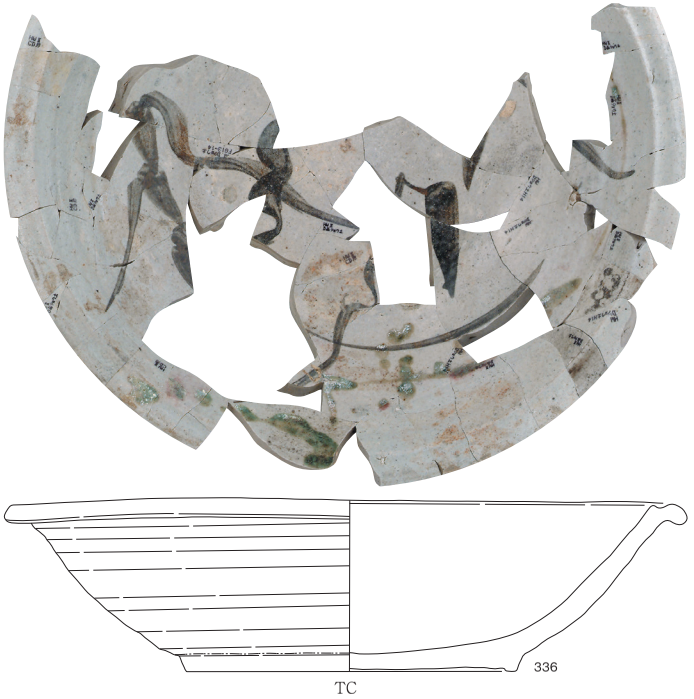
11 図　D 面焼土出土磁器・陶器・土器（3）

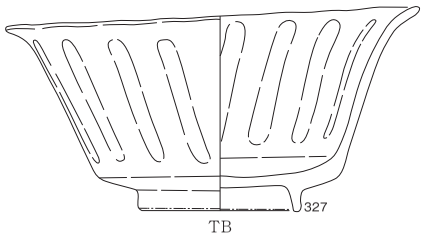


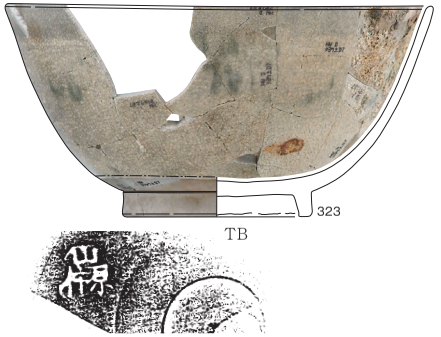


12 図　D 面焼土出土磁器・陶器・土器（4）

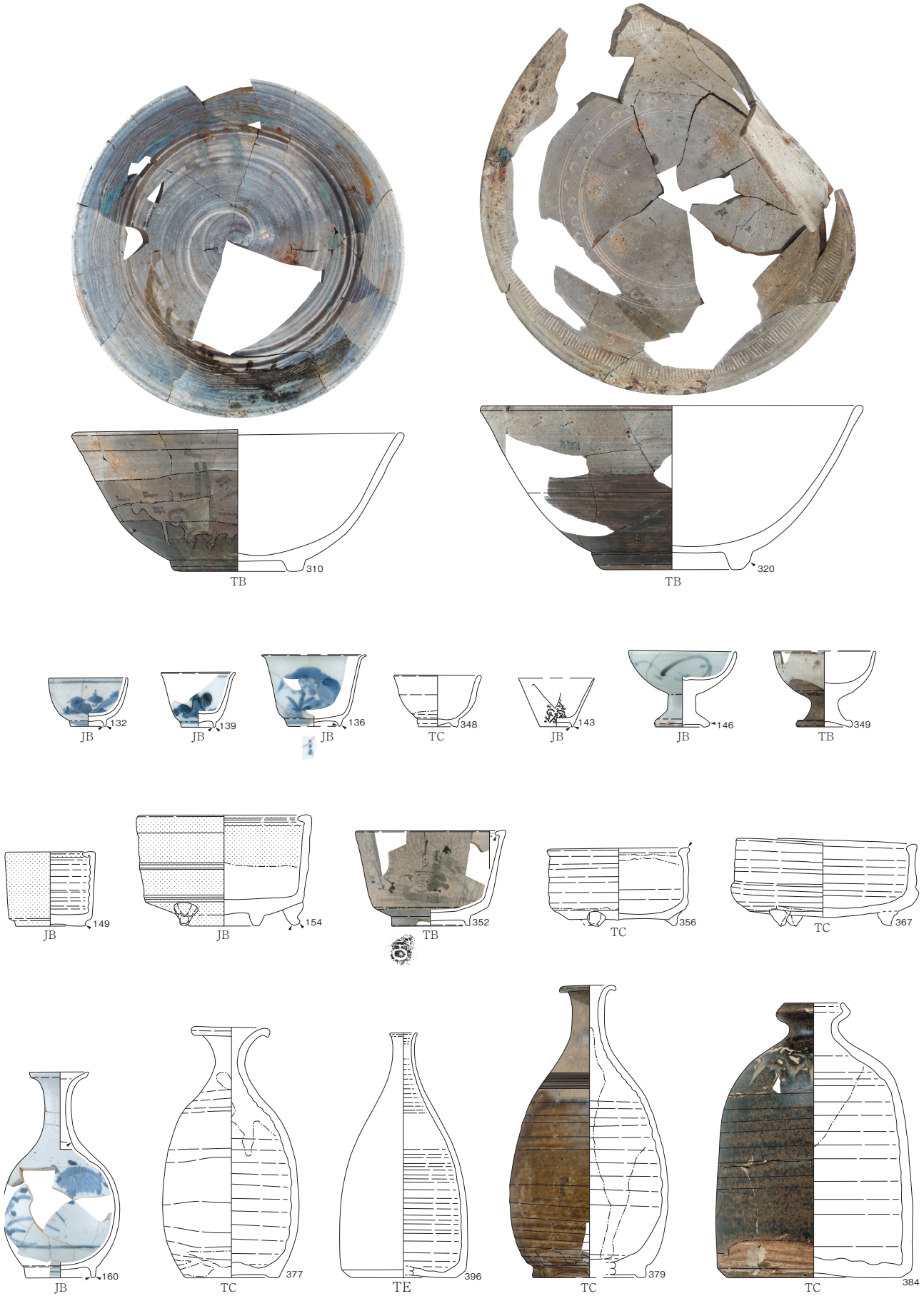




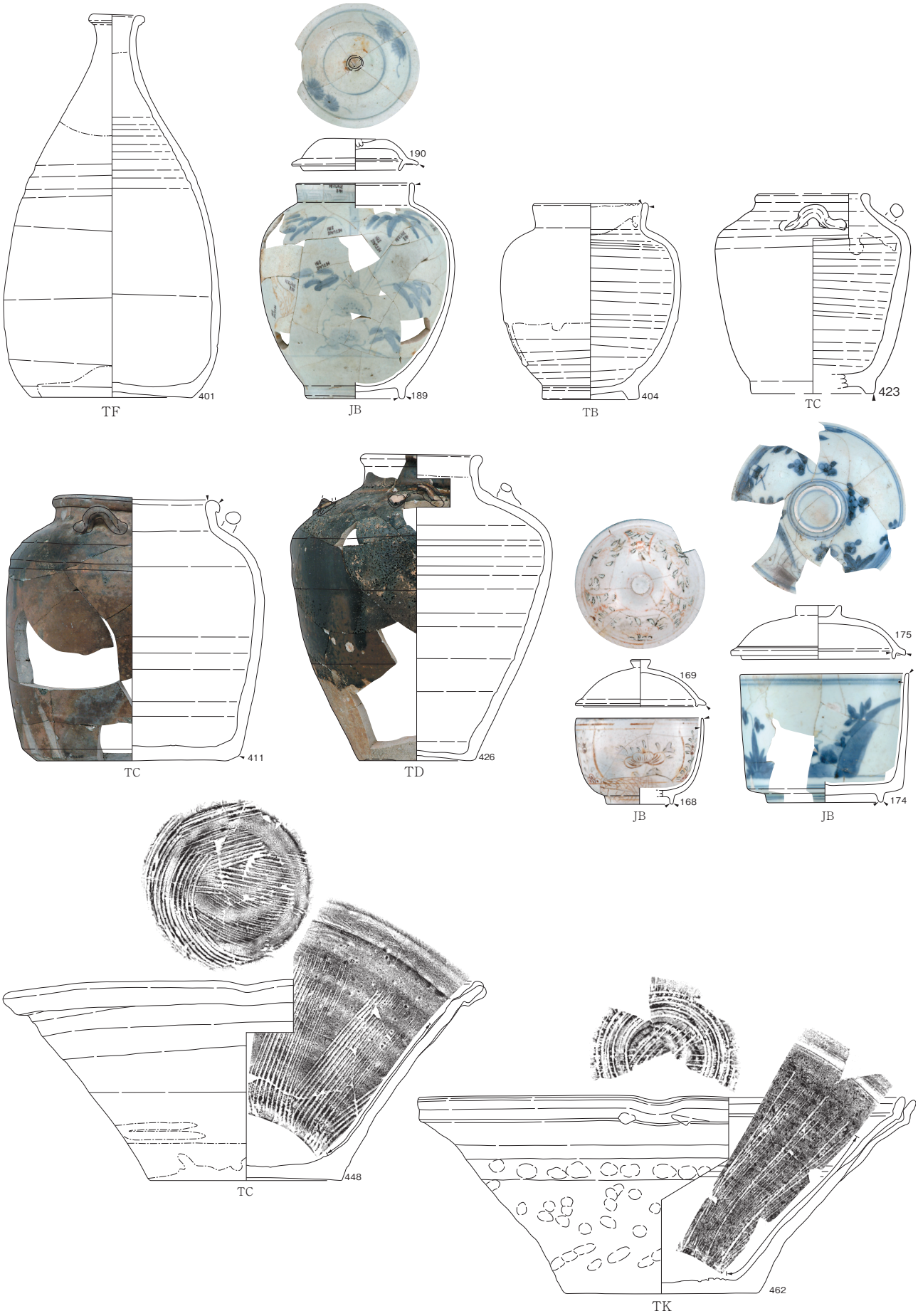




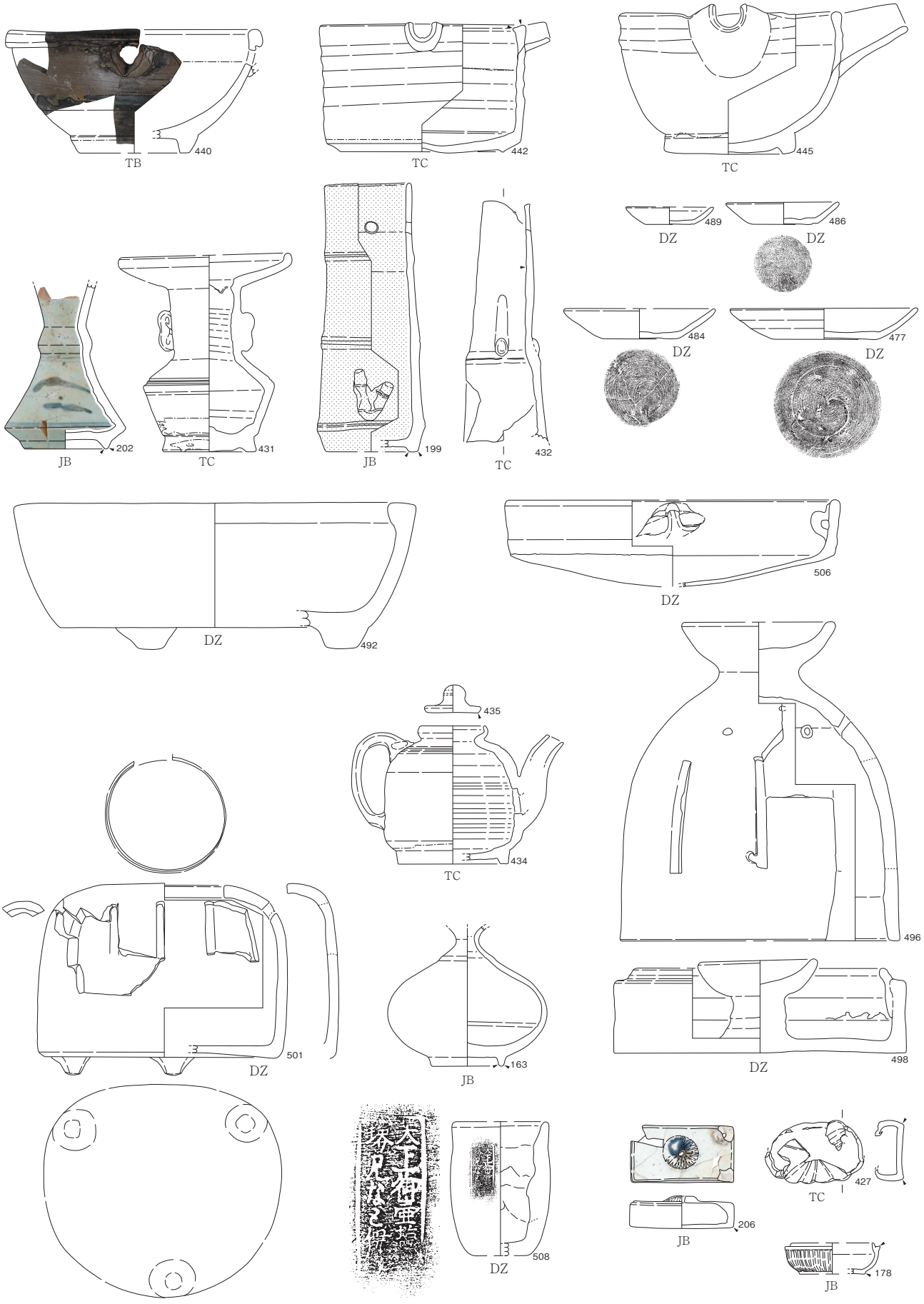
13 図　D 面焼土出土磁器・陶器・土器（5）



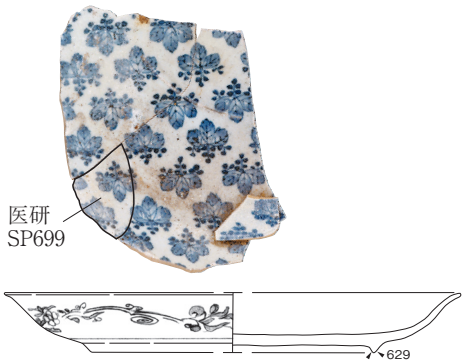
14 図　D 面焼土出土磁器・陶器・土器（6）



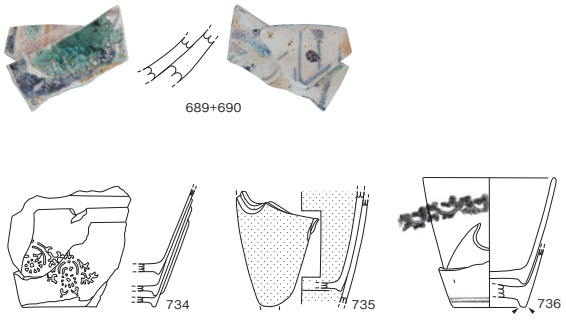
15図　D面焼土出土磁器・陶器・土器（7）



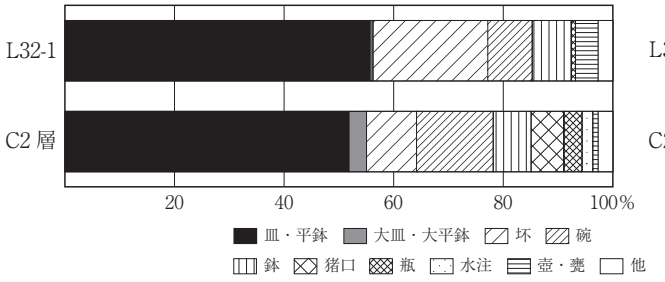
16 図　D 面焼土出土磁器・陶器・土器（8）



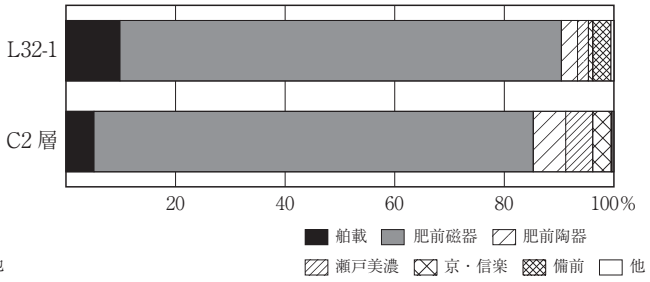
17 図　保管（使用）場所を示す接合事例



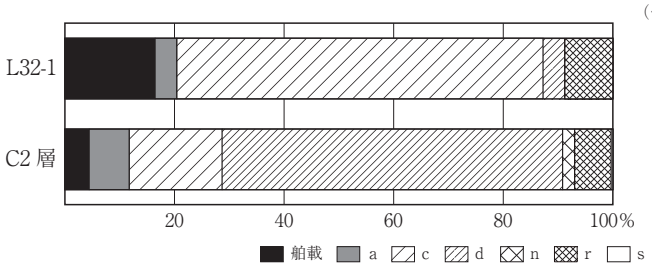
18 図　保管状況を示す事例



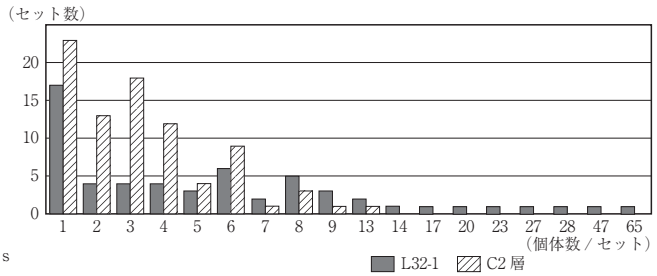
① 器種組成



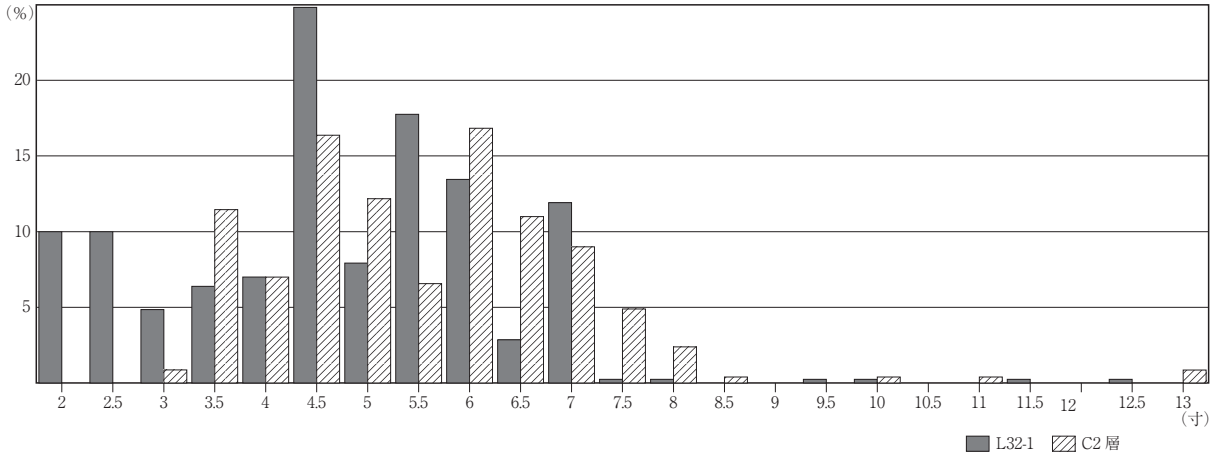
② 産地・胎質組成



③ 皿・平鉢小器種組成



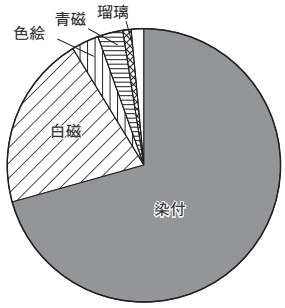
④ 1 セット個体数（報告書掲載遺物より）



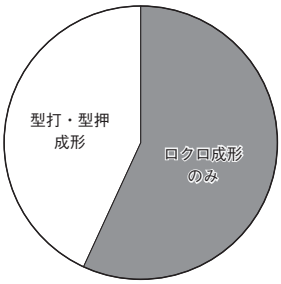
⑤ 皿・平鉢、大皿・大平鉢の口径

（報告書掲載遺物より。2 分 5 厘単位で切り捨て。例：2 寸は 1.75 寸以上～ 2.25 寸未満を示す）

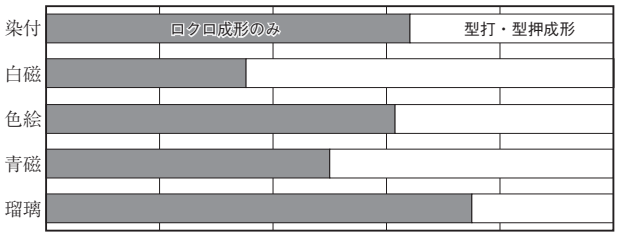
19 図　C2 層・L32-1 の諸様相の比較



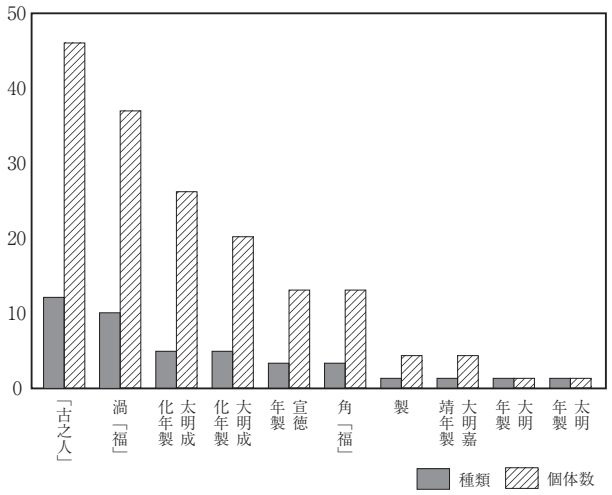
20 図　装飾技法組成
（報告書掲載遺物より）



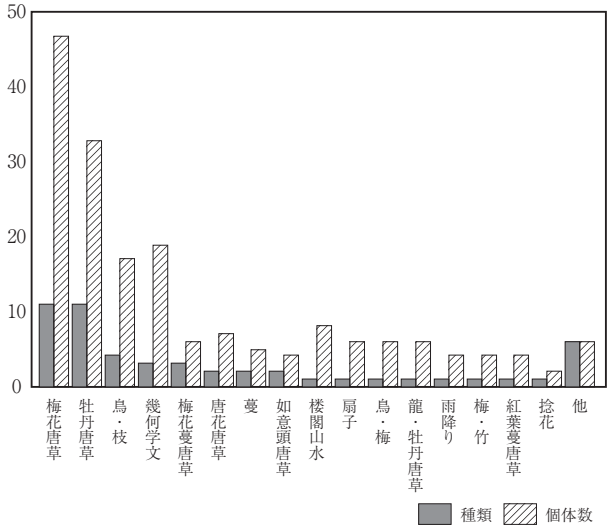
21 図　成形技法組成
（報告書掲載遺物より）

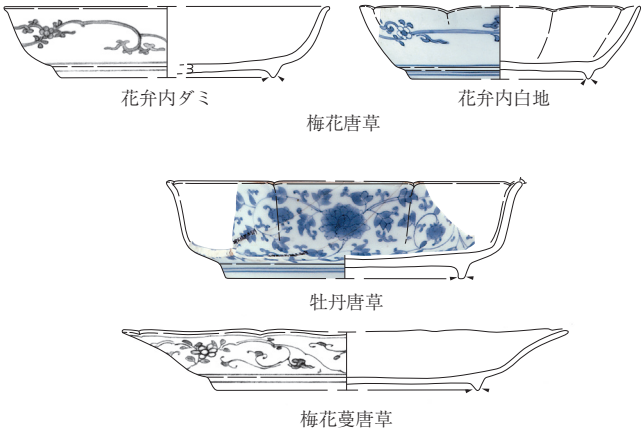


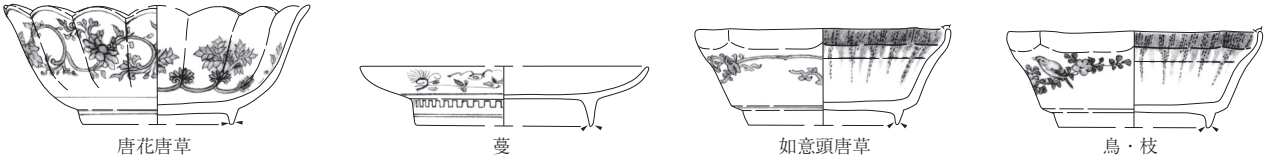
22 図　成形技法と装飾技法
（報告書掲載遺物より）



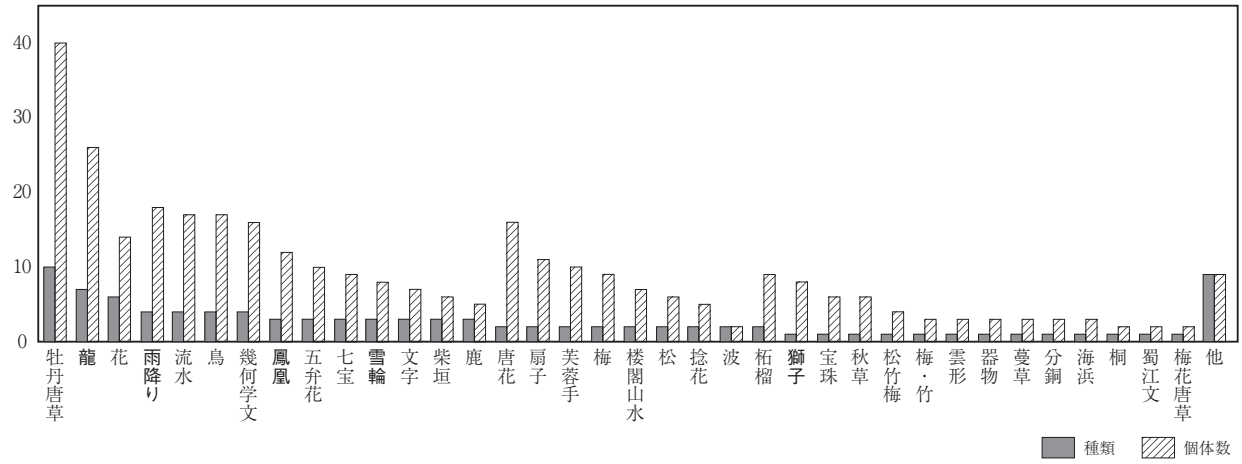
23 図　底裏銘の種類と出土個体数（報告書掲載遺物より）



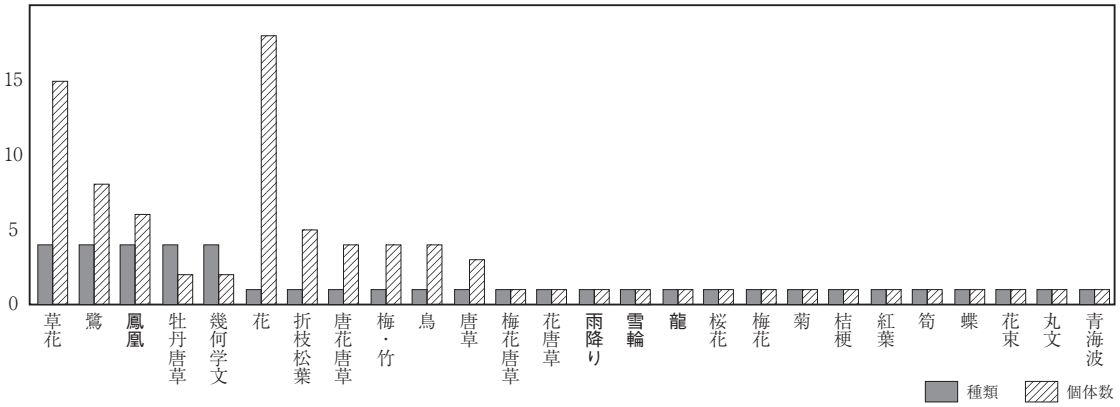




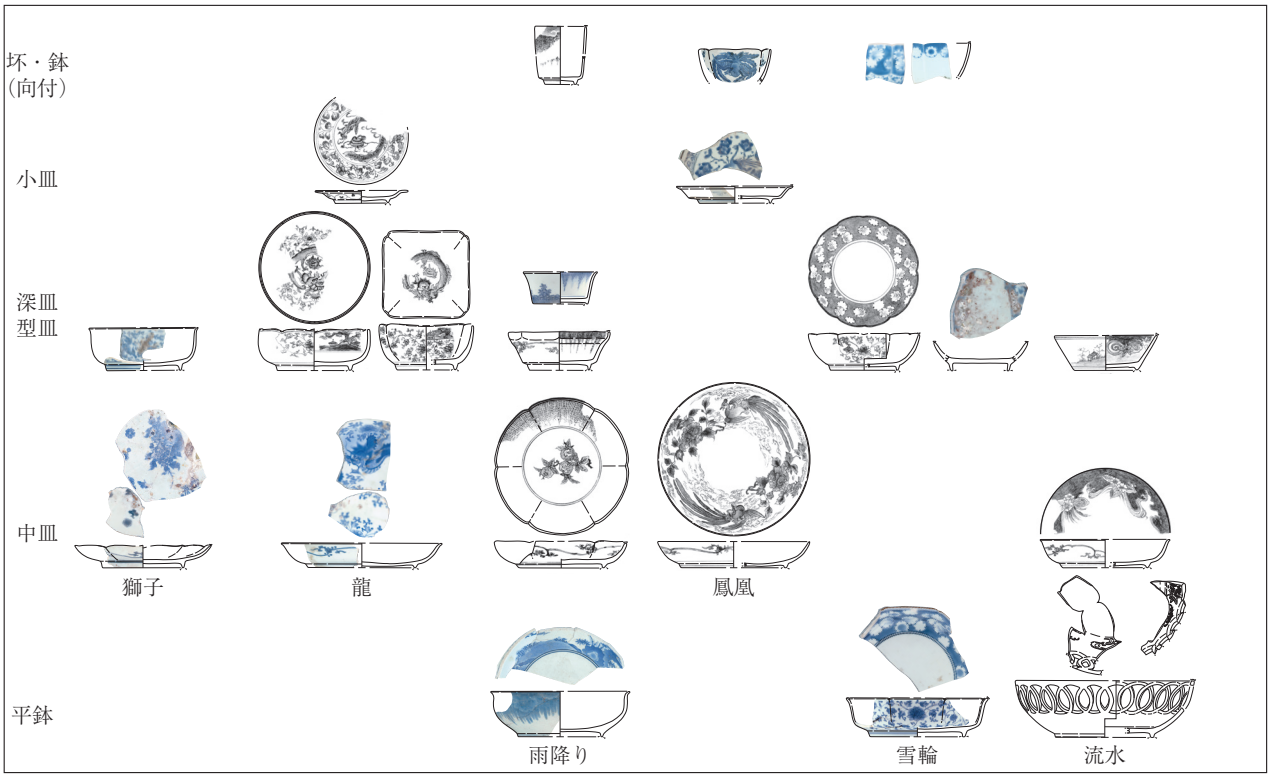
24 図　皿・平鉢の裏文様の種類と個体数（報告書掲載遺物より）



25 図　皿・平鉢の見込み文様（組合せ文様は複数カウント）



26 図　碗、鉢、坏の外面文様（組合せ文様は複数カウント）



27 図　諸形態と共通文様

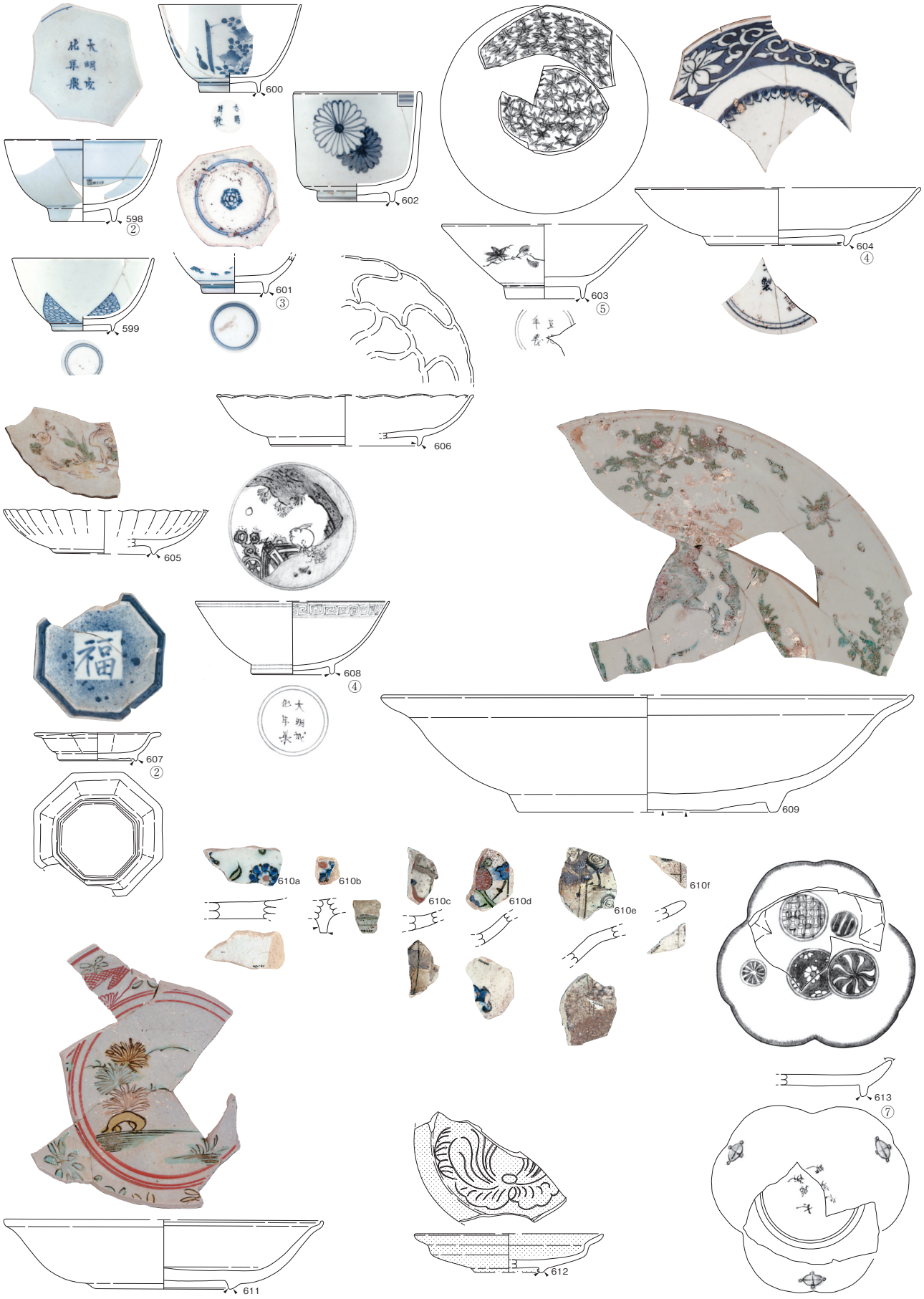
C2 層出土磁器・陶器・土器図版

【凡　例】

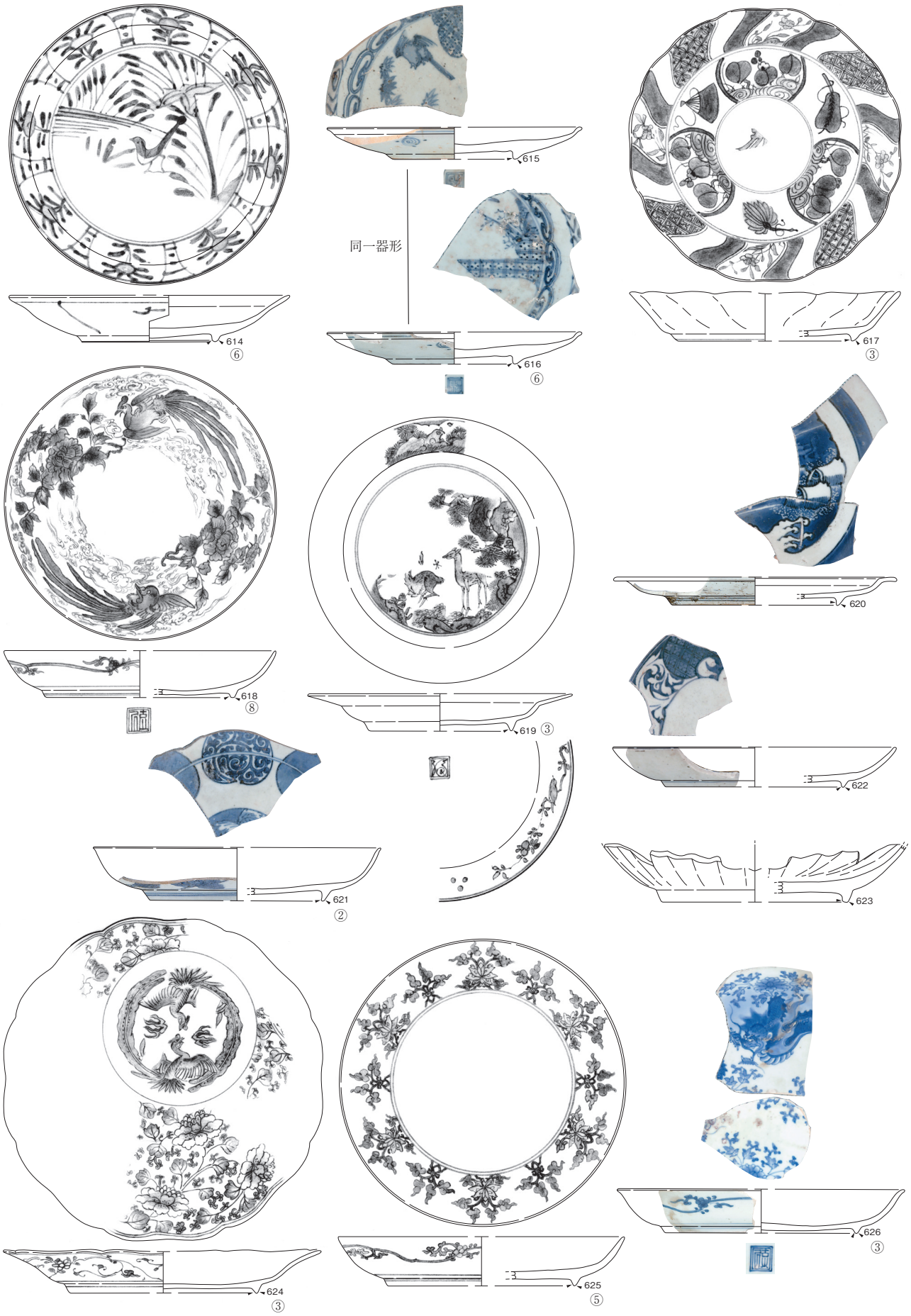
実測図縮尺は 1/4

実測添付の拓本は、3/4

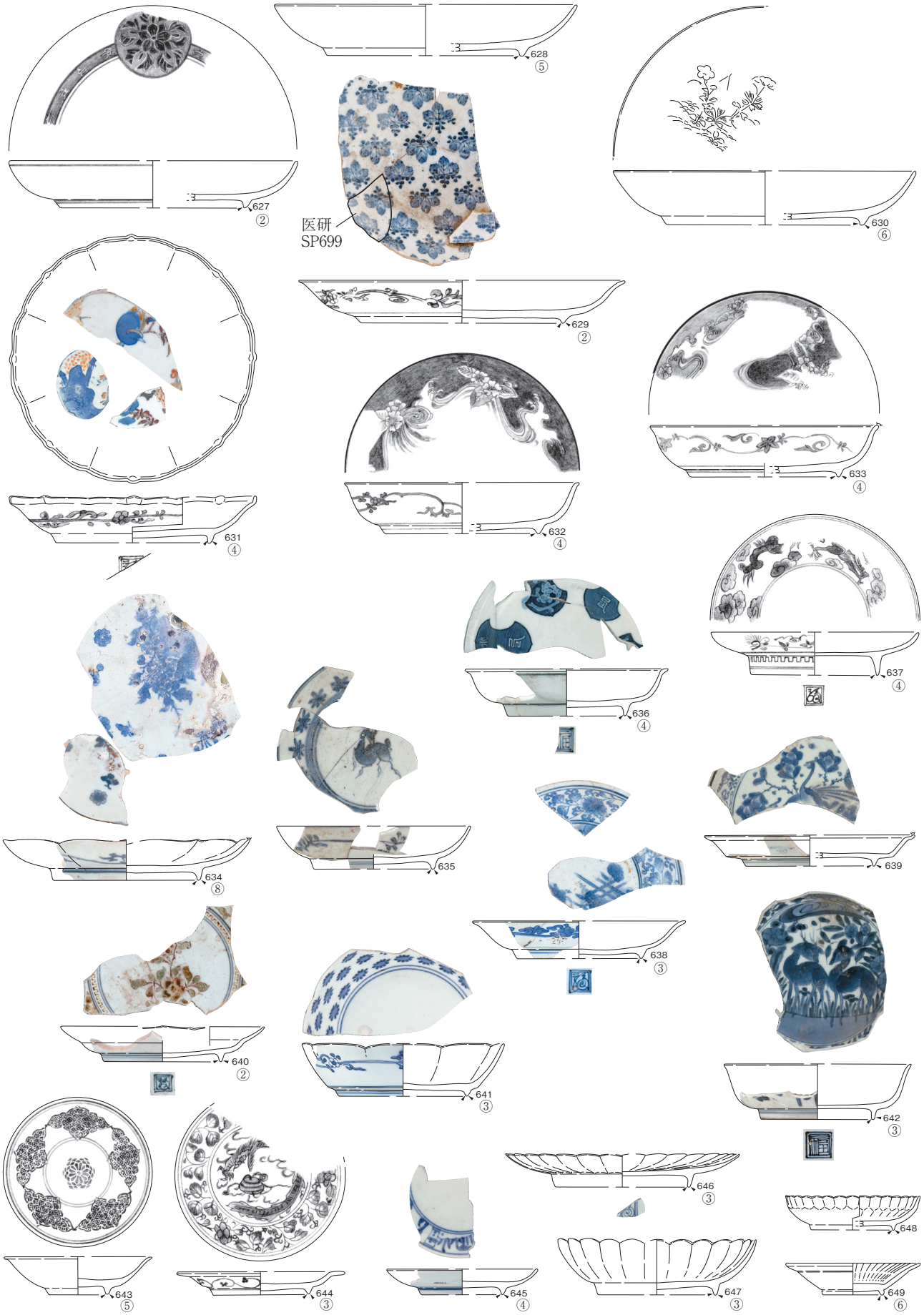
丸数字は推定最少個体数



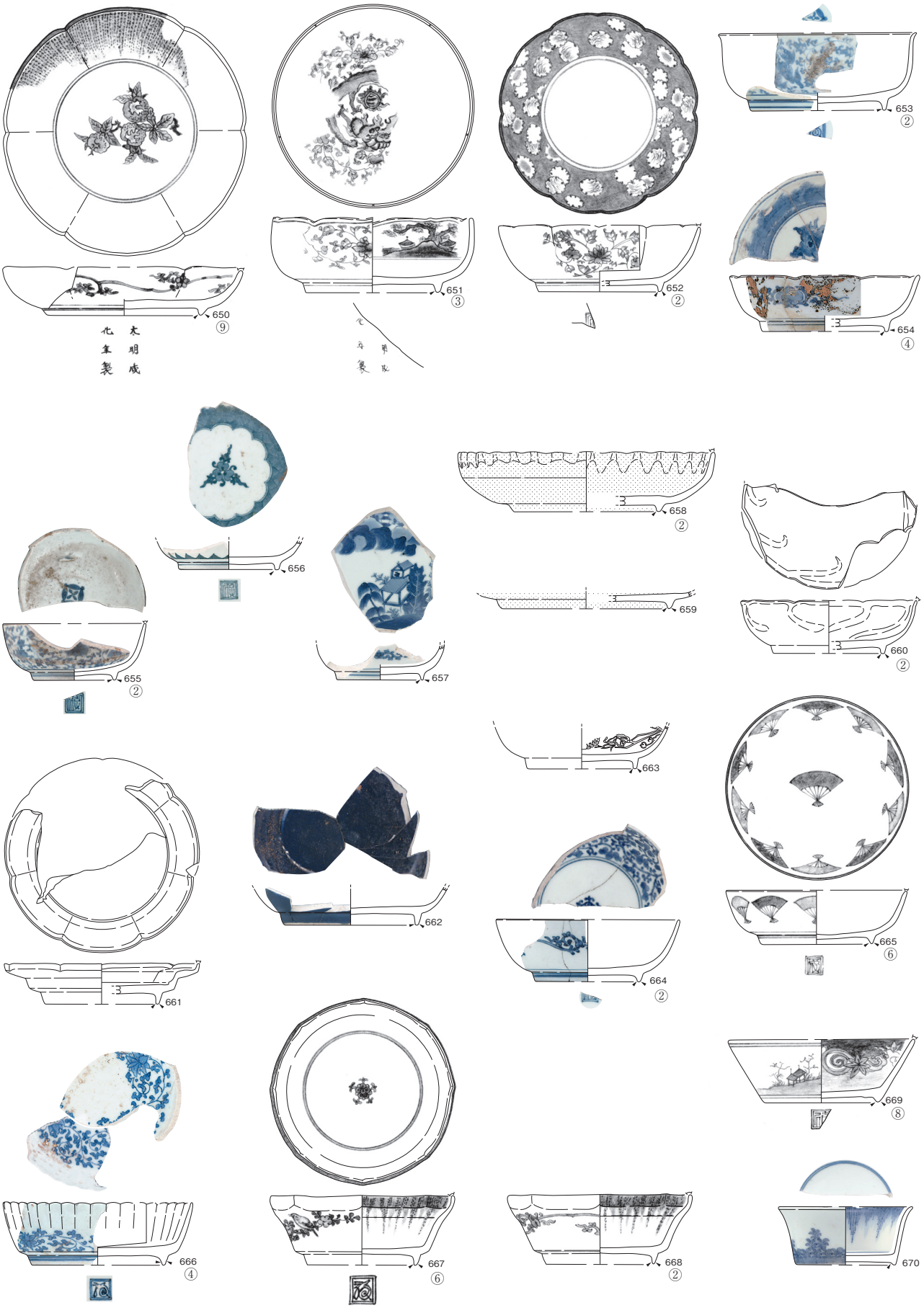
1図　C2層出土磁器・陶器・土器



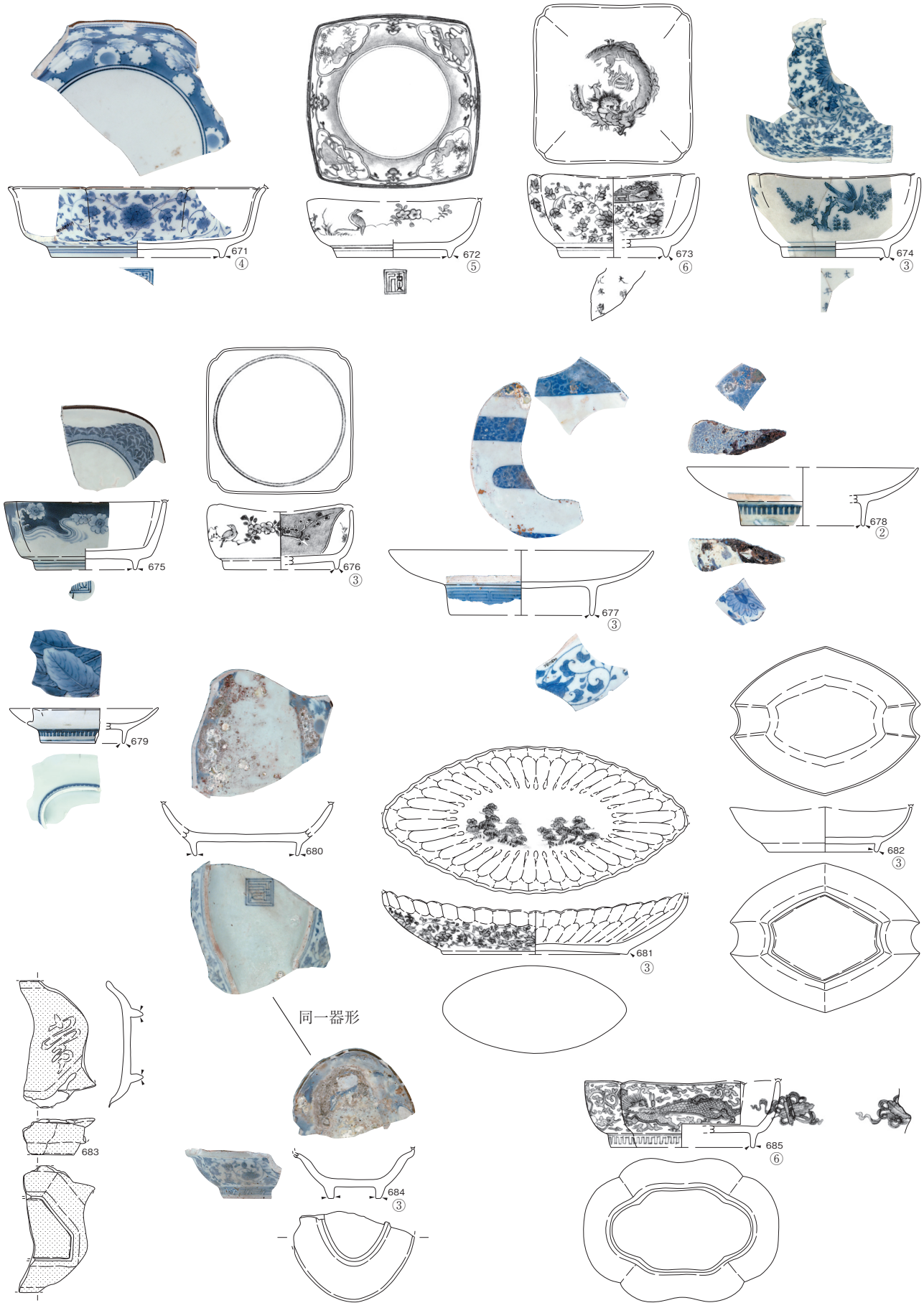
2図　C2層出土磁器・陶器・土器



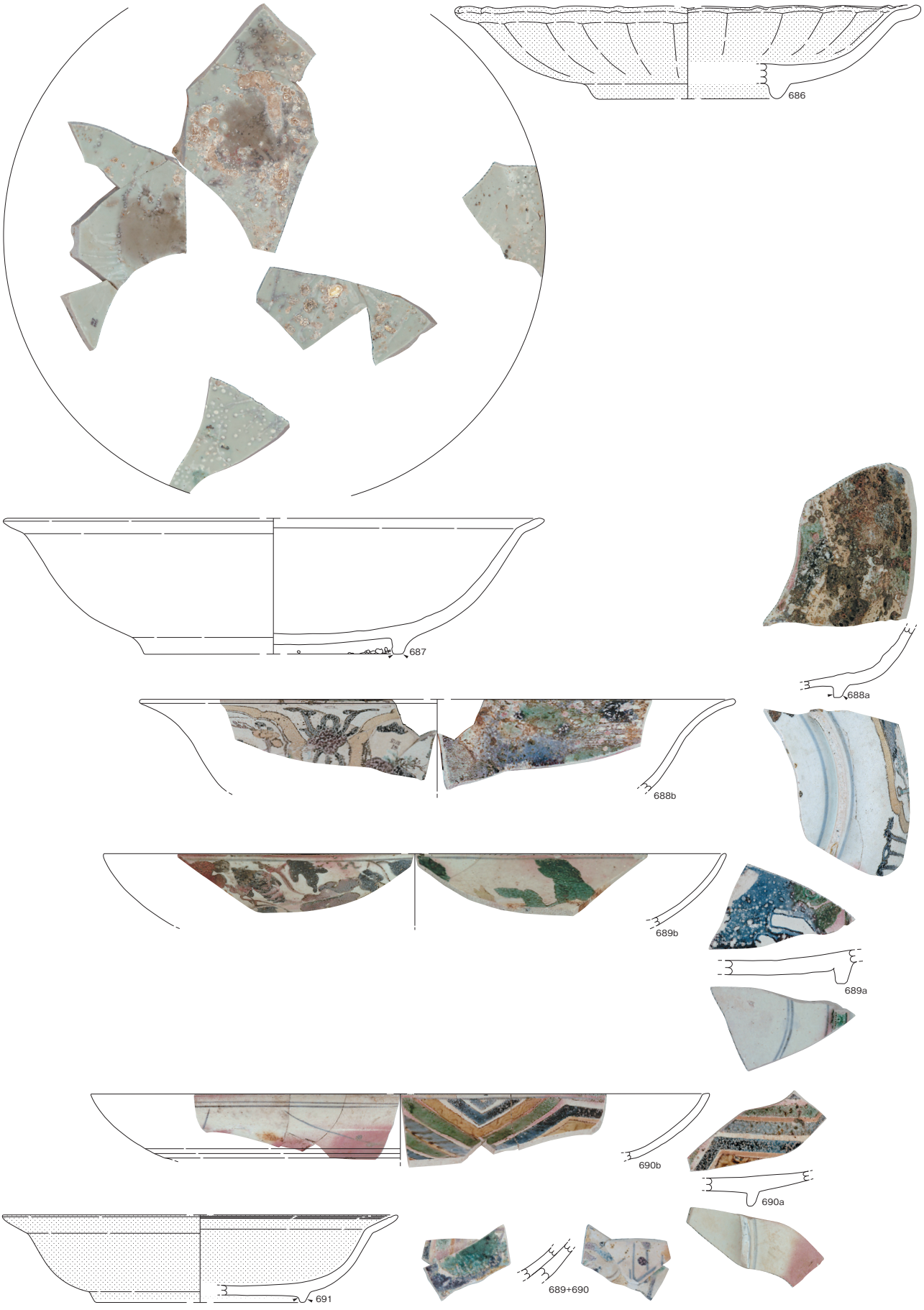
3図　C2層出土磁器・陶器・土器



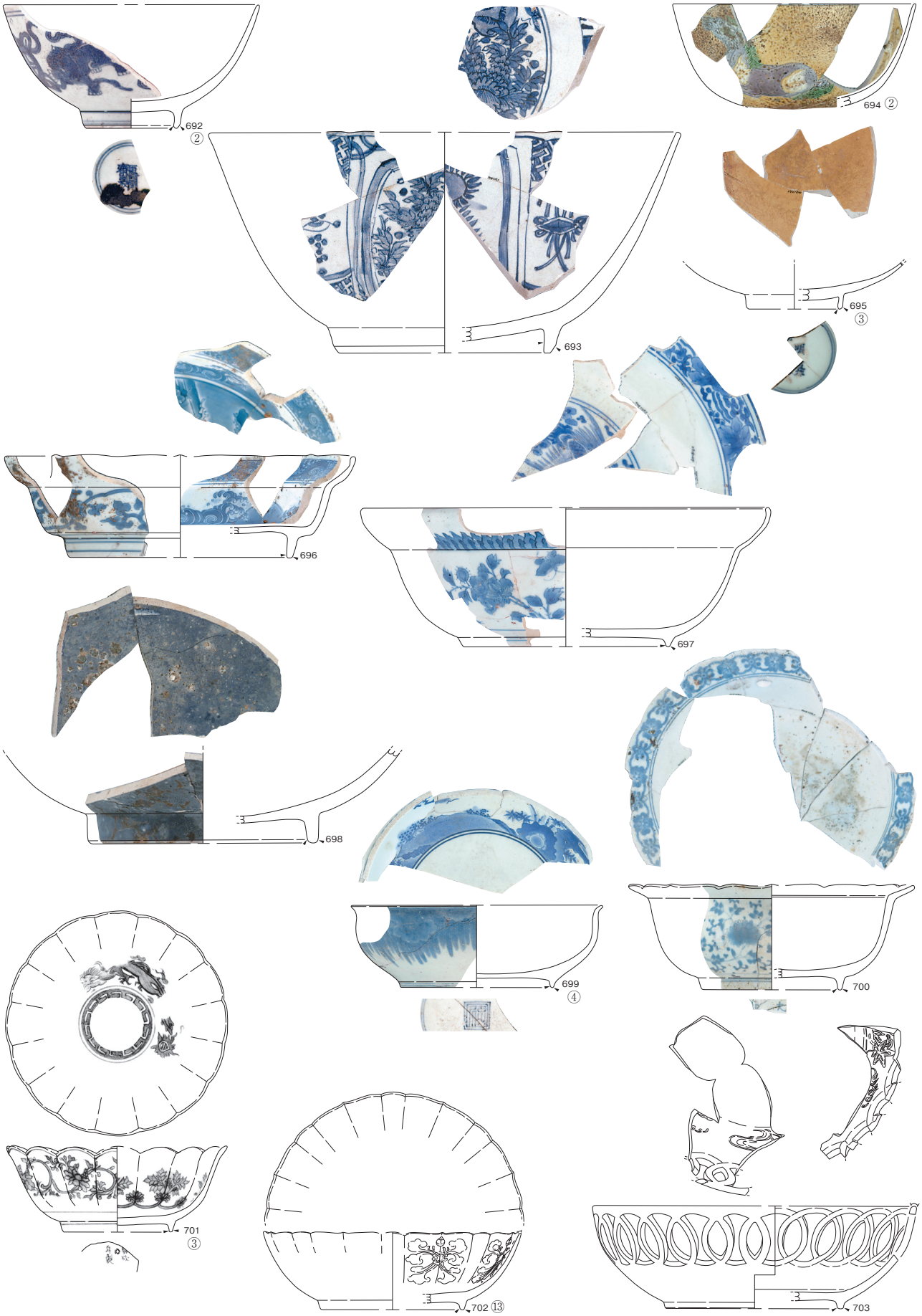
4図　C2層出土磁器・陶器・土器



5図　C2層出土磁器・陶器・土器



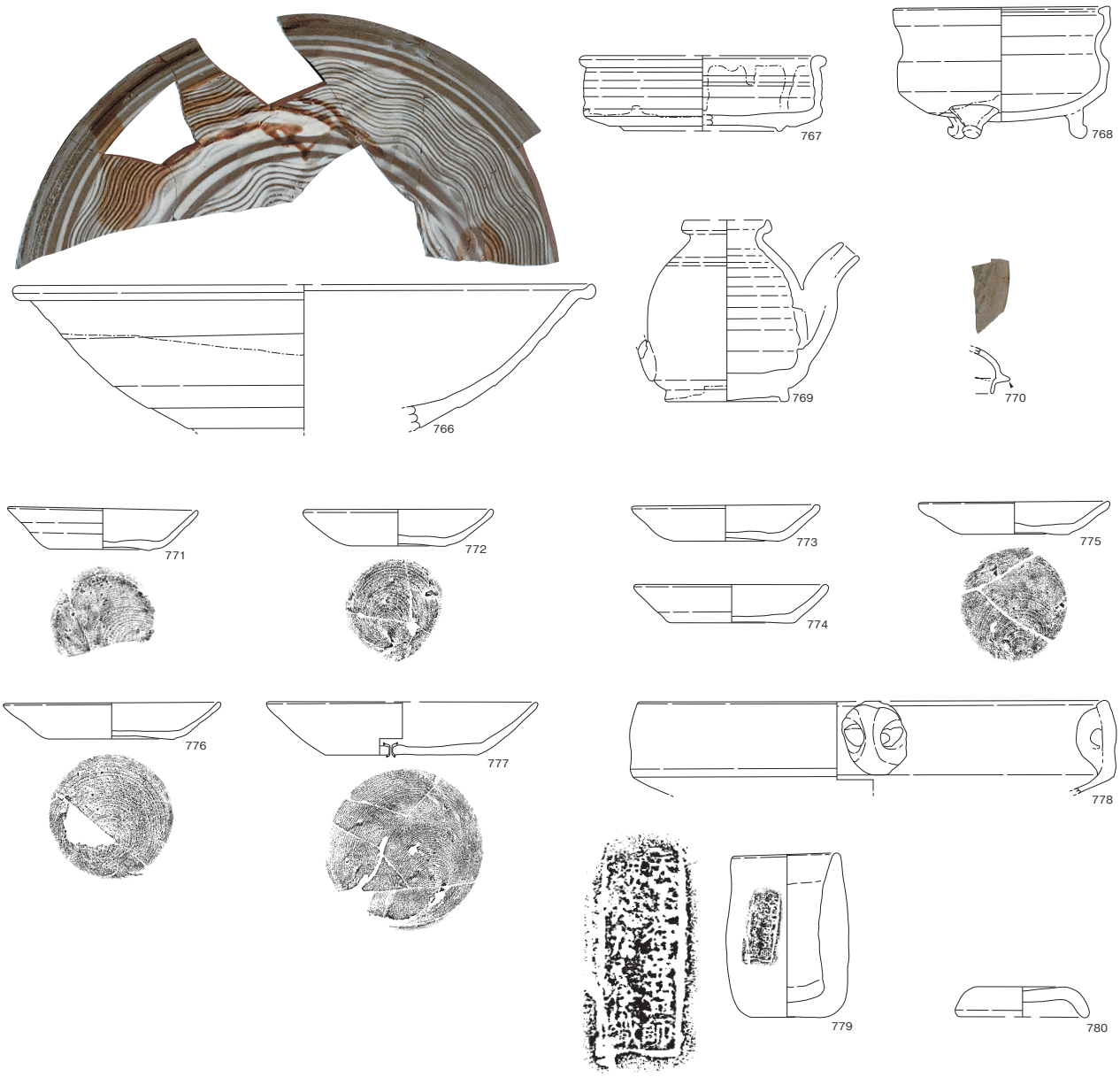
6図　C2層出土磁器・陶器・土器



7図　C2層出土磁器・陶器・土器

8図　C2層出土磁器・陶器・土器

9図　C2層出土磁器・陶器・土器



10図　C2層出土磁器・陶器・土器

C2 層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術

髙島 裕之（専修大学文学部）

1．はじめに

南川原山。有田の中では酒井田柿右衛門家が陶業を営んだ窯場として知られている。消費地では、「肥前磁器」という大きな枠組みの中で生産地推定が行なわれることもある。しかし、この地域で生産された一部の高品質製品について、主に 1670 年代～ 90 年代を中心として他の有田の窯の製品と区別できる例がある。すなわち「柿右衛門」、「藍柿右衛門（藍柿）」、「柿右衛門様式」、「典型的な柿右衛門様式」、「広義の柿右衛門様式」、「延宝様式」などと呼ばれている一群である。この年代には大川内山で作られるいわゆる鍋島焼を除いて、南川原山が有田の高品質製品をリードして焼成していた。つまり上記の一群は、「南川原山様式」と 1 つにまとめて考えて良い。

東京大学医学部附属病院病棟地点 C2 層出土の資料には、当時をリードした南川原山様式の製品が多く含まれている。この資料については、九州近世陶磁学会、近世陶磁研究会などで発表され、近世肥前磁器編年の修正の起因ともなった。今回はその南川原窯産の高品質製品を詳細に観察し、その製作技術に触れながら資料について評価を加えてみたい。

2．南川原窯の概要

最初に生産地についてふれておきたい。現在の有田町の南西部に位置するのが南川原地区である。磁器の原料地、泉山の発見に伴ない有田窯業の核となった内山地区と相対する外山地区の一角をなしている。内山地区よりも有田川の下流にあたり、農地として利用されてきた町の南西端までの一帯の地域が、「南川原」とよばれている。南へいくほど標高が高く、上南川良川の流域沿いに上流（南）から、上南川原山、下南川原山、平地に出て南川原と 3 つの小地区に分けることができる。

現在遺跡として登録され 17 世紀後半に操業していた窯跡は、下南川原山地区に属する南川原窯ノ辻窯、平床窯、柿右衛門窯、上南川原山地区に属するムクロ谷窯、樋口窯がある。南川原窯ノ辻窯、柿右衛門窯の物原出土陶磁器の変遷をたどると、併行した操業期の中で共通する変化がみられる。双方の窯に同種、同品質の製品もみられることから、陶工同士の交流も考えられる。1 つの推測として、同時に操業していた窯の双方に、同じ陶工集団が焼成室を所有し生産を行ない、海外輸出も含めた多大な需要量に対応した可能性が想定できる。

3．南川原窯の製作技術

南川原地区では、一部の資料について、高品質の製品を厳密な一定の水準に基づいて作るための技術を昇華させる形で、「南川原山様式」が誕生した。特に成形の際の型打ちや、筆での施文の際の輪郭線の変化が、同品質の製品を一定の水準に基づいて作るために多用され、洗練されていった。

(1) 型打ち成形

型打ち成形は、ロクロ成形で丸く仕上がった後に、半乾きの状態で型に入れ、一手間加える方法である。日本の磁器生産の開始と共に、同じ器形を製作する成形方法として、型を用いた技術が導入されたが、高品質を保持するうえでも利用されるようになった。型打ちは型を用いた施文も可能であり、複数製品の装飾を同質に仕上げることができる。また型打ちをすることで高台付近を叩き締めるため、焼き割れも少なくなるという。特に 17 世紀後半以降の南川原山では顕著にみられる工夫であり、現在もその技術は継続して保存されている。

(2) 施文法の変化

17 世紀後半の中で染付製品における筆を用いた施文時の工夫をみると、文様の輪郭線に太線から細線への変化がみられる。理由として文様の筆致が同じようにみえるようにするため、不安定な太線より細線が選ばれたのであろう。さらに細線と共に文様の種類に合わせた輪郭線の線種の使い分けや、中を塗る濃みに段階的な色調を用いるなど、表現の選択肢も増加させている。

また空間を埋めることで、その空間の各文様の没個性化を図り、施文の粗を補う例がある。この方法は 18 世紀以降も多用されている。

輪郭線を整える工夫として、仲立ち紙の使用がある。仲立ち紙は線描き（輪郭線）の文様を写すのに使われるが、南川原地区では、南川原窯ノ辻窯と柿右衛門窯の

製品の中で使われたことが指摘されている（山本文子 2010. p .36-37）。

現在の今右衛門窯では、施釉前の下絵付、本焼き後の上絵付のそれぞれで、仲立ち紙を用いている。しかし線描きの際にはただなぞるだけではなく、描く時に全体の絵柄を見ながら雰囲気を意識してバランスを取り、葉の形を丸くするか細くするのか、などが考えられている。線１本でも違えば、雰囲気や絵柄が変わるといい、線の太さに気を遣うという。あまりにも線がきっちりしすぎて、一定の太さの線であると素っ気ないので、流れのある味のある線を描くことを心掛けているという。近世の描き手も、基本的に文様を写す際には、写すことそれ自体が大きな目的ではなく、それぞれの製品の全体の運筆に気を配って、輪郭線を描いていると考えられ、これが揃いの製品の施文の中での同質の幅を生み出している。

以上のように、器形、そして装飾の見た目について、高水準の中で同品質を保つための製作技術をみることができる。そしてその同品質の幅も、まったく同じ物を求める現在の我々の感覚に、より近い形で突き詰められていたのではないだろうか。つまり 17 世紀後半の南川原窯で洗練された技術は、上質の揃いの製品を製作するための技術とも言い換えることができる。

４．Ｃ２層出土資料の検討

ではＣ２層の出土資料について、南川原窯の製品との比較という視点からみていきたい。南川原窯ノ辻窯の物原では、1650 年代末の段階から上質な皿へと製品の主体が変わる。Ｃ２層の資料では、製品の主体が変わり「南川原様式」が確立される以前の 1650 年代 ~1660 年代の製品についてもみることができるが、中心となるのは 1670 年代 ~1682 年の製品と考えられる一群である。発表者が成形、施釉の処理、施文などの視点や窯跡資料との共通点から、1670 年代以降の製品について、南川原の製品と考えているのは次の通りである。

染付、色絵染付では 618、625、626、629、631、632、633、634、637、639、641、646、650、651、652、653、655、656、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、680（684）、681、685、696、697、699、700、701、708、709、710、715、717 である。1670 年代以前の 17 世紀中頃以降の製品を加えると、617、619、620、621、622、624、627、636、638、640、642、654、657 も含む。下線は型打ち成形の製品であり、それが多用されていることが確認できる。

窯跡の資料との比較では、南川原窯ノ辻窯、柿右衛門窯で出土する異体字銘と一致する例が 618、626、655、656、671、672、675、680（684）、699、710 である。この銘の例は、未報告資料の中では７寸以下の皿のみではなく、大きいサイズの鉢の底部にも確認できる。文様やデザイン、型の一致では、618（柿右衛門窯１次調査 CO43（B 窯第 10 室北側物原）トレンチ６層、鳳凰文）、668（佐賀県立九州陶磁文化館の南川原窯ノ辻窯調査（大橋 1986.Fig.6-5）、雨降り文、五弁花文）、641（柿右衛門窯３次調査Ｂ窯第７・８室北側物原横断トレンチ２層、花文）、681（九州陶磁文化館の南川原窯ノ辻窯調査（大橋 1986.Fig.9-14）、同じ型）がある。他に高台を高くする例として 637、685 があり、同種の例は柿右衛門窯、南川原窯ノ辻窯の製品に一定量みられる。過去に大川内山以前の南川原の御道具山を考える際にいわゆる鍋島焼に近い例として例示されたこともあるが、高台を高くする器形そのものが、高品質磁器製品の一形態であろう。

Ｃ２層の資料同士で染付文様が共通する例としては、雨降り文（650、667、668）、竜または鳳凰＋牡丹唐草（618、626）、竜牡丹文（651、673）、桜流水文（632、633、675）、桐文（629、717）、七宝文（653、655）などがある。そして雪輪文＋牡丹唐草文という内外面文様の組み合わせ、高台内銘が一致する例が、複数器種にわたってみられる（652、671、680（684）、710）。高台内銘は、南川原特有とされている例である。これらは７寸以下の器種であり、大型品の中には確認できないことが特徴である。おそらく膳のうえで、同時にセットで使用できる大きさの製品群と推測される。この製品は一括で注文されたと共に、同じ窯内で生産された商品が一括で受容されている様子が反映されている。「揃いの器」という概念を考えた時に、同形の製品の数量が揃っているということの他に、同じ柄の製品について様々な器種をセットで揃えて使っていたということが挙げられる。施文技術の進歩によって、その双方に南川原の生産技術が対応していると考えられる。他に主文様だけではなく、外面文様が唐草以外で共通する例もある。外面に枝鳥文を描く例は、667、674、676 があり、大英博物館所蔵資料にみられる例は、南川原特有の銘が配されている（資料番号 Franks. 1289.+）。

また現在も完全な形で残る博物館所蔵資料との類似例は、発掘調査報告書にも掲載されているが、新たに源右衛門窯古伊万里資料館の資料と一致する例を確認した。

白磁では 623、628、630、647、648、660、661、663、682、702、703、704、705、711、712、734、742、743 である。下線は型打ち成形の製品であり、型打ちによる

施文も多用される他、線彫りの例（630、742、743）が確認できる。乳白色の白磁が多く、また口銹装飾を伴なう例が確認できる。乳白色の素地に色絵を施した例は確認できない。他に単色釉の青磁、瑠璃釉の例では658、659、662、713、735がある。683も富士山型の型を使う糸切細工成形で、素地が白色であり可能性がある。658は九州陶磁文化館の南川原窯ノ辻窯調査で同じ口縁形を持つ白磁が確認されている（大橋 1986.Fig.6-10・12）。

このようにC2層出土資料として、発掘調査報告書に掲載されている肥前産（有田産）の皿の多くが南川原窯産であり、寸法も基本的に7寸以下に限定されることが解る。それらは複数個体出土している例が多い。そして特に染付に関して、文様、銘款の共通性がみられることは、C２層の資料の一部について、同じ窯で生産された製品が、大量に受容された様子を物語っていることも考えられる。

5．南川原窯製品の受容のあり方の多様性

南川原山の製品は、海外に輸出され、「Kakiemon」が広く受けれられた。現在も各地でコレクションが残存しており、イギリス、ドイツでのコレクションは、わが国でも著名である。オランダ国内では東部のツウィクル城（Twickel Castle）のコレクションが知られており、室内装飾、実用品として使用された南川原窯の製品が、染付・色絵共にセットでみることができる。わが国のC2層の出土資料とは相違点があり、特に乳白色の白磁に施された色絵がまとまってみられる点、全体としてサイズが7寸皿を中心とし、やや大きい傾向がみられる点である。つまり南川原窯に求められた製品の種類について、注文の相違があると考えられる。C2層での南川原窯製品の分析を通して海外のコレクションと比較することで、漠然と「国内向け」、「海外向け」といわれてきた製品の区別について、明確にできる可能性がある。

6．まとめ

以上、最後に全体をふりかえり、C２層の有田南川原窯製品についてまとめていく。17世紀後半の南川原窯で洗練された技術の内容は、上質の揃いの製品を製作するための技術である。これらの技術が用いられた皿、特に寸法が基本的に7寸以下に限定された例が、単体で出土するのでなく、複数個体でC2層では確認できる。さらに同じ器形だけではなく，複数の器形を網羅する形で、内外面文様の組み合わせ、銘款が一致する例がある。同じ窯で生産された製品が大量に受容されている様子が窺え、コレクションとしての趣向も垣間見えるということができる。いっぽう同じ皿という器形を例にして、国内外で形成されたコレクションを比較すると、明らかに趣向の違いがみられる。つまり、C2層の資料は大名屋敷の御殿空間で使われた器の実像を明らかにできることはもとより、国内外の受容に対応した南川原窯の高品質製品生産の全体像を明らかにしていくうえで、要となる資料である、と位置づけることができるのである。

【引用・参考文献】

大橋康二　1986『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯－肥前地区古窯跡調査報告書第３集－』佐賀県立九州陶磁文化館

堀内秀樹･坂野貞子　2008「江戸の陶磁器消費と柿右衛門」『柿右衛門様式研究－肥前磁器売立目録と出土資料－』九州産業大学 .pp.475-605

髙島裕之　2009『有田古窯跡出土陶磁器の研究－ 17 世紀における有田・南川原山の陶磁器生産の解明－』雄松堂出版 日本博士論文登録機構

駒澤大学禅文化歴史博物館（髙島裕之編）2010『考古資料展４「有田焼の考古学」図録　窯跡資料にみる有田焼の変遷－有田･南川原窯ノ辻窯出土の陶磁器－』

成瀬晃司　2010「加賀藩・大聖寺藩本郷邸出土の鍋島－天和２（1682）年の火災に伴う資料を中心に－」関和男編『改訂版初期鍋島』創樹社美術出版 .pp.434-456

山本文子　2010「近世肥前磁器絵付技術の研究－肥前磁器絵付技術における仲立ち紙使用の成立過程－」『青山史学』第28号，青山学院大学文学部史学研究室 ,pp.31-48

髙島裕之　2011「「柿右衛門」と有田・南川原窯」『人文科学研究所年報 41』専修大学人文科学研究所 .pp.101-120

髙島裕之　2013「有田・南川原窯製品の生産技術の背景－江戸遺跡での出土状況と合わせて考える－」『江戸の武家地出土の肥前磁器－罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門－』近世陶磁研究会 .pp.212-229

髙島裕之　2015「日本における高品質磁器製品の生産と受容の背景」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第１巻』雄山閣 .pp.47-62

髙島裕之編　2016『有田焼のしごと　今右衛門窯・源右衛門窯窯業聞き取り調査報告書』専修大学陶磁文化研究室